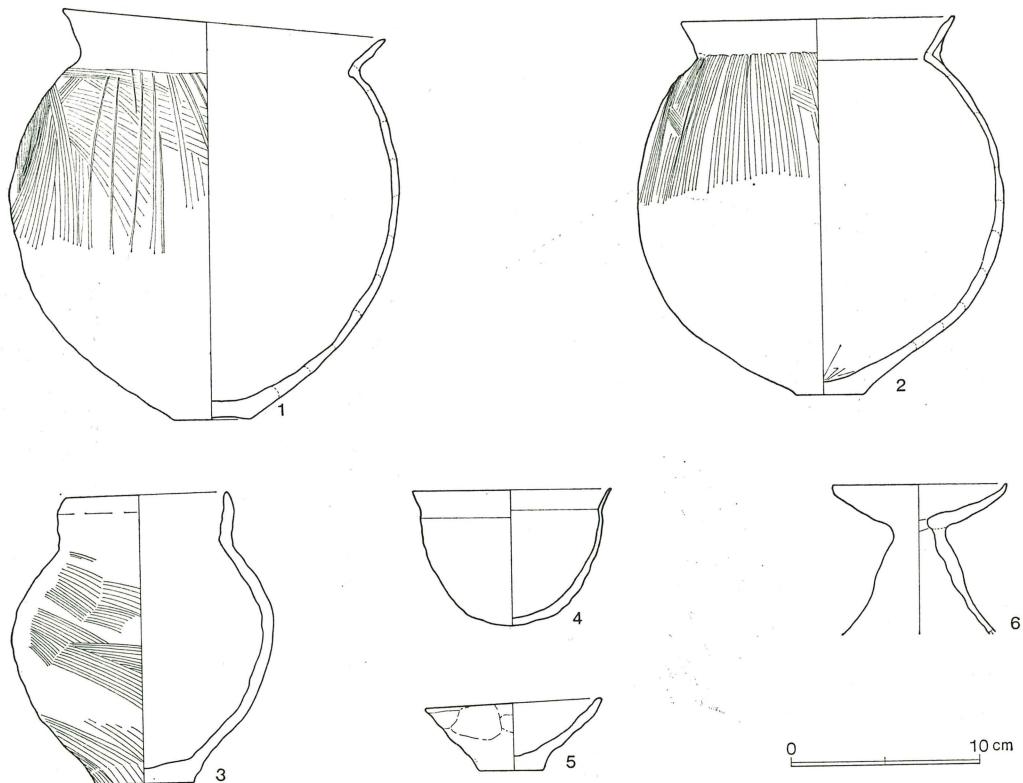


第98図 第26号住居跡



第99図 第26号住居跡出土遺物

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	3	口径 8.7 器高 15.3 最大径14.0	体部中位で膨る。口縁は直立し、口端は外削ぎ状呈する。口端内面にゆるい稜をもつ。暗黄褐色。砂粒多。	内面ナデ、口縁内外ヨコナデ、 体部外面粗い斜方行のハケ目調整	1/2欠
鉢	4	口径 10.5 器高 7.2	口縁外反し、内面に稜をもつ、輪積みの凹凸顯著。黒色。砂粒多。	内面ナデ、口縁内外ヨコナデ、 体部ヘラナデ。	1/2欠
手捏ね	5	口径 9.4 器高 3.6	手捏ね品。直線的に開き厚手。 黒色。砂粒多。	器面に粗いヘラナデ。器面に指頭圧痕残る。	口縁一部欠
器台	6	口径 9.2 現存高 7.9	台部は肥厚してそぼまる。器部は強く外反して開き端部直立気味 中央部に孔をもつ。灰黄褐色。砂礫多。	器内面、口端丁寧なナデ。他は 風化著るしく不明瞭。	鋸部欠

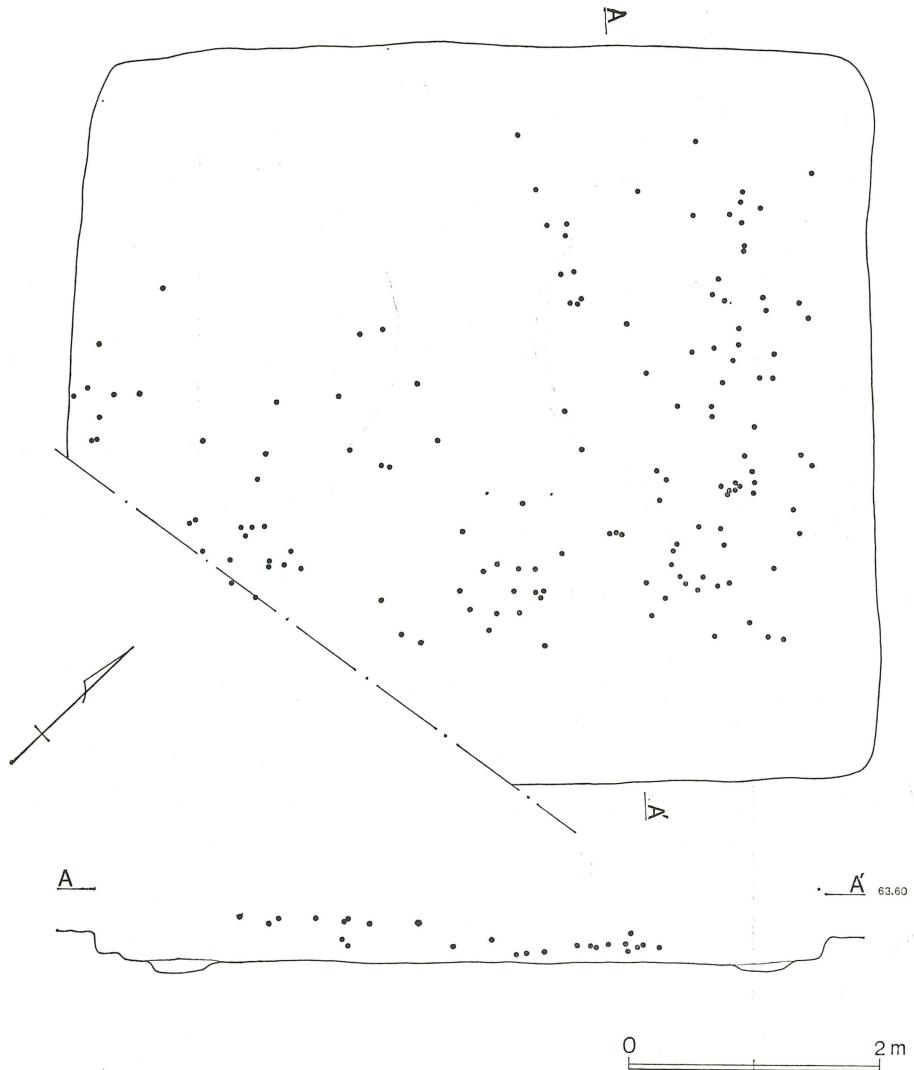
第27号住居跡（第100～101図）

第5調査区ハ～ニ—44～45区で検出された。遺構南西コーナー部は調査区域外となっている。

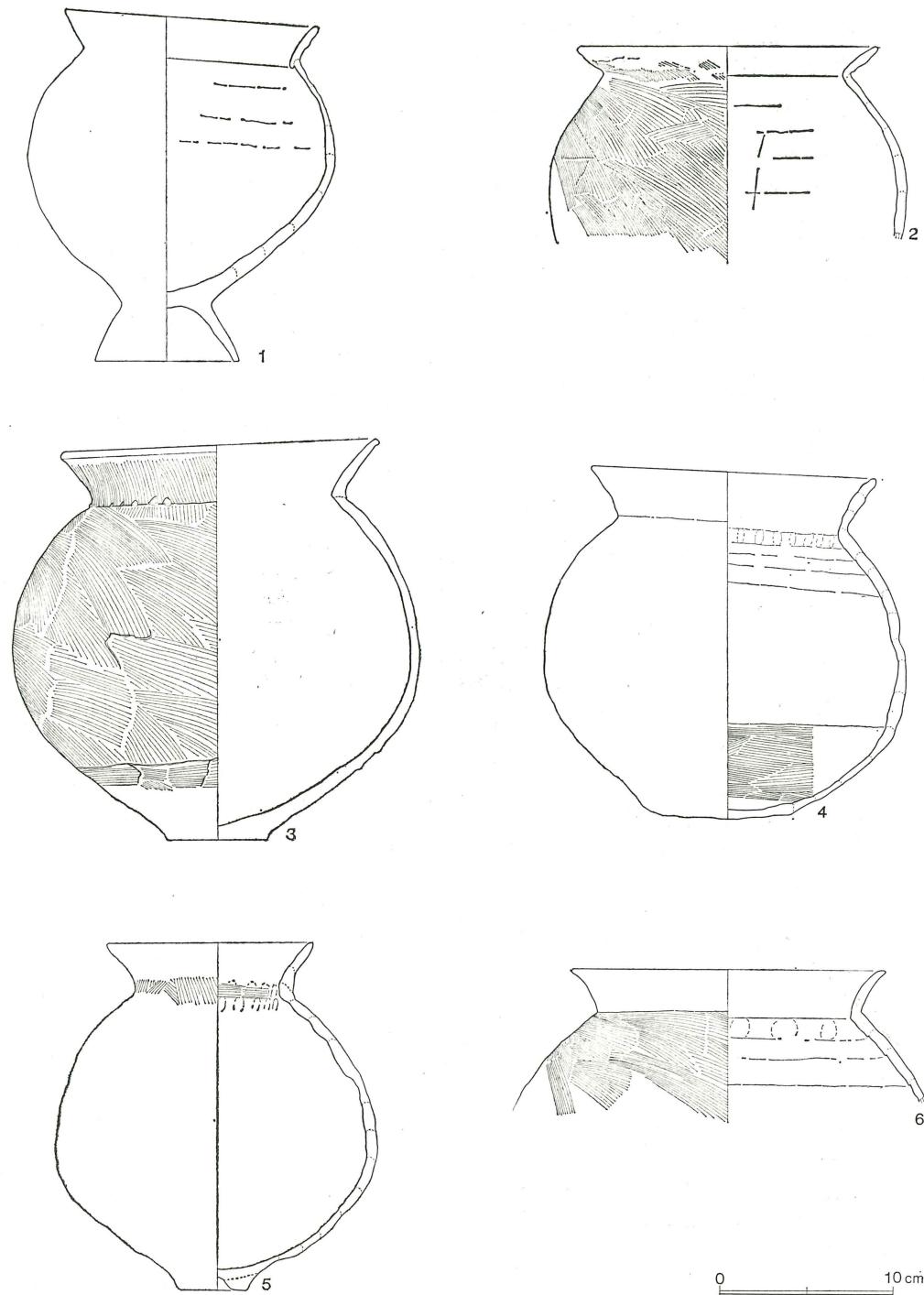
住居跡のプランは隅丸長方形を呈し、長径6.3m×短径5.9mをはかる。

柱穴はP₁～P₄が検出された。柱穴は各コーナーに沿って約2m程内側に配列されている。形状はP₃を除き長方形をなし、長径40～45cm×短径30～35cmをはかる。床面からの深さはP₁=50cm、P₂=50cm、P₃=39cm、P₄=35cmのをはかる。

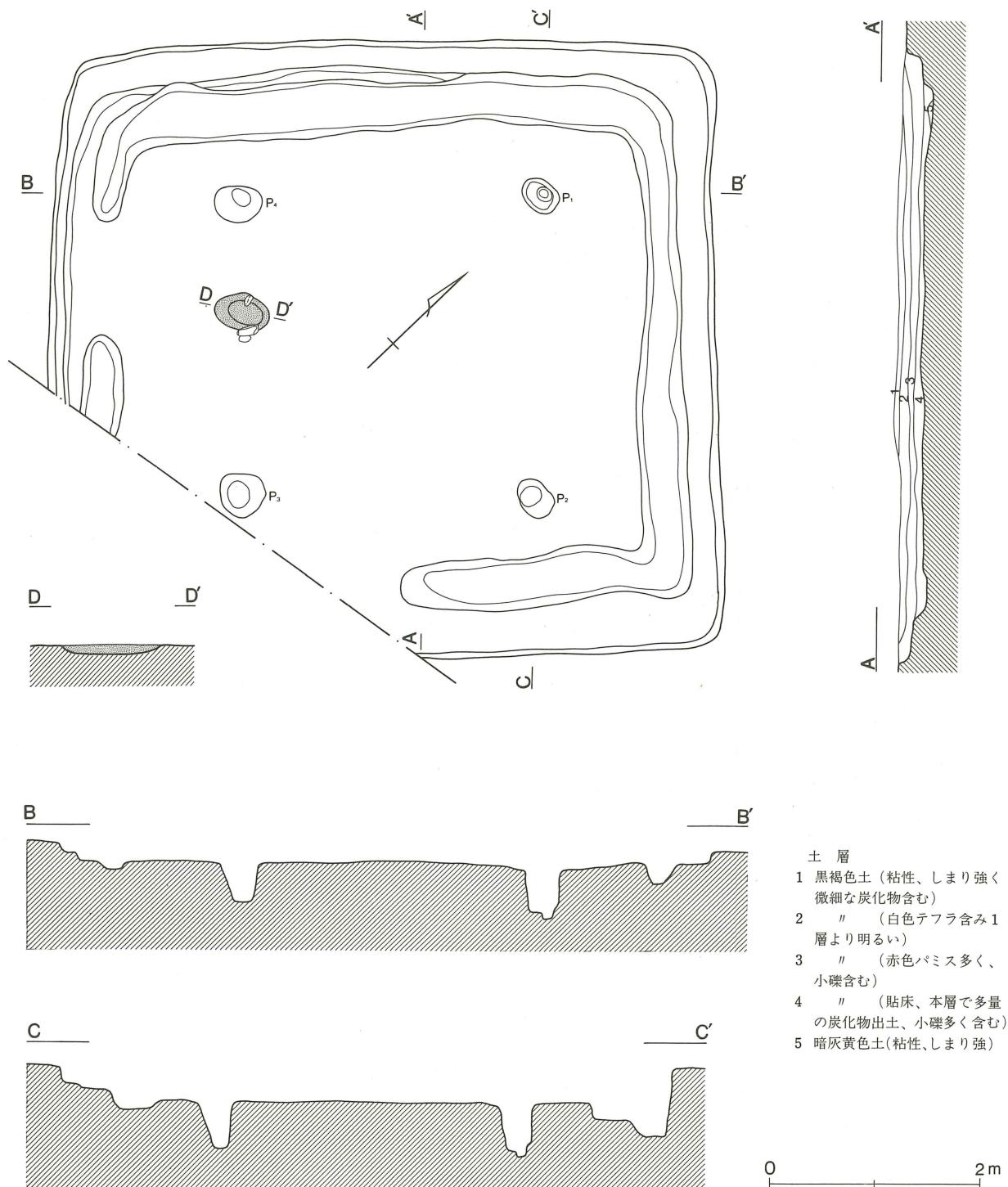
P₃～P₄間に地床炉をもつ。炉は長径55cm×短径38cmの橢円形を呈し、床面から10cm掘り下げられている。覆土は焼土1層のみである。住居跡床面下に周溝を廻らす掘り方が検出された。周溝は幅30～70cm、深さは床面から23～40cmをはかり、西壁、南壁側で切れている。遺物は周溝内側に分布し、北西部は分布がきれる。垂直分布は北西側より南東側に傾斜を示す。



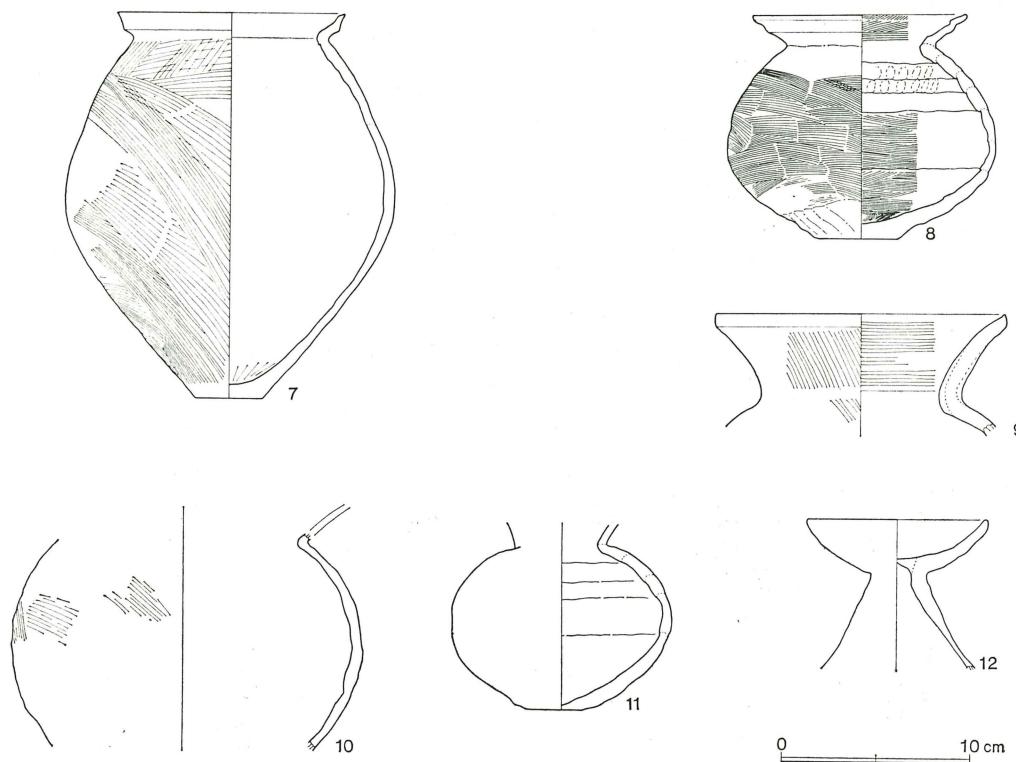
第100図 第27号住居跡遺物分布図



第101図 第27号住居跡遺物



第107図 第27号住居跡



第103図 第27号住居跡出土土器

第27号住居跡出土土器

器種番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
台付甕 甕	1 口径 14.7 器高 21.0	体部で強く膨り、口縁は中央部で肥厚し、直線的に開く。内面に輪積み痕残る。灰黄色。砂礫多。	体部内面粗いナデ。口縁内外ヨコナデ。器面は全体にヘラナデされているが風化のため不明瞭。	完
甕	2 口径 18.3 現存高 12.4	口縁短かく中位で肥厚し、直線的に開く。内面輪積み痕残る。	体部内面粗いヘラナデ。口縁内外をヨコナデ後、器面を口唇下から体部にかけてハケ目調整。	体下半欠
甕	3 口径 19.5 器高 23.0 最大径 24.1 底径 5.7	底部小さく、体中位で強く膨る。口縁は直線的に開き、端部は若干外方に膨る。口縁との接合部に圧痕が全周する。暗褐色。細砂多。	体部は2段に接合し、接合前に下半部をハケ目調整。内面は下半がヘラケズリ。上半はヘラケズリ後ナデ。口縁内面。器面全面にハケ目調整。	完
甕	4 口径 17.0 器高 20.2 最大径 21.3	形態崩れる。口縁は中位で肥厚し直線的に開く。器内面上半に輪積み痕顯著に残る。灰黄褐色。砂礫多。	内面下半ハケ目調整。上半へ口縁内外ヨコナデ。器面はヘラナデ。底部は周辺ヘラケズリ。	完

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	5	口径 12.3 器高 20.3 最大径19.0 底径 3.8	最大径を体下半にもつ。口縁は直線的に開く。壺に近い。底部は上げ底を呈する。内面に輪積み痕著。灰白色。一部黒色。砂礫多。	内面ナデ。外面ハケ目調整後、口縁内外ヨコナデ体。部ヘラナデ風化著るしい。	体部～底部一部欠
甕	6	口径 18.6 現存高 9.1	口縁外反気味に開く。口縁外反、内面に輪積み痕残る。暗黒褐色。砂粒多。	内面ナデ。口縁内外ナデ。体部粗くハケ目調整。	体下半欠
甕	7	口径 12.2 器高 12.0 最大径14.5 底径 3.5	体部中位で膨り。口縁短かく受け口状を呈し、口唇屈曲して直線的に開く。黄褐色。砂粒多。	内面ハケ目調整後ナデ。口縁内外ヨコナデ。体部は上端縦位のハケ目調整。以下斜位の粗いハケ目調整。	1/2残
壺	8	口径 11.6 器高 12.0 最大径14.5	体下半に最大径をもち、口縁は有段で、強く開く。内面に稜をもつ。器内面に輪積み痕顯著に残る。暗黄褐色。砂礫多。	器内面ハケ目調整。上半部は粗いナデ。口縁内面ハケ目調整。器外面はハケ目調整後、底部周辺をヘラナデ。口縁ヨコナデ。端部は丁寧なナデ。	完
壺	9	口径 15.8 現存高11.6	口頸部のみ。外反気味に開き、端部は外削ぎ状となる。厚手のつくり。灰褐色。砂粒多。	器内外面ともナデ。	肩部以下欠
甕	10	最大径18.8 現存高12.0	胴部のみ。暗褐色。砂礫多。	内面ハケ目調整後ナデ。外面ハケ目調整後、ヘラナデ。	口縁、体下半欠
壺	11	現存高 8.6 体部径11.9	小型。体中位で膨る。口縁欠失。黄褐色。砂礫多。	内面ナデ。外面ハケ目調整後、全体を丁寧にヘラナデ。	口縁欠
高 坯	12	口径 918 現存高 8.0	壙部は丸味をもって立ち上がり、端部は外削ぎ状を呈する。脚部は下端で大きく開く。比較的肉厚。黄灰白色。砂礫多。	壙部内外面は丁寧なナデ。脚部外面丁寧なナデ。内面粗いナデ。	裾部欠

第28号住居跡（第104～106図）

第5調査区のほぼ中央部ハ～ニ—46区で検出された。遺構南西コーナー部分が調査区域外となっている。

住居跡は一辺が約4.5mを測り、隅丸方形プランを呈する。北東～南東コーナーにかけて強く丸味をもつ。

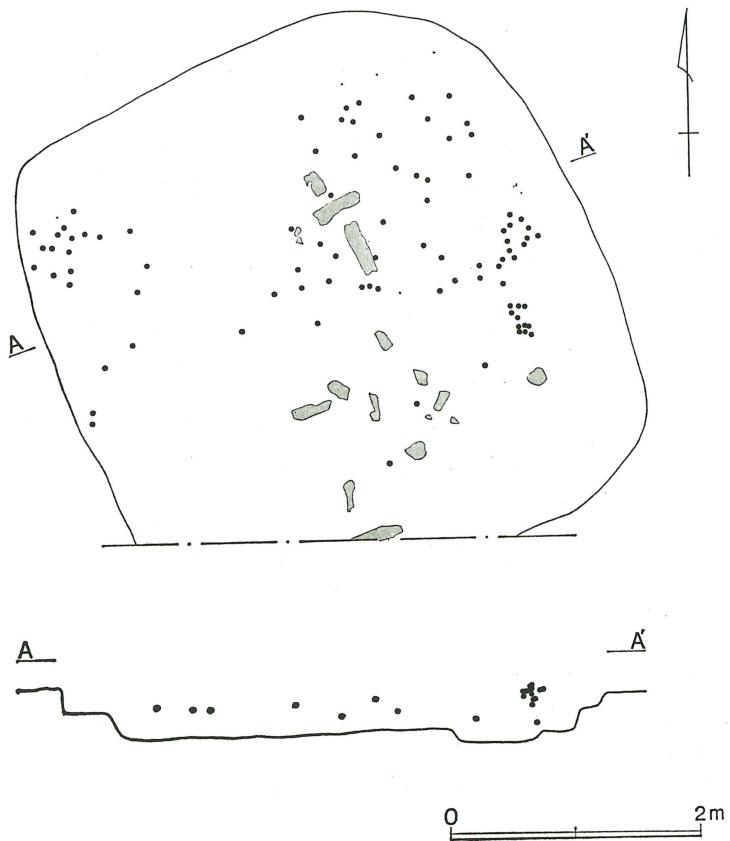
壁は3段にわたって掘り込まれ、中央部は台状に残される。東壁中央部は壁立ち上がり部にフラットな面をもち、平坦面上には河原石が置かれていた。

壁高は上段が30～50cm、2段目が30～45cmを測り、更に中央部を残し30cm程度掘り込まれて構築されている。

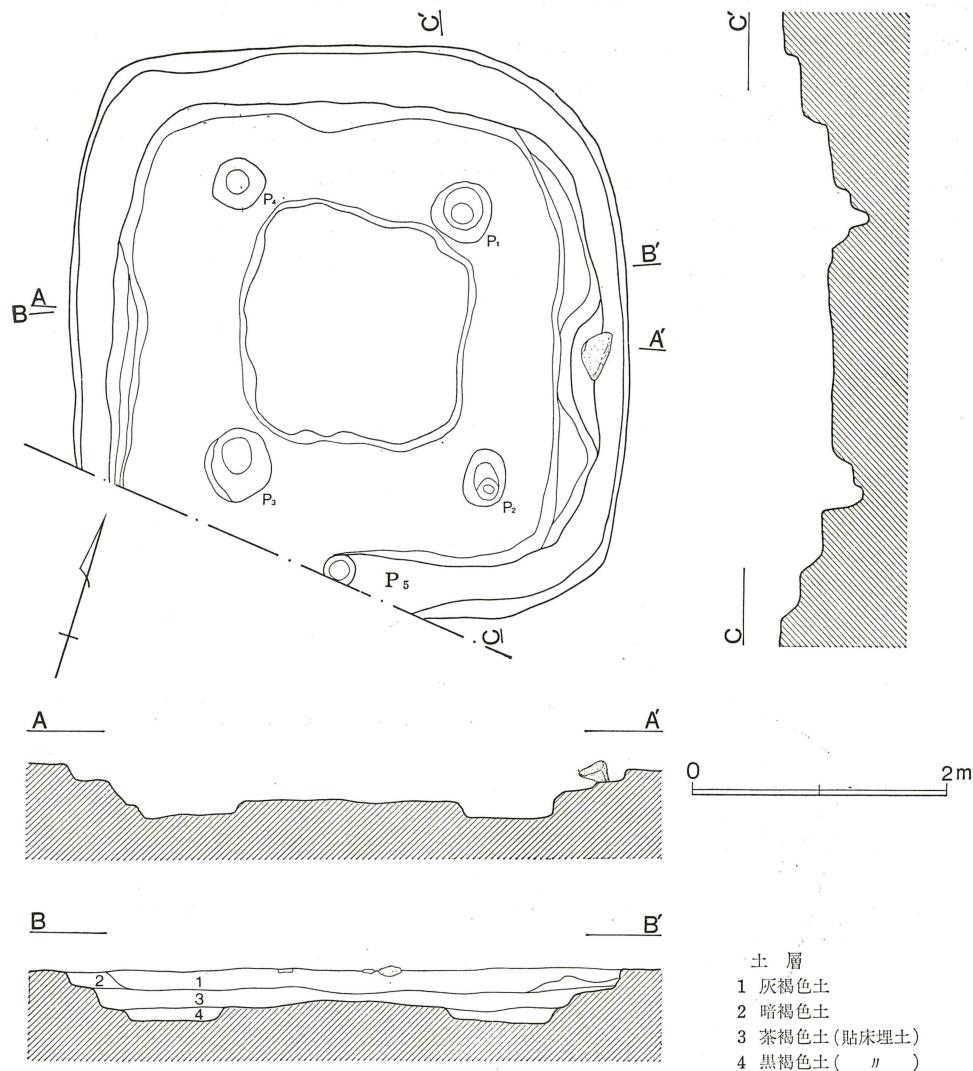
柱穴は $P_1 \sim P_4$ が検出されたが、全て掘り方底面で確認された。 P_2 が長径 $46cm \times$ 短径 $35cm$ の長方形を呈する以外、他は円形で径は $P_1 = 50cm$ 、 $P_3 = 56cm$ 、 $P_4 = 38cm$ 、深さは掘り方底面より $P_1 = 32cm$ 、 $P_2 = 34cm$ 、 $P_3 = 40cm$ 、 $P_4 = 38cm$ を測る。

覆土は 4 層から成り、遺構掘り方には第 4 層黒褐色土が埋土され、更に上面は第 3 層茶褐色土で張り床されていた。第 3 層上面は調査時に床面として確認することができなかった。

遺物は東壁側から北壁側にかけてやや帶状に分布を示している。垂直分布からみてほとんどが第 1、2 層中に遺存するものと思われる。炭化物もほぼ同レベルに遺存していた。



第104図 第28号住居跡遺物分布図



第105図 第28号住居跡

第28号住居跡出土土器

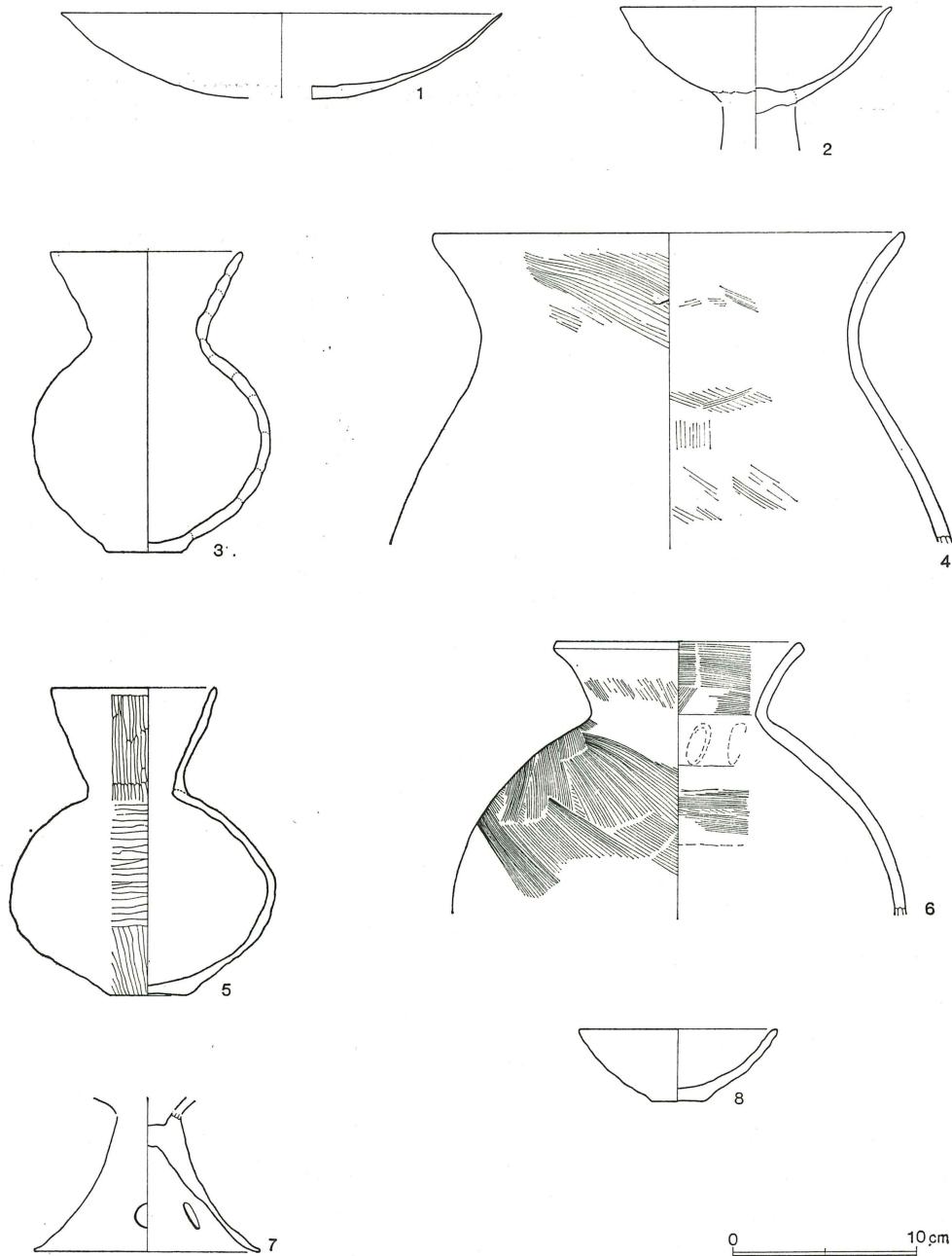
器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高 坏	1	口径 18.4 現存高 3.6	壊部のみ、柱状部との接合痕を明瞭に残す。最大器厚は 0.6 cm、彎曲気味に強く開き端部やや外反薄手。赤橙色。砂粒多。	器内外とも風化進む。内面はヘラミガキ、外面縦位ヘラミガキ痕跡残る。	壊部のみ
高 坏	2	口径 11.3 現存高 4.4	椀状に開き、口唇下で肥厚、端部は器面浅く窪み、外反、柱状部との接合痕残す。暗黄褐色。砂粒小礫やや多。	内面・口唇端丁寧なヨコナデ。器面ナデ。	壊部のみ

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	3	口径 7.9 底径 3.2 器高 12.3 9.8	胴中位に最大径もち、大きく膨る。口縁は直線的に開き、端部でやや内反、器内面凹凸顕著に残る。	内面は粗くヨコナデが施される。器面は風化著るしく観察不可底部ヘラナデ。	完
甕	4	口径 18.7 現存高 13.0	胴部中位に最大径持つと思われる。肩部ゆるやかに内彎し、口縁で外反気味に開く。くびれ弱く丸味強い。灰白色。砂粒。小礫多。	器内、外面に木口の粗い不整方向のナデを施し、後、器面は粗くヘラナデ。	胴下半欠 ½残
壺	5	口径 6.9 底径 3.2 器高 12.6	胴部算盤玉状に膨りやや下位に最大径もつ。底部から強く外傾して開き、口頸部強くくびれる。口縁は内彎気味に開く。橙色。細砂多。	胴部内面は粗いナデ。口縁内面口唇丁寧なヨコナデ。器面は口縁縦胴上半横、下半は縦のヘラナデ。	完
壺	6	口径 13.7 現存高 15.2	胴中位に最大径をもつと思われる。肩部から口頸部はかけて内彎して立つ。口頸部で強くくびれ、口縁は外反して開く。端部は若干肥厚し、口唇は平坦。橙色～赤色呈し砂粒。小礫とも多。	胴部ハケ目調整。単位広くハケ目細かい。器内面ハケ目調整、口頸部指頭おさえ。口縁外圍はハケ目調整ナデ。	½残
高杯	7	底径 12.8 現存高 7.8	接合部より裾部に外反して強く開く。裾部に孔を有する。最大厚0.6cm、端部は肥厚し更にすぼまり、外反強。浅黄橙色。砂粒多。	器内外面風化著るしく観察不可	脚部のみ残
鉢	8	口径 11.2 器高 3.2 底径 3.0	手捏ね状で指頭圧痕顕著に残る。肉厚で内彎気味に開く。	成形後。内面ナデ。器面粗くヘラナデ。	完

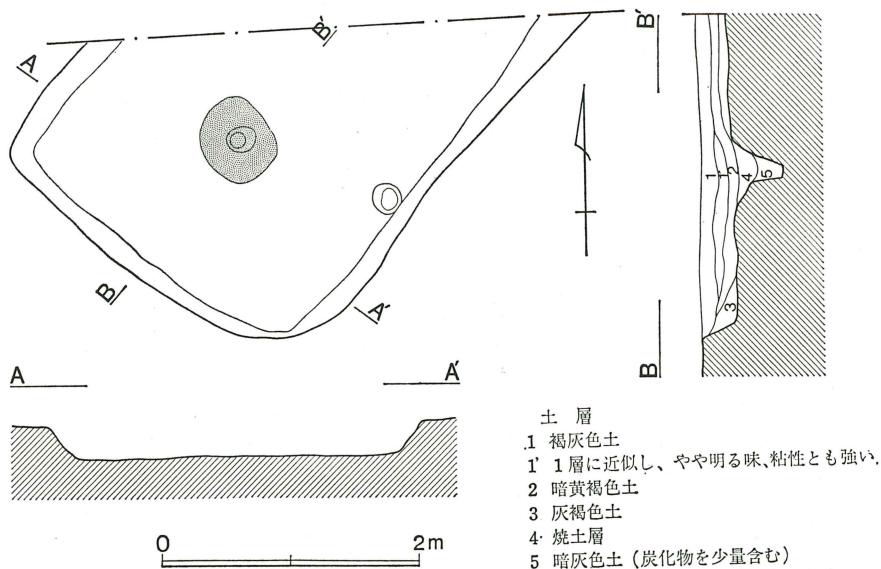
第29号住居跡（第107図）

第5調査区ハ—46区で検出された。遺構は南西壁から東壁にかけて検出されたに過ぎず、大半が調査区域外となっている。南壁は2.65mを測り、南東コーナー部は丸味をもつ。長方形プランが推定される。壁高は20~25cmを測り、立ち上がりはゆるく傾斜を示す。

南壁寄りに地床炉をもつ。床面上に60cm×55cmの範囲で焼土の分布が認められ、精査した結果、炉址は床面を35cm程ピット状に掘り込み、更に第5層を埋土して構築されていた。本住居跡からは図示し得る遺物は出土していない。



第106図 第28号住居跡出土遺物



第107図 第29号住居跡

第30号住居跡（第108図）

第5調査区ロ～ハ一42区で検出された。遺構北東コーナー部は、土層確認のための試掘に際して壁の一部が欠失している。

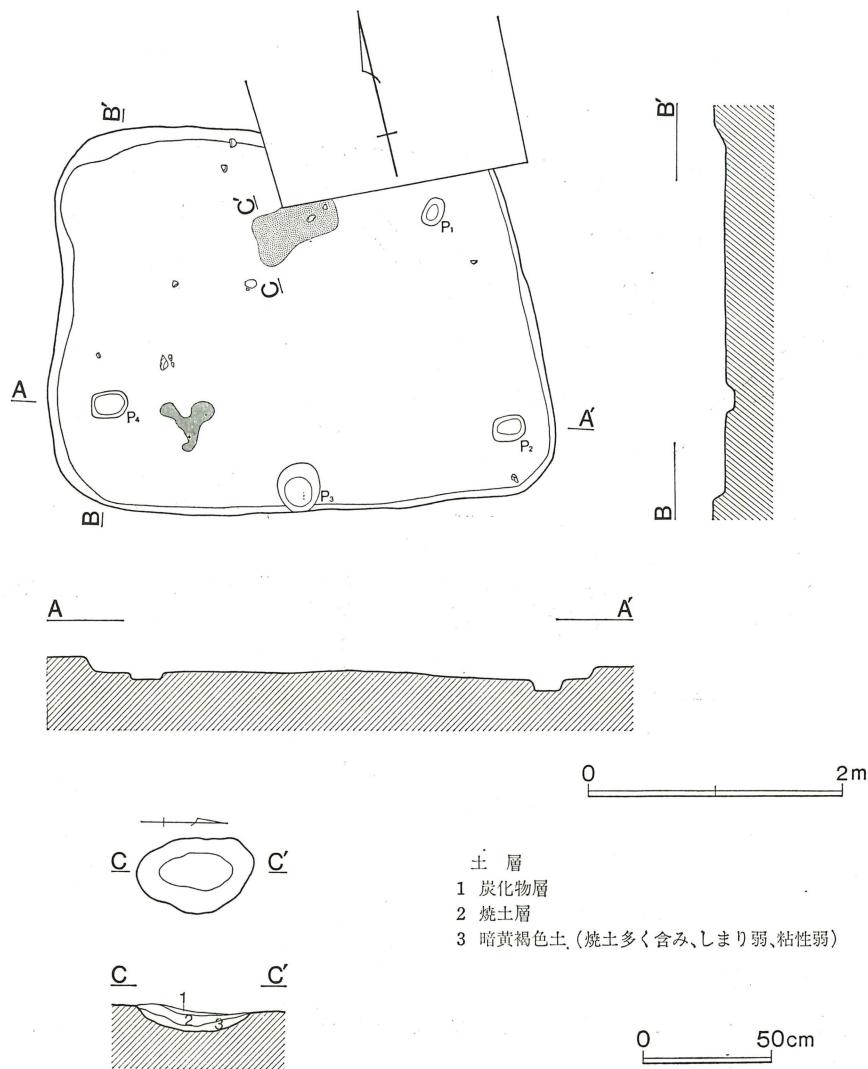
住居跡は長径3.95m×短径3.1mの長方形プランを呈し、西壁側は中央部で内側に突出気味となっている。

壁高は西側で15cm、東側で10cm程度と極めて浅い、覆土も一層のみである。

床面はよく踏み固められている。柱穴はP₁～P₄まで検出されたが、6～10cm程度の深い掘り込みをもつ。北西コーナー側では柱穴は検出されなかった。

炉は北壁寄りに地床炉をもつが、焼土が上面に浅く堆積していたのみである。長径47cm×短径29cm、深さ10cmの橢円形を呈する。

遺物の出土は極めて少なく、図示し得る資料は出土しなかった。



第108図 第30号住居跡平面図

第31号住居跡（第109～111図）

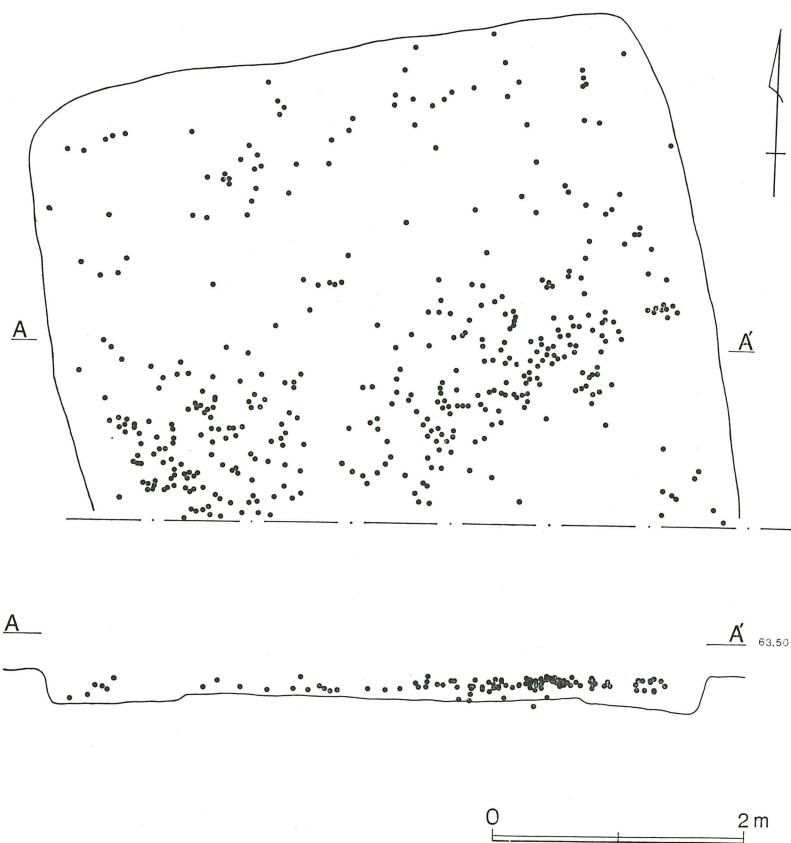
第5調査区ハ～ニ—45～46区で検出された。遺構中央部より南側は調査区域外となっている。

住居跡は確認された部分から、一辺が5m前後（北壁は5.1mを測る）の正方形プランを呈するものと思われる。

壁高は20cmを測り、床面は固く踏みしめられていた。

柱穴はP₁～P₉までが確認された。このうち、床面下精査以前にP₄、P₆、P₇が確認され、他は床面下の住居跡掘り方精査時に検出された。

柱穴の深さはP₄=49cm、P₆=53cm、P₇=50cm、P₁=53cm、P₂=41cm、P₃=47cm、P₅=52cm
P₈=12cm、P₉=68cmを測る。



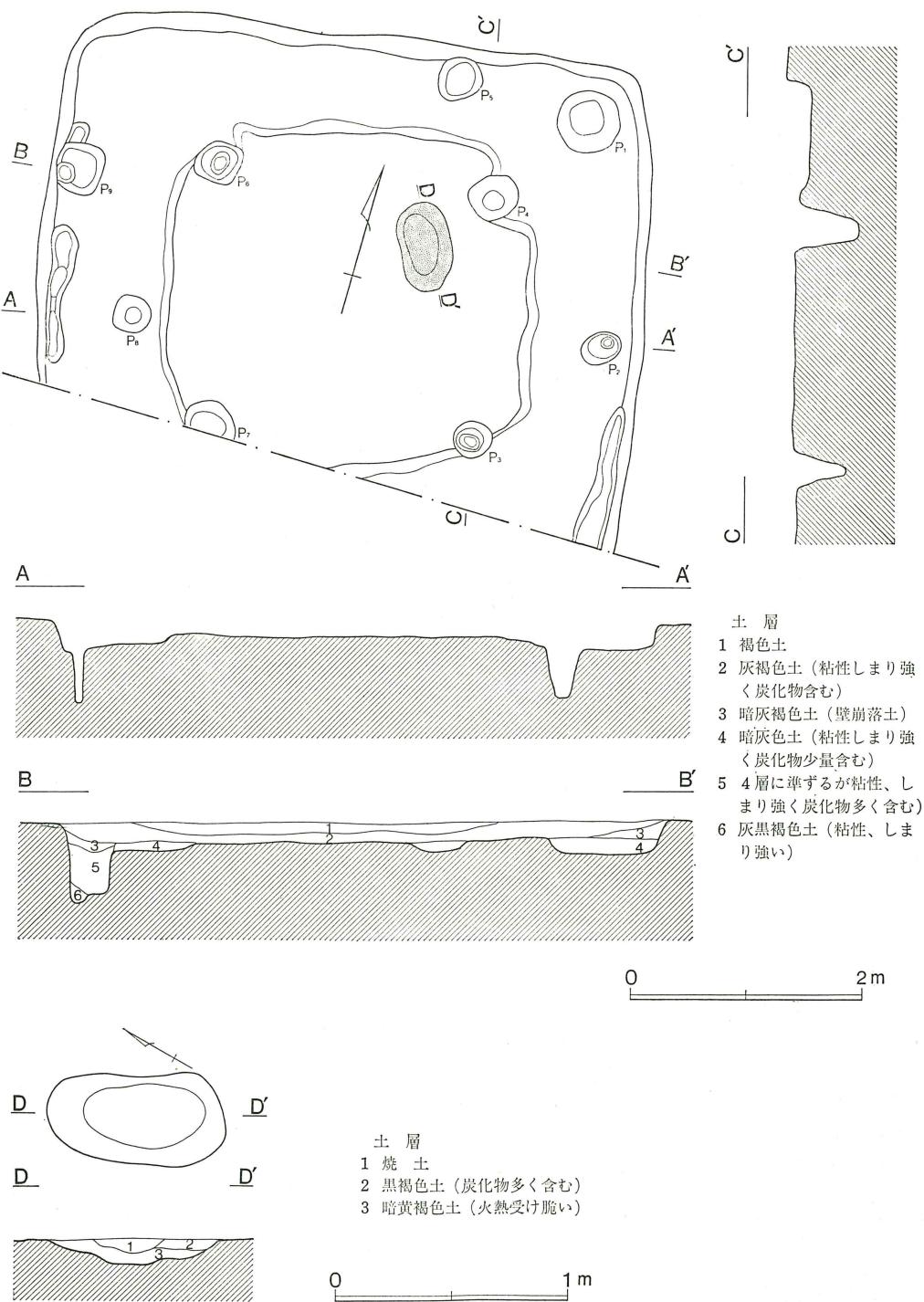
第109図 第31号住居跡遺物分布図

柱穴P₄に近接して地床炉が検出された。長径77cm×短径38cmの橢円形を呈し、床面を約20cm程度掘り込まれて構築されている。焼土の堆積は貧弱である。

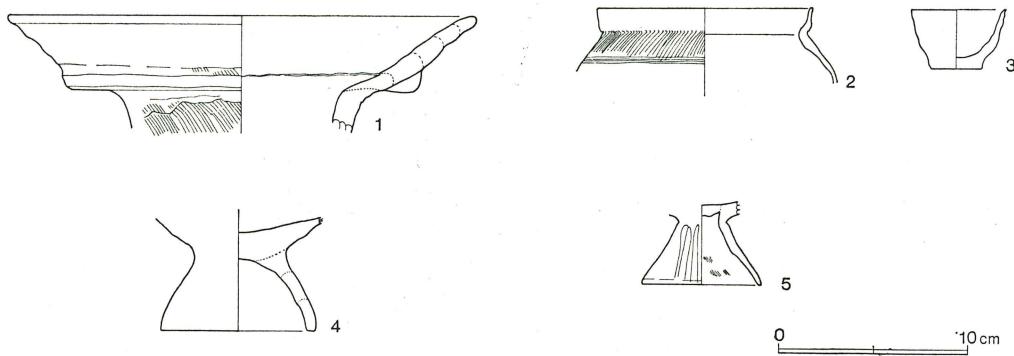
床面下の調査によって住居跡掘り方が検出された。掘り方は、壁から幅60cm～1.0m程度、深さは床面より20～25cm掘り込まれ、柱穴P₃、P₄、P₆、P₇に沿った床面は台状に残されている。東、西壁に沿って部分的に幅20～24cm、深さ40cm程度の溝状の掘り込みをもつ。

覆土は6層からなり、第4層は掘り方埋土で、住居跡張り床である。

遺物は全体に濃密に分布しているが、細片が多かった。垂直分布は東側から西側にかけて、ゆるい傾斜を示しており、流れ込んだような出土状態を示す。



第110図 第31号住居跡



第111図 第31号住居跡出土遺物

第31号住居跡出土土器

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径 25.5 現存高 6.3	有段口縁壺。頸部は直立し、口縁下に凸帯をもつ。口縁は直線的に開く。輪積みの痕残る。暗褐色砂粒多。	口縁内面は丁寧なナデ。口縁下頸部はハケ目調整。	口頸部のみ
甕	2	口径 11.8 現存高 4.6	口縁立ち上がり肥厚し、ゆるい段をもって直立気味に開く。黒褐色。砂粒多。	器内面ナデ。口縁内外丁寧なナデ。体部は縦ハケ目調整。横位に幅狭いハケ目廻る。	残口～縁体上半 1/2残
手捏ね	3	口径 5.1 器高 3.2	小型手捏ね土器。鉢形呈する。	器面に指頭圧痕残る。	完

第32号住居跡（第112～116図）

第5調査区ハ—50区で検出された。調査区では東端に位置する住居跡である。

住居跡は一辺3.6m～3.7mの隅丸方形プランを呈し、各コーナーは強く丸味をもつ。

床面までの壁高は45～60cmをはかり、ほぼ垂直に整然と掘り込まれている。

柱穴は掘り方底面からP₁～P₂が検出された。深さはP₁=38cm、P₂=41cmを測る。

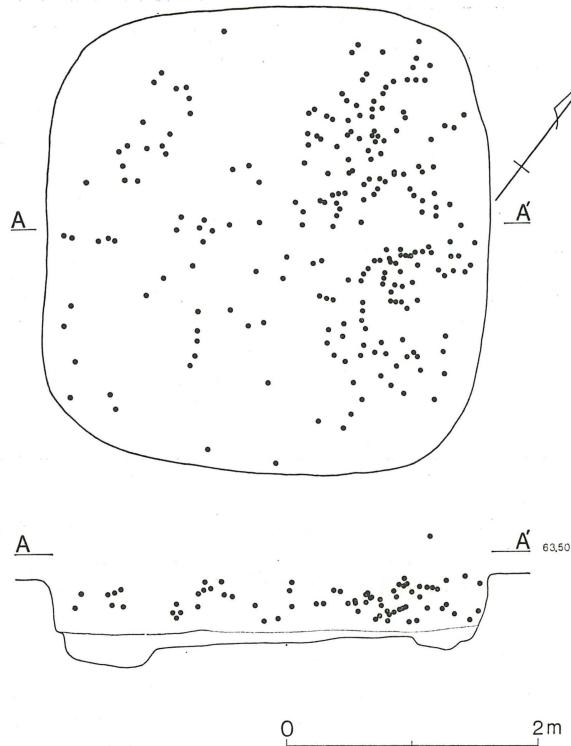
床面は中央部がよく踏み固められていた。東壁側では幅40～50cmにわたって、炭化物が浅く堆積していた。

床面下は精査によって住居跡掘り方が検出された。掘り方は西壁から北壁にかけて幅80cm、東壁から南壁にかけて幅55cm～65cm、床面下より15cm～20cm程度掘り込まれ、中央部を台状に残している。床面は東側から西側に向かってゆるやかな傾斜を示す。

覆土は8層からなり、第8層は掘り方埋土、住居跡張り床となっており、炭化物もこの範囲に検出されている。

遺物は覆土中、床面上から多量に出土しているが、図示した完形土器の多くは住居跡北壁西側寄り、西壁ほぼ中央部の2箇所に集中して検出されている。

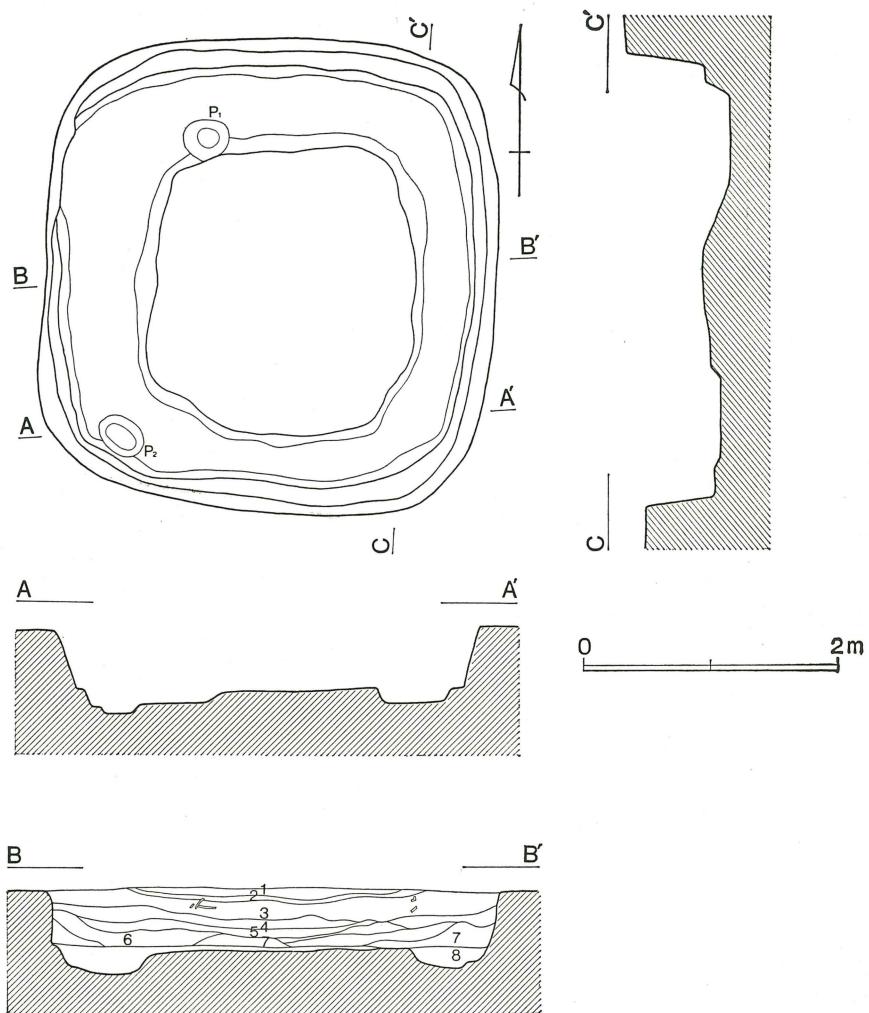
覆土中の遺物は大半が破片であった。床面下、住居跡掘り方埋土内からの遺物出土は認められなかった。床面精査時にも炉址は検出されていない。



第112図 第32号住居跡遺物分布図

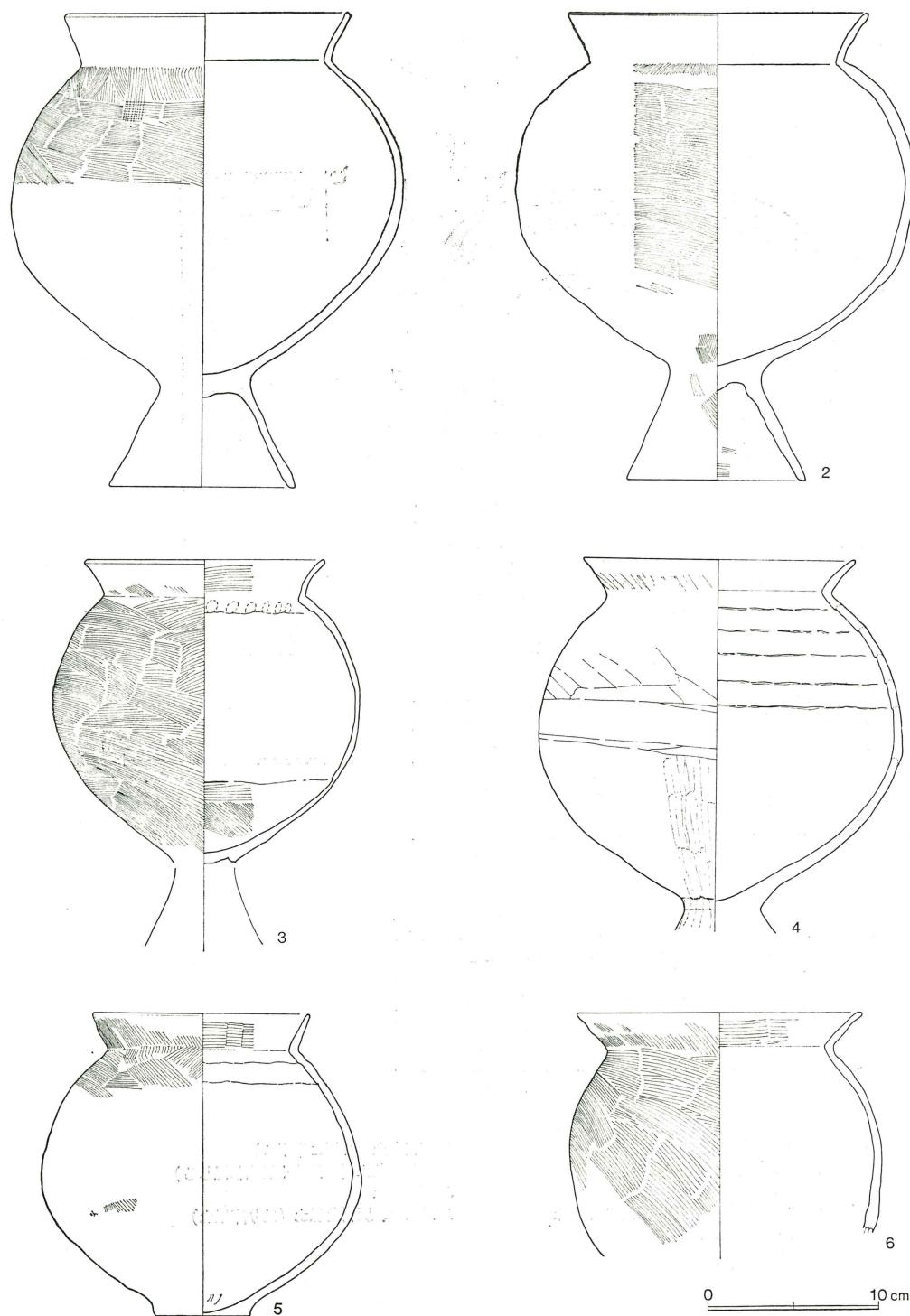
第32号住居跡出土土器

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
台付甕	1	口径 17.2 器高 28 最大径23.4	比較的薄手で形態整う。口縁直線的に外反し端部外削ぎ状。台部下端で若干肥厚。黄褐色。砂粒多。	器内面ナデ。口縁内外ヨコナデ 外面上半は細かいハケ目調整。下半はヘラナデ。	完
台付甕	2	口径 18.1 器高 27.6 最大径23.8	器形1に似るがやや肉厚。口縁外反気味に開き、体部は丸味が強い。台部は直線的に開く。	器内面ナデ。口縁内外ヨコナデ。 外面は全体に細かなハケ目調整。 体下半～台部はハケ目調整後ヘラナデ。台部内面ハケ目残しナデ。	完
台付甕	3	口径 14.6 現存高17.9 最大径18.4	薄手、形態整う。最大径はやや上半にあり。口縁は外反気味に開く。端部外削ぎ状呈する。	器内面下半ハケ目調整。上半はナデ。口縁内面ハケ目調整。接合部肥厚し指頭圧痕有する。外面口縁はハケ目調整後ヨコナデ。体部は全体に細かなハケ目調整。	台部欠
台付甕	4	口径 16.4 現存高21.8 最大径21.8	体中位に最大径持つ。口縁は直線的に外反し、端部外削ぎ状。内面には輪積み痕顯著に残る。	器内面下半丁寧なナデ。上半輪積み痕残し、ナデ。口縁内外ヨコナデ外面にハケ目残る。器面は上半幅広いヘラナデ。下半、脚部は幅狭く丁寧なヘラナデ。	台下半部欠

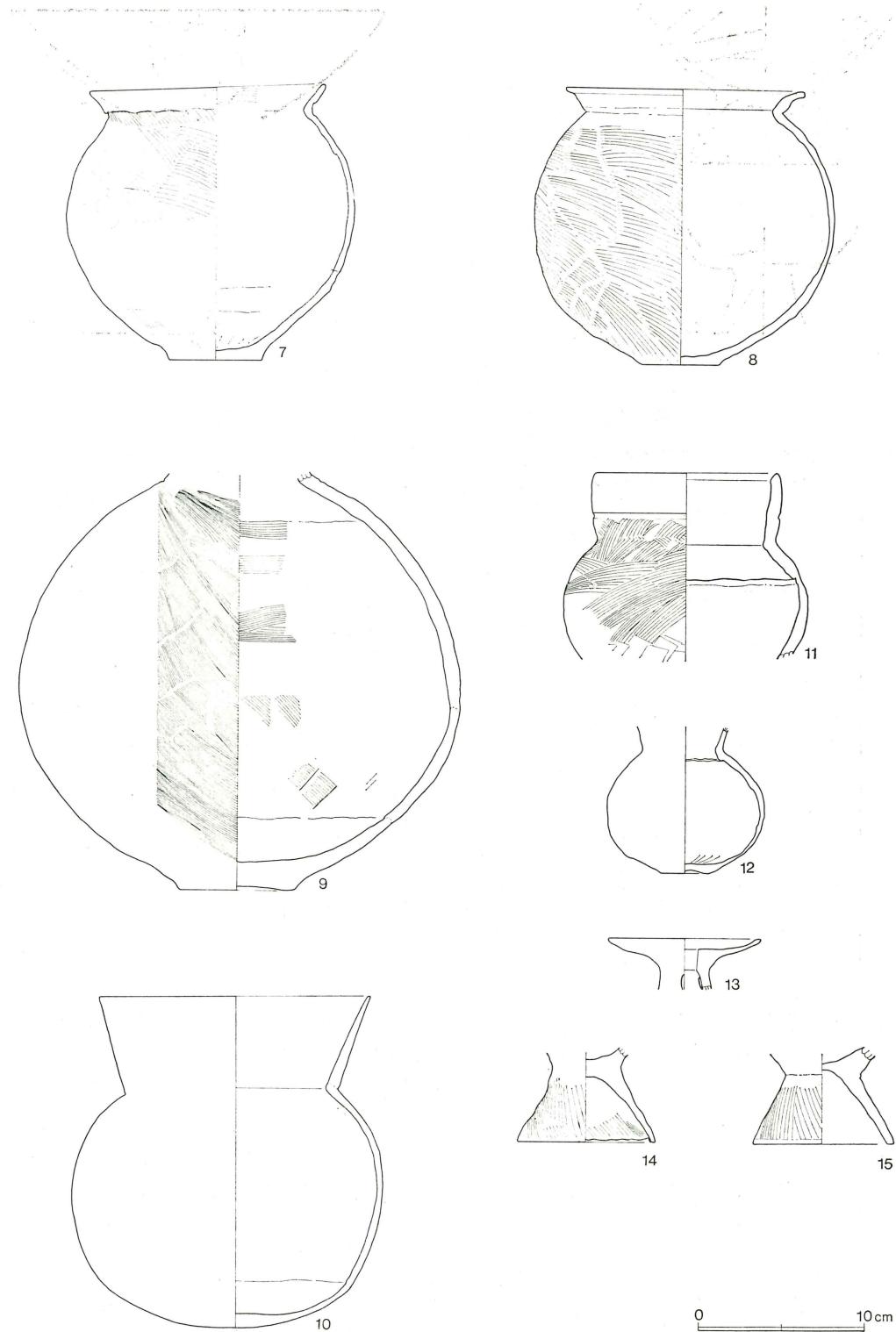


- | | |
|------------------------------------|---------------------|
| 1 灰褐色土 | 5 暗褐色土（2層に準ずる） |
| 2 暗褐色土（炭化物多量に含む） | 6 暗灰褐色土（粘性強く炭化物混じる） |
| 3 茶褐色土 | 7 灰褐色土 |
| 4 " " (3層に比べ粘性強くやや白味
帶び、炭化物混じる) | 8 黒褐色、灰褐色混土（貼り床埋土） |

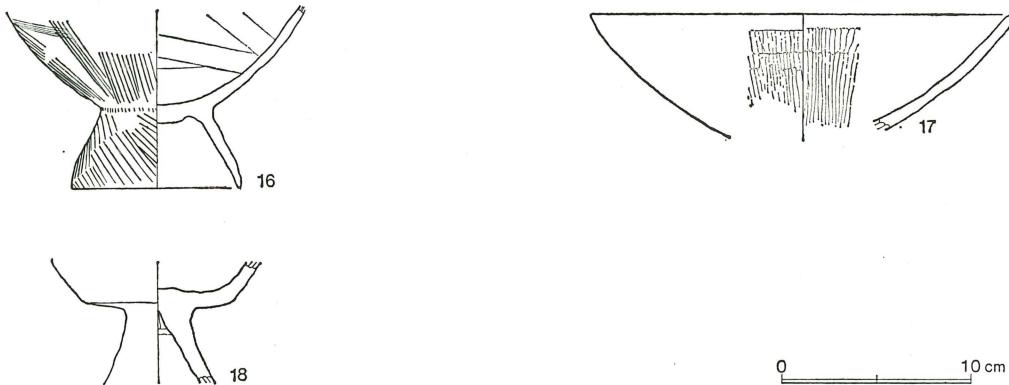
第113図 第32号住居跡



第114図 第32号住居跡出土遺物



第115図 第32号住居跡出土遺物



第116図 第32号住居跡出土遺物

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	5	口径 13.0 器高 17.8 最大径19.2	体部やや下半に最大径もつ。口縁は直線的に開く。内面上半に輪積み痕残る。	器内面は丁寧なナデ。底部周辺ヘラナデ。口縁内外ハケ目調整。器面はハケ目調整後、肩部以下をヘラナデ。	完
甕	6	口径 17.2 現存高14.6 最大径18.7	体部は丸部欠く。口縁は中位で肥厚し、強く開く。端部は内削ぎ状になる。	器内面ナデ。口縁内外ハケ目調整後、軽くナデる。体部は比較的細かなハケ目調整。	体下半欠
甕	7	口径 14.8 器高 17.7 最大径17.9	体部丸味強い。口縁短かく直線的に開く。内面上端に輪積み痕残る。	器内面ヘラナデ痕残る。上半はナデ口縁内面ハケ目調整。外面は口縁ヨコナデ。器面は口縁下よりハケ目調整後、体部を粗くヘラナデ。	体部一部欠
甕	8	口径 14.8 器高 18.9 最大径18.5	球形に近い胴部もつ。口縁は厚手で外反。端部で強く開く。	器内面丁寧なナデ。口縁内外は端部をつまむようなヨコナデ。器面は全体に幅の広いヘラケズリが施される。	完
壺	9	現存高25.2 最大径27.2	体やや下半に最大径もつ。頸部にゆるやかにすぼまる。底部は若干上げ底を呈する。	内面はハケ目調整の後、全体を粗くナデしている。器面は、細かいハケ目を不規則に重畳して施し、単位等不明瞭。	口縁欠
壺	10	口径 16.8 器高 20.1 最大径19.2	薄手のつくり、体部球形で、口縁は直線的に開く。	内面は粗くナデられている。外面は風化著しく、整形不明瞭。	口縁一部欠
壺	11	口径 11.5 現存高11.4 最大径15.2	体部丸味強く、上半に接合痕残る。口縁は丸味もち、直立気味に立ち上がる。中央部に沈線廻る。端部は内削ぎ状を呈する。肉厚、赤褐色。砂粒多。	器内面に接合痕残る。比較的丁寧にナデられる。口縁内外は丁寧なヨコナデ。沈線下～体部にはハケ目が不規則に施される。	体下半欠

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	12	現存高 9.0 最大径 9.7	口頸は開き氣味に立ち上がる。 最大径を体下半にもつ。底部は上げ底を呈する。灰白色。細砂多。	内面底部周辺にヘラナデ痕残る。下半～上半は丁寧なナデ。器面はヘラナデ。	口縁欠
器台	13	口径 9.4 現存高 3.2	坏部は浅く、端部肥厚、中央部に孔をもつ。脚部は上端に、3孔を有する。黄褐色。砂粒多。	坏部内面丁寧なナデ。外面、脚部ナデ。	脚部欠
台付甕	14	底径 8.4 現存高 5.4	台部のみの出土。凹凸が頗著で内弯氣味に開く。端部は平坦口、内面は弱い折り返しを有する。赤褐色。砂粒多。	外面間隔の広いハケ目調整。内面上位ナデ、中位より折り返し部にかけてハケ目調整。	台部のみ残
台付甕	15	底径 8.8 現存高 5.6	台部は直線的に開き、凹凸少なく器厚は変化少ない。颈部薄い。赤褐色。砂粒多。	暗褐平坦にヘラナデ。器面間に隔の開いたハケ目調整、内面ヘラナデ端部ヨコナデ。	台部のみ残
台付甕	16	底径 9.0 現存高 9.6	胴部は比べ台部扁平。幅広の器形が推定される。丸底底に台部接合端部器厚減じ。鋭角。暗赤褐色。砂粒多。	胴部内面ヘラナデ。器面単位広い。ハケ目調整。内面ナデ。	体上半欠
高 坏	17	口径 23.2 現存高 6.8	坏部のみ、大きく開き氣味に立ち上がり、口縁若干外反し内削ぎ状呈する。	坏部内外面とも丁寧なヘラミガキ。	脚部欠
器台	18	坏部底径 8.0 現存高 6.4	坏部底面平坦で立ち上がり強く直線的、脚部外反氣味。肉厚。淡黄色。細砂含み胎土良。	内面ナデ、器面丁寧なヘラミガキ脚内面上端にシボリ目、内面は丁寧なナデ。	口縁、脚部下半欠

(2) 方形周溝墓と出土遺物 (第117~119図)

第5調査区ハ～ニー41～44区で検出された。遺構のほぼ北半分が調査区域外となっているため、全容を明らかにすることはできなかった。

周溝墓は、溝の配列状態から、前方後方形を呈するものと思われる。周溝は全周せず、各コーナーにはブリッジをもつ。

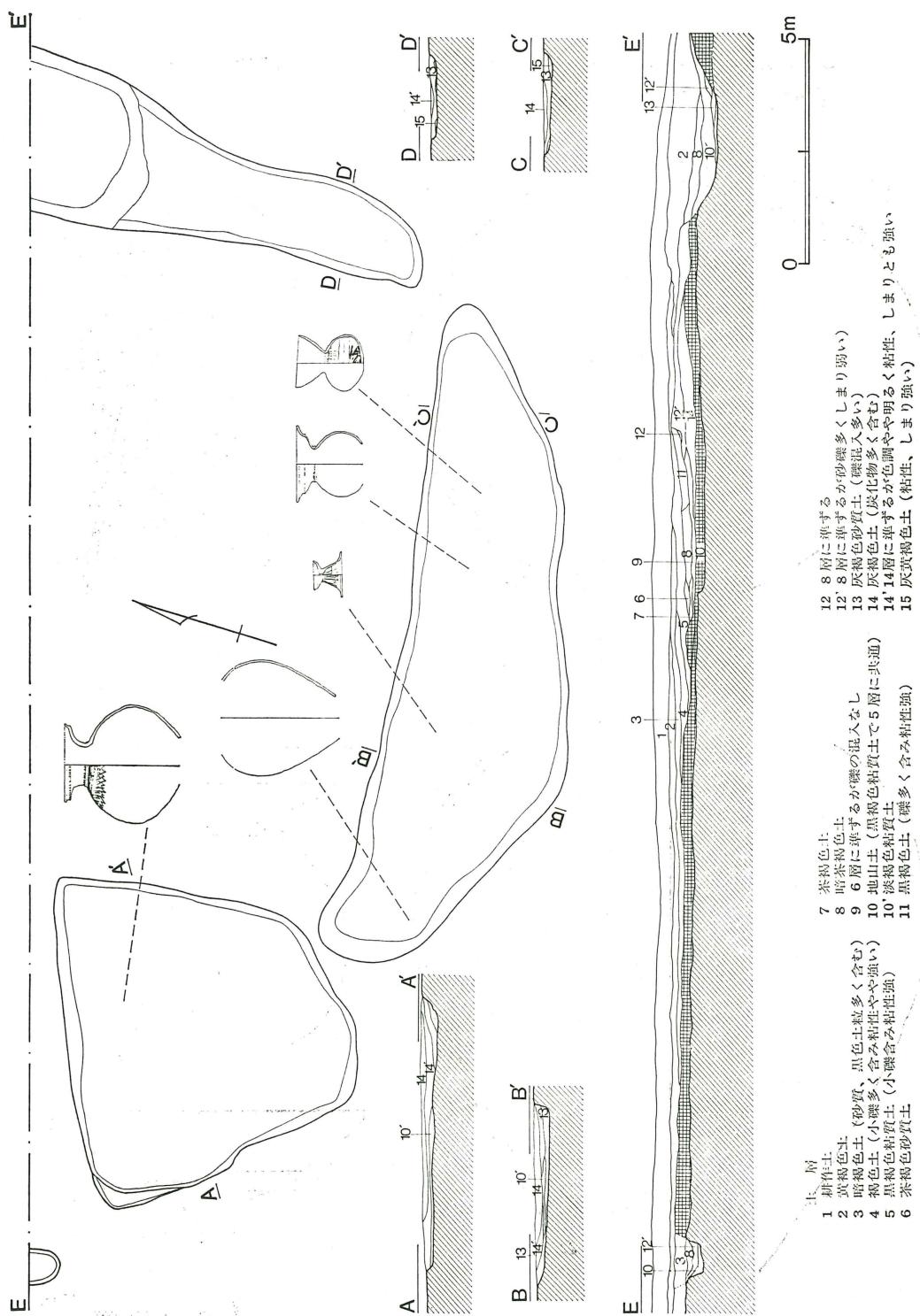
前方部を画する周溝は調査区内で先端部70cmが検出されたに過ぎず、全体の形状は不明である。また、北壁の土層観察でも明確な堆積状態を把握することはできなかった。

前方部南側周溝は、平面形が細長い台形を呈し、長径7.4m × 短径4.3mを測る。周溝は西側から東側にゆるく傾斜し、東壁は鋭く立ち上がる。北壁寄りに壺形土器がおしつぶされたような状態で出土した(図版-35)。後方部南側周溝は、全長7.8m、最大幅4.3mを測る。周溝北壁は直線的で、西コーナー部が北側にくびれる。南壁は中位で大きく膨り出す。周溝は南側から北側にゆるく傾斜し、北壁側で大形壺形土器、二重口縁壺形土器、小形壺形土器、小型器台等(第122図、123図-2、4、5、6)が出土した。後方部東側周溝は、北側が調査区域外に伸び、全容は検出できなかった。全区北壁部の最大幅は3.5m、先端部で1.9mを測る。周溝は中位ですばまり、開き気味に伸びる。掘長9.4m、調査り込みは、くびれ部北側で一段深し掘り込まれ、最深部は確認面より約30cm、先端部は周溝東側にゆるやかに傾斜し10cmを測る。遺物は全く出土していない。

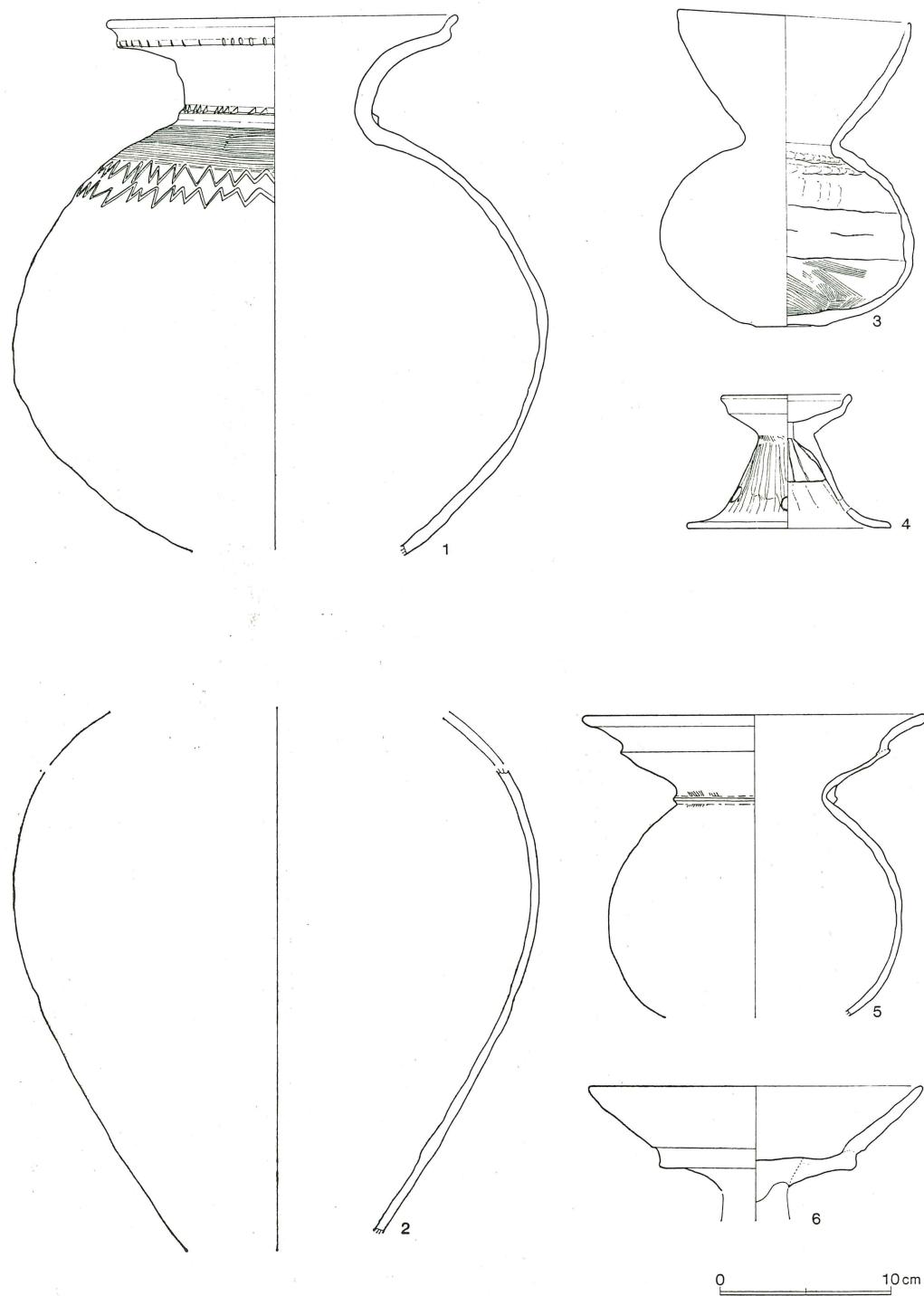
調査時に黒褐色粘質土を除去し、下層の暗黄褐色粘質土まで下げて周溝の確認を行った。

更に調査区北壁の土層観察を行ったところ、封土の存在が推測された。

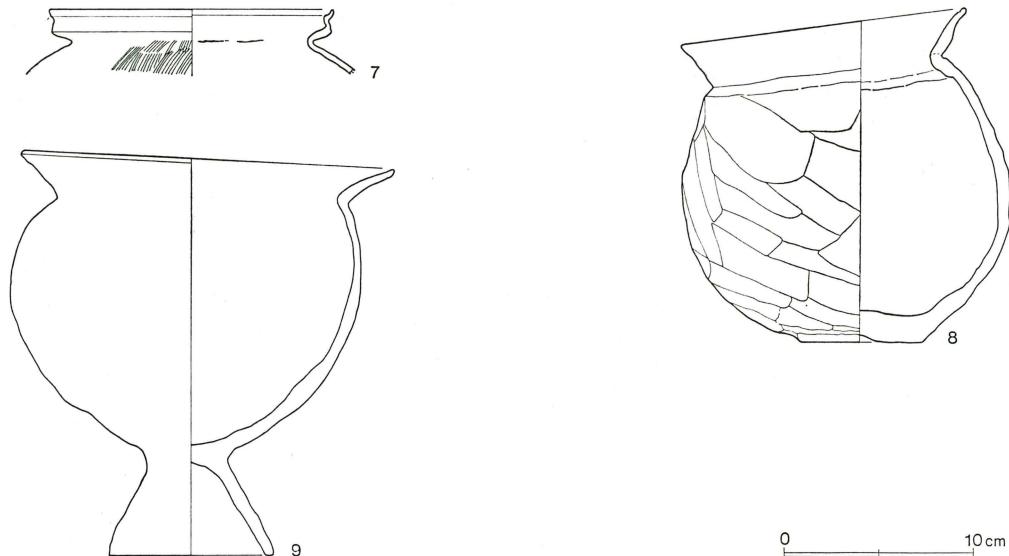
周溝は本来の地山である10層黒褐色粘質土を掘り込んで作出されており、掘り出された土は、周溝内側に盛土されたものと思われ、土層堆積は、東側から西側にゆるく傾斜をもっており、第10層相当層(第5、6、8、11、12層)が観察された。また第14層は炭化物を多量に含んでいる。



第117図 方形周溝墓



第118図 方形周溝墓出土遺物



第119図 方形周溝墓出土遺物

方形周溝墓出土土器

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径 21.0 現存高31.5 最大径31.5	有段口縁を呈する。球形胴部をもち、口頸部は開き気味に立つ。口縁部にかけて強く開き、段のつくりは丸味をもち、口唇下に浅く沈線廻る。口頸立ち上がり隆帶めぐらせ三角形刺突。口縁段部刻み加える。肩部横位ハケ目施文後、二列に波状文を放すが不整形、底部打ち欠かれた痕跡残す。浅黄橙色。砂粒多。	内面剥落著るしく観察不能、器面は全体をヘラナデ後、ハケ目、波状文施文。	底部欠、口縁一部欠。
壺	2	現存高58.6 最大径61.6	大形、胴部のみで全容不明。最大径を肩部にもつと思われる。肉厚で内面は剥落著るしい。浅黄橙色。砂粒多。	器面丁寧なヘラナデ。内面剥落著るしく不明瞭。	口頸部、底部欠、体部 $\frac{1}{2}$ 欠縮尺 $\frac{1}{8}$
壺	3	口径 14.0 器高 19.0 最大径15.3	胴中位に最大径もち算盤玉状呈する。口頸部で強くくびれ、口縁内湾気味に立つ。内面輪積み痕顯著橙色。砂粒多。	口縁内面ヨコナデ、器面丁寧なヘラナデ。内面胴部坦くナデ。底部周辺ハケ目調整。	口縁 $\frac{1}{2}$ 欠
器台	4	口径 7.8 器高 8.0 底径 12.2	口縁部は外反し、端部は肥厚。内面に弱い稜をもつ。脚部は裾で強く開き、3孔を有する。脚内面にジボリ痕残る。赤褐色。細砂含む。	受け部内外丁寧な横ナデ脚部ヘラナデ、裾部横ナデ。	$\frac{1}{2}$ 欠

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	5	口径 20.2 器高 17.8 最大径17.4	口縁部有段、胴部は下位に最大径もち、肩部はゆるやかに内弯。口頸部で強くくびれ、段で内傾。口縁部は強く外反して開く。口頸部に隆帶廻る。形態崩れる。赤褐色。細砂多。	内面丁寧なナデ。口縁内外面丁寧なヨコナデ。器面一部ハケ目残す。丁寧なヘラナデ。	胴下半欠。 口縁一部欠。
高 坏	6	口径 20.0 現存高 6.8	口縁部立ち上がりに段をもち、上部に浅い沈線廻る。口縁は直線的に開く。赤色。砂粒多く含む。	風化著しく観察不能。	坏部のみ。
甕	7	口径 15.4 現存高 3.4	口縁S字を呈する。肩部から口頸部で内折し強くくびれる。器壁極めて薄手で、立ち上がりやや肥厚。口唇端部で内傾気味。明褐灰色。細砂含。	口縁内外面丁寧なヨコナデ。胴部外面に細かいハケ目有する。	口縁。胴部上半 $\frac{1}{3}$ 残。周溝外
甕	8	口径 15.5 器高 17.2	形態崩れる。口縁中位肥厚。直線的に立ち端部外反。明褐色。砂粒多。	器面ヘラケズリ。内面ナデ。口縁部ヨコナデ。	完 周溝外
甕	9	口径 20.2 器高 21.3	口縁外反気味に強く開く。胴上半に最大径もち、肉厚。明黄橙色砂粒。小礫多。	内面粗いナデ。口縁ヨコナデ。器面ヘラナデ。	周溝外

(3) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（第 120 図）

第2調査区西端エー9区で検出された。第1、2号住居跡に近接し、建物群のうちでは最も西側に位置している。

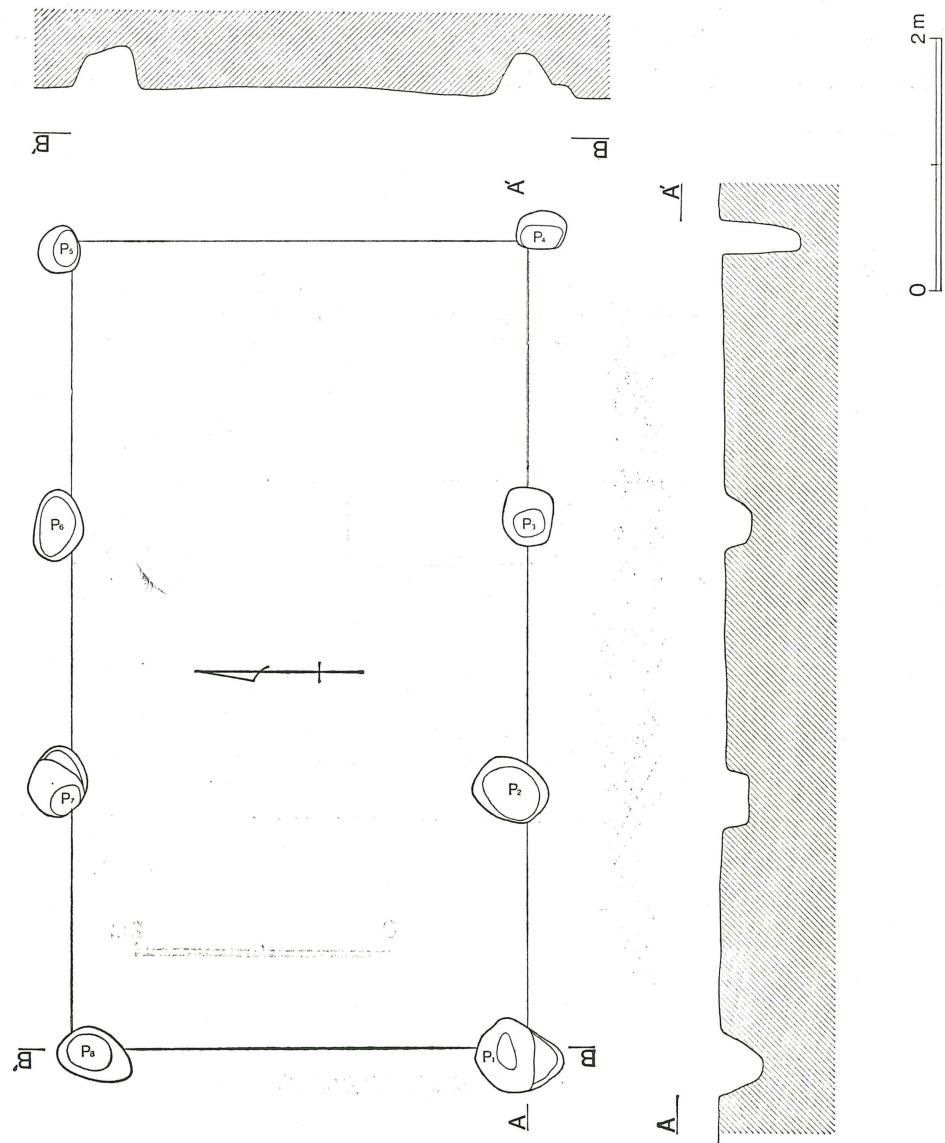
建物跡は桁行3間×梁行1間の東西棟で、主軸は座標東西軸と一致する。

柱間寸法は桁行が7尺(2.1m)等間、梁行柱間は9尺(2.7m)を測り、柱穴は整然と配されている。

柱穴形態は概ね橢円形、乃至は長方形プランを呈し、桁行東西側P₁、P₄、P₅、P₈が他の柱穴に比べて深く掘り込まれている。深さはP₁=34cm、P₄=53cm、P₅=34cm、P₈=40cm、P₂、P₃、P₆、P₇は20cm前後をはかる。

2号掘立柱建物跡（第 121 図）

第2調査区西端ノー8区で検出された。遺構は第1、2号住居跡に狭まれ、第1号建物跡とは、



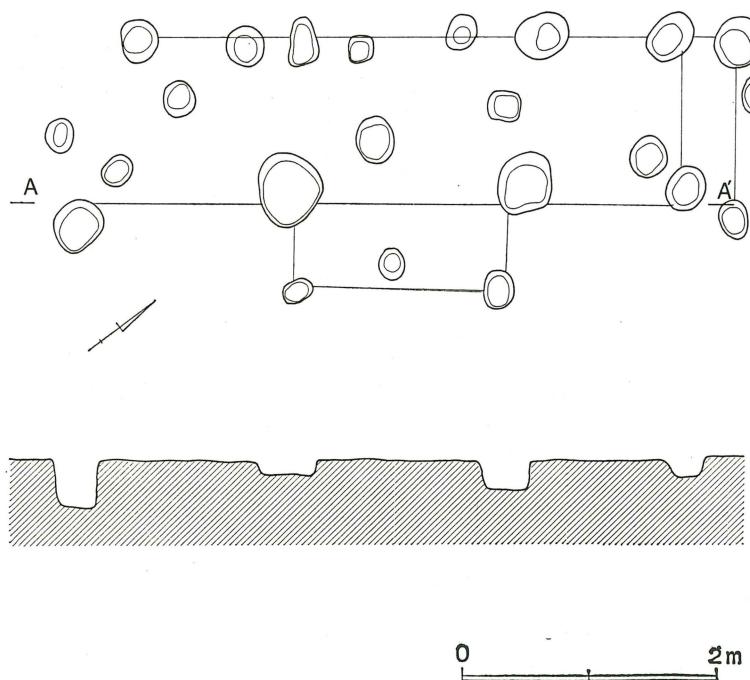
第120図 第1号掘立柱建物跡

長軸方向が多少ずれているが、近接しており、両者の関係が考慮される。

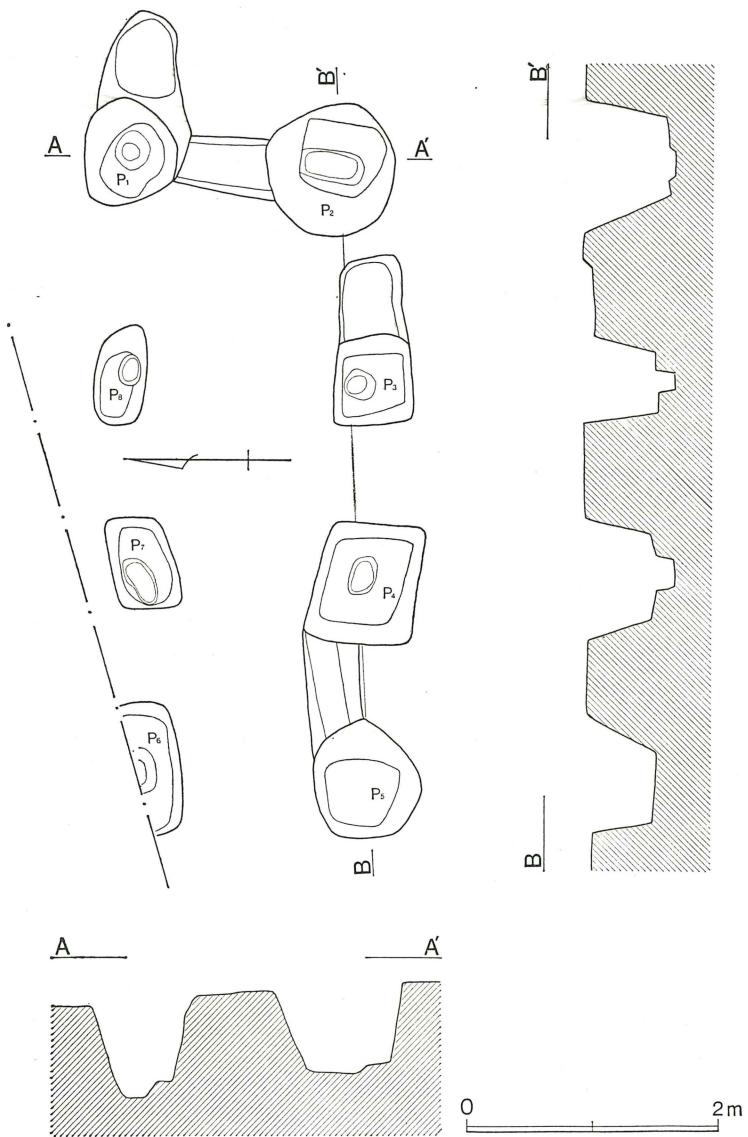
建物跡は桁行3間×梁行1間の東西棟で主軸はN—25°—Wを測る。

柱間は桁行西妻寄りが8尺(2.4m)東妻寄りが5尺(1.5m)梁行柱間は東側1.6m、西側1.7mと不均一であり、穴配列も西側部分が不明瞭となっている。

柱穴形態は概ね円形プランを呈し、径はP₁、P₃、P₆=30cm、P₂、P₄、P₅=25cm前後を呈する。確認面からの深さは各柱穴とも概ね25cm前後を測る。柱痕跡は認められず、柱穴内には暗灰色砂質土が一層認められたのみであった。



第121図 第2号掘立柱建物跡



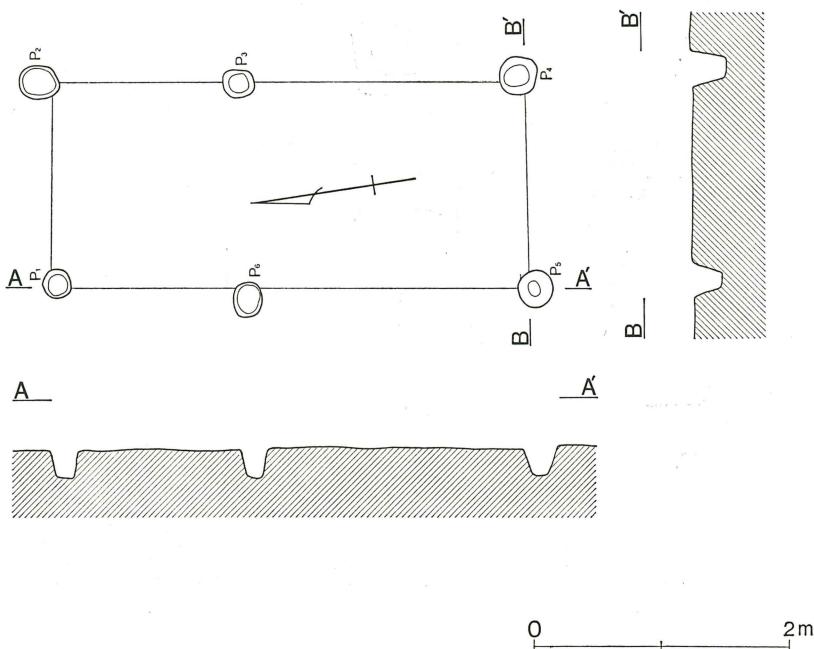
第122図 第3号掘立柱建物跡

3号建物跡（第122図）

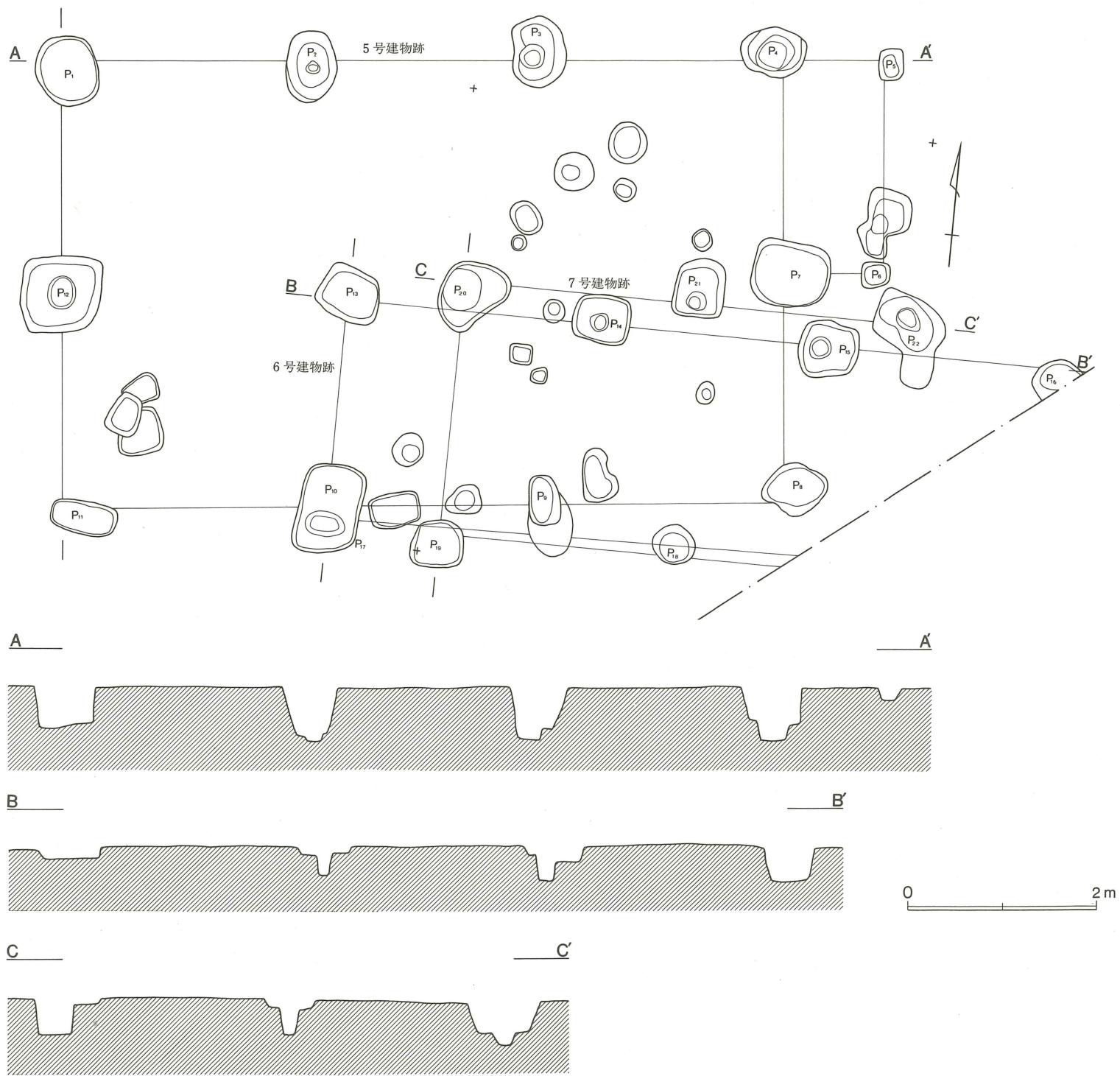
ラ-13区で検出された。4号住居跡に近接する。北側が調査区域外となっているため、全容は不明であるが、検出された柱穴配列をみると、桁行3間の東西棟と思われる。主軸はN-76°-E。柱間寸法は桁行南側両妻寄りが1.7m、中間が1.5m、南側東妻寄りが1.7m、西妻寄りが1.6m、中間は1.5mである。梁行は柱間1.7mである。P₄は北側に入るが、全体に整然と配列されている。P₁～P₂とP₄～P₅間はそれぞれ深さ15cm前後の浅い溝で連結されている。柱掘形には方形乃至は長方形を呈するP₂～P₃、P₆～P₈と橢円形を呈するP₁、P₄～P₅がある。P₁を除く柱掘形底部に、柱埋込み穴と思われる一段深い掘り込みが検出された。柱穴下底までの深さは65cm前後で、柱根部は更に20～30cm程度掘り込んでいる。

4号建物跡（第123図）

ラ14区 4号住居跡床面上で検出された。柱穴は円形で小さく、形態的には1～2号建物に似ている。床面精査で4号住を切って構築したものと判断した。2間×1間の南北棟で、柱間は桁行南妻寄りが2.2m、北妻寄りが1.6mと不整である。柱穴は床面よりの深さが約30cmで、柱痕跡は認められない。主軸はN-8°-E。



第123図 第4号建物跡



第129図 第5、6、7号掘立柱建物跡

5号建物跡（第124図）

ナ15区で検出された。3間（6.3m）×2間（5.6m）の東西棟で、梁行東側に1対の小ピットから成る膨り出しをもつ。梁行柱間は8尺（2.4m）等間であり、桁行柱間は両妻寄り2.6m、中間は8尺（2.4m）である。膨り出し部はP₄～P₅、P₆～P₇間が各々4尺（1.2m）等間、主軸はE—8°—N。柱掘形は概ね長方形プランをなし、底面までの深さが40～50cmを計る。掘形底面に更に10～20cm程度の一段深い掘り込みが認められる。

本跡はP₂、P₃が11号住居跡を切っており、8号溝に切られている。11号住居跡からは国分期の土器が出土していることから、本跡は平安以降の構築と推定される。

6号建物跡（第124図）

ナ14区で検出された。形態は後述する7号建物跡に近似する。梁行東側は調査区域外となる。3間（6.3m）×1間（3.1m）の東西棟で、主軸はN—4°—S。柱間は桁行側両妻寄りが9尺（2.7m）中間8尺（2.4m）。南側西妻寄りは柱間8尺である。P₁₀、P₁₇は5号建物跡に切られている。柱掘形は方形をなす。P₁₇は西側に若干づれている。底面までの深さは不揃いである。

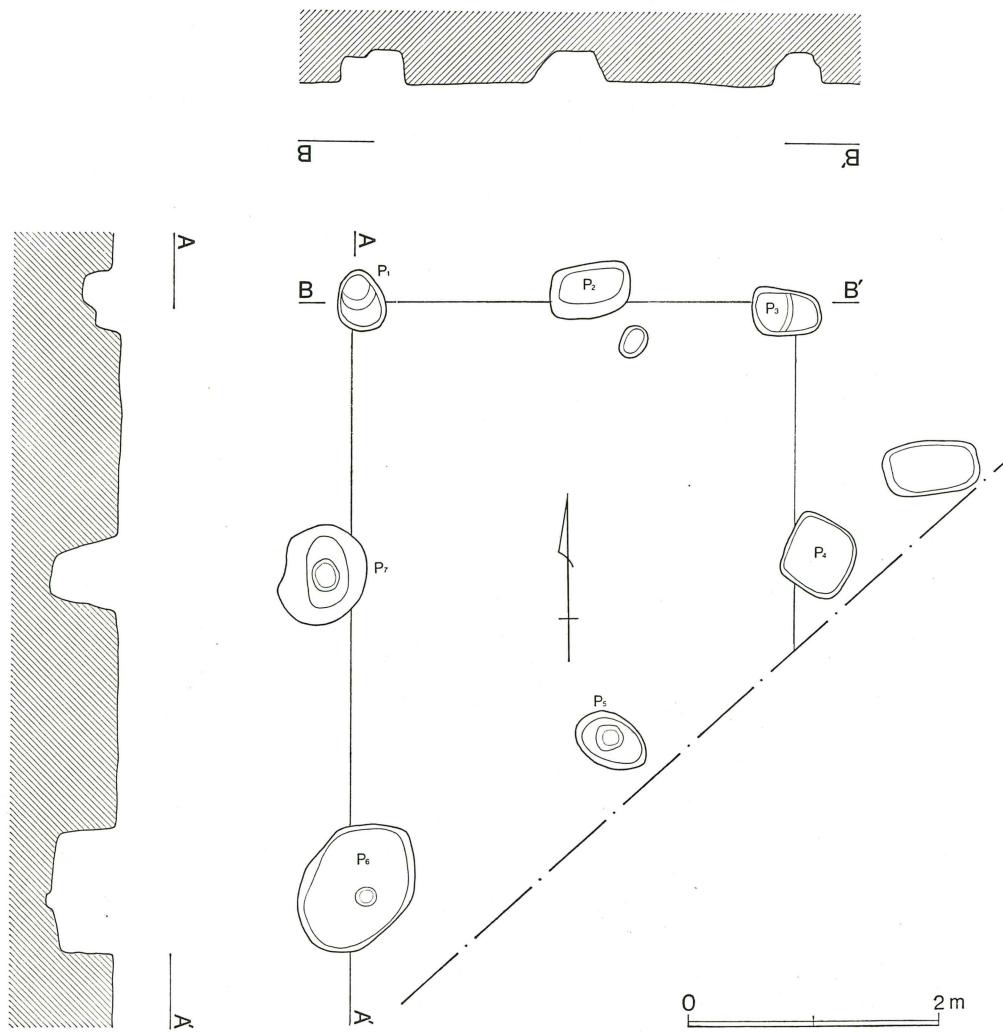
7号建物跡（第124図）

ナ14区で検出され、5、6号建物跡と重複する。梁行東側は調査区域外となっているため、全容は不明であるが、柱掘形、柱間などに6号建物跡との近似性がうかがえ、3間×1間（2.7m）の東西棟であった可能性がある。主軸はN—82°—E。柱間は桁行が8尺（2.4m）等間、梁行西側は9尺（2.7m）である。柱穴間は整然と対応関係にある。柱掘形は、方形乃至は長方形プランを呈し、断面形は不統一である。P₂₀～P₂₁は一段深い掘り込みをもち、各々底面より15、25cmを計る。

8号建物跡（第125図）

ナ16区で検出され、5～7号建物跡東側に近接して存在する。南側は調査区域外となるため、全容は明らかにし得なかった。柱間は桁行P₁～P₆間、P₃～P₄間8尺（2.4m）P₅～P₆間2.6mとやや長い。梁行は6尺（1.8m）等間である。柱掘形はP₂～P₄が長方形乃至は方形プランを呈し、他は不整円形を呈する。P₂を除き、他は断面形は直立気味に掘り込まれている。

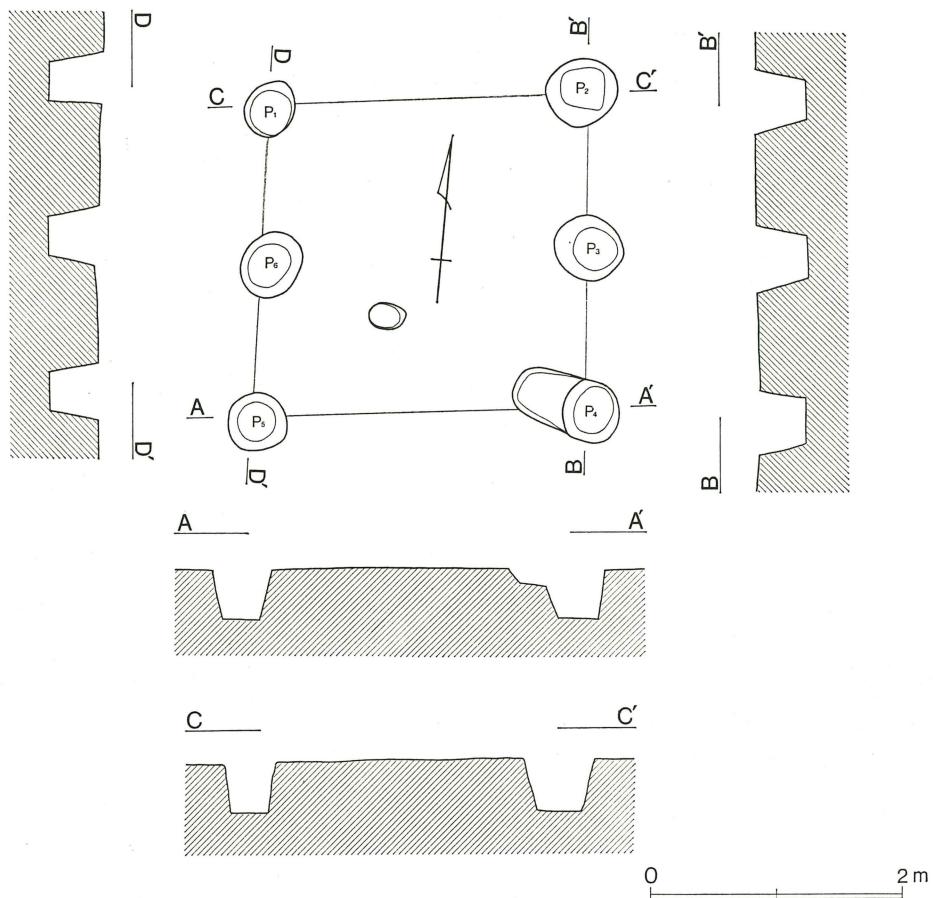
5～8号建物跡の新旧関係は、6～7号建物跡の主軸、柱穴形態、柱間に共通性が認められ、6号建物跡は7号建物跡西側に桁行長軸がづれている点、更に5号建物跡は、6号建物跡を切って構築されている点は、おおよそ7→6→5号との新旧関係をたどることができよう。8号建物跡は形態的には5号建物跡に類似する。5号建物は11号住居を切って構築されている。8号建物は、13号住居を切っている。11号住居は出土遺物から国分期に比定され、平安以降の構築と思われる。13号住居は遺物が出土せず、不明確だが、形態上から5号建物に近接した時期での構築が推定される。



第125図 第8号掘立柱建物跡

9号建物跡（第126図）

ゾ19区で検出され、14～17号住居跡に隣接する。3間（3.0m）×1間（3.0m）の南北棟で、柱穴配列は方形を呈する。ほぼ座標北に主軸をもつ。柱間は桁行4尺（1.2m）等間、梁行9尺（2.7m）等間である。柱掘形は円形をなし、鋭角に掘り込まれている。柱痕跡は検出されなかった。底面は深さ約40cmと均一に掘り込まれ、底面は平坦となっている。鬼高期の住居跡（14号住居）と伴なう可能性がある。



第126図 第9号建物跡

10号建物跡（第127図）

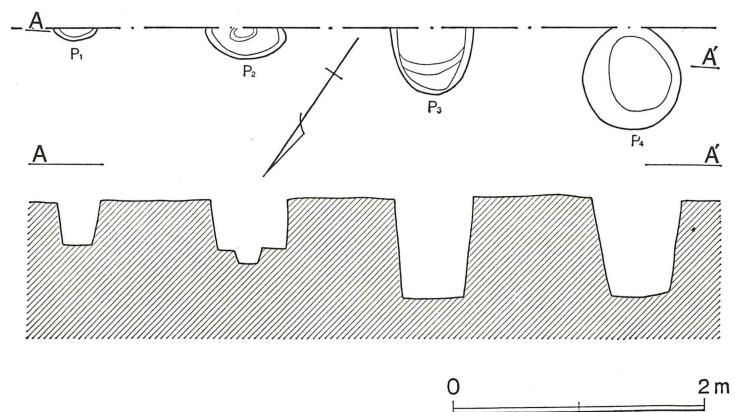
ソ21区南壁際で検出された。完掘された柱穴はなく、大半が調査区域外となっている。各柱穴の柱間は5尺（1.5m）等間、P₃、P₄は底面まで80cmを計る。P₂は40cmで、底面下に更に15cm程度の掘り込みがある。P₁は底面まで完掘できなかった。

11号建物跡（第128図）

41区で検出された。12号建物跡に隣接する。柱掘形は円形乃至は楕円形をなし、鋭角に掘り込まれている。柱間はP₁～P₂間17m、P₂～P₃間1.4m、他は5尺（1.5m）となる。北側は調査区以外のため不明である。

12号建物跡（第128図）

41～42区にかけて検出された。11号建物跡東側に隣接する。主軸はE—N。柱掘形は径15cm前後の円形プランをなし、掘り込みは15cm前後と浅い。3間（3.6m）×1間（3.6m）でほぼ正方形の柱穴配列を呈する。柱穴配置は不整で東側は対応しない。



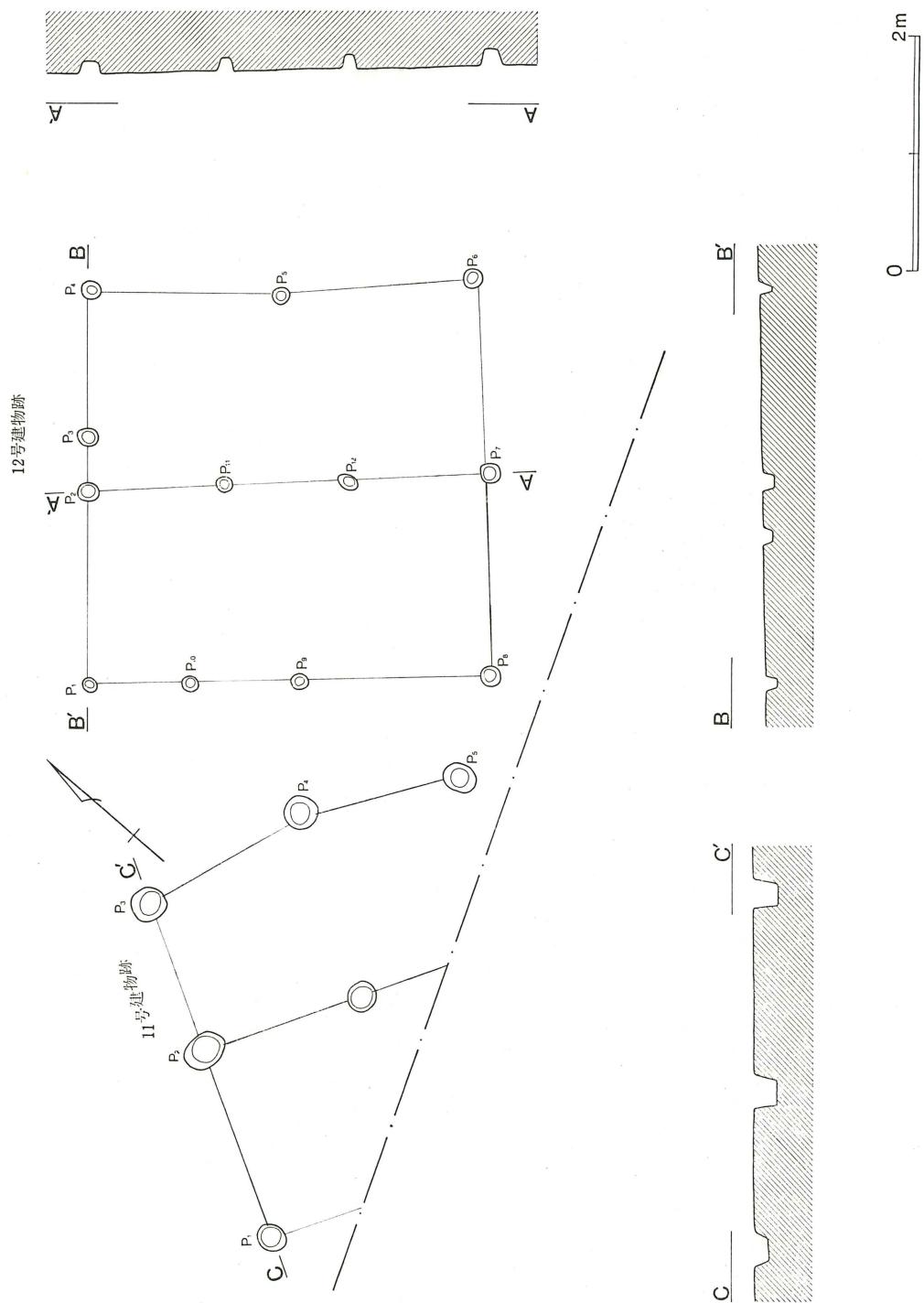
第127図 第11号建物跡

13号建物跡（第129図）

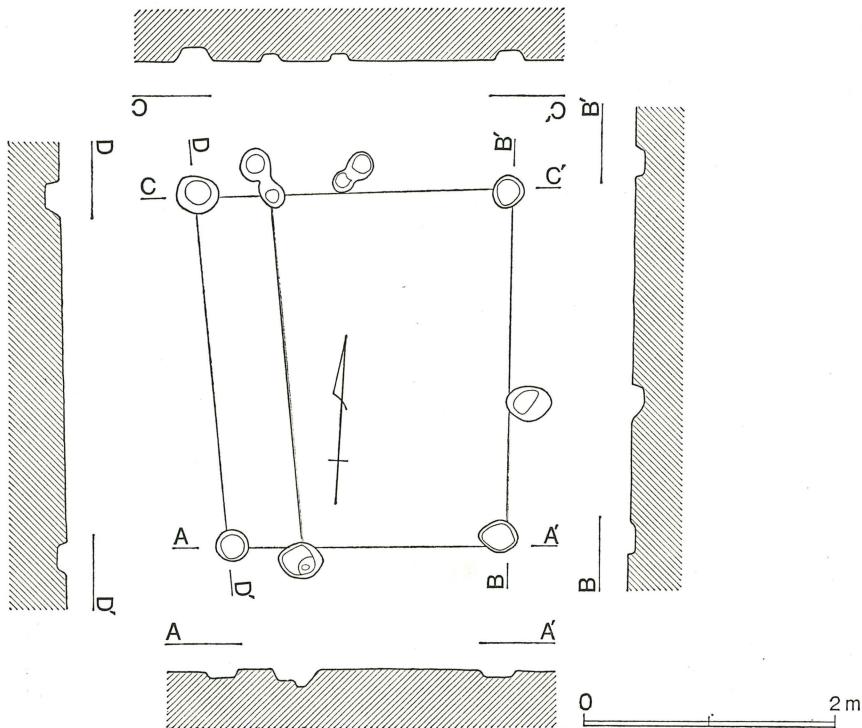
ハ—49区で検出された。柱穴の対応関係は整然としない。柱間はP₁～P₃ 2尺 (60cm), P₁～P₆ 8尺 (2.4m), P₁₀～P₈ 7尺 (2.1m), P₆～P₈, P₁～P₁₀ 9尺 (2.7m), P₇～P₈ 1.0mとなる。

主軸をほぼ座標北にもつ。

11～13点建物跡はその形態から中世以降の所産と考えられる。



第128図 第11、12号建物跡



第129図 第13号掘立柱建物跡

(4) 土器棄場と出土遺物 (第130~136図)

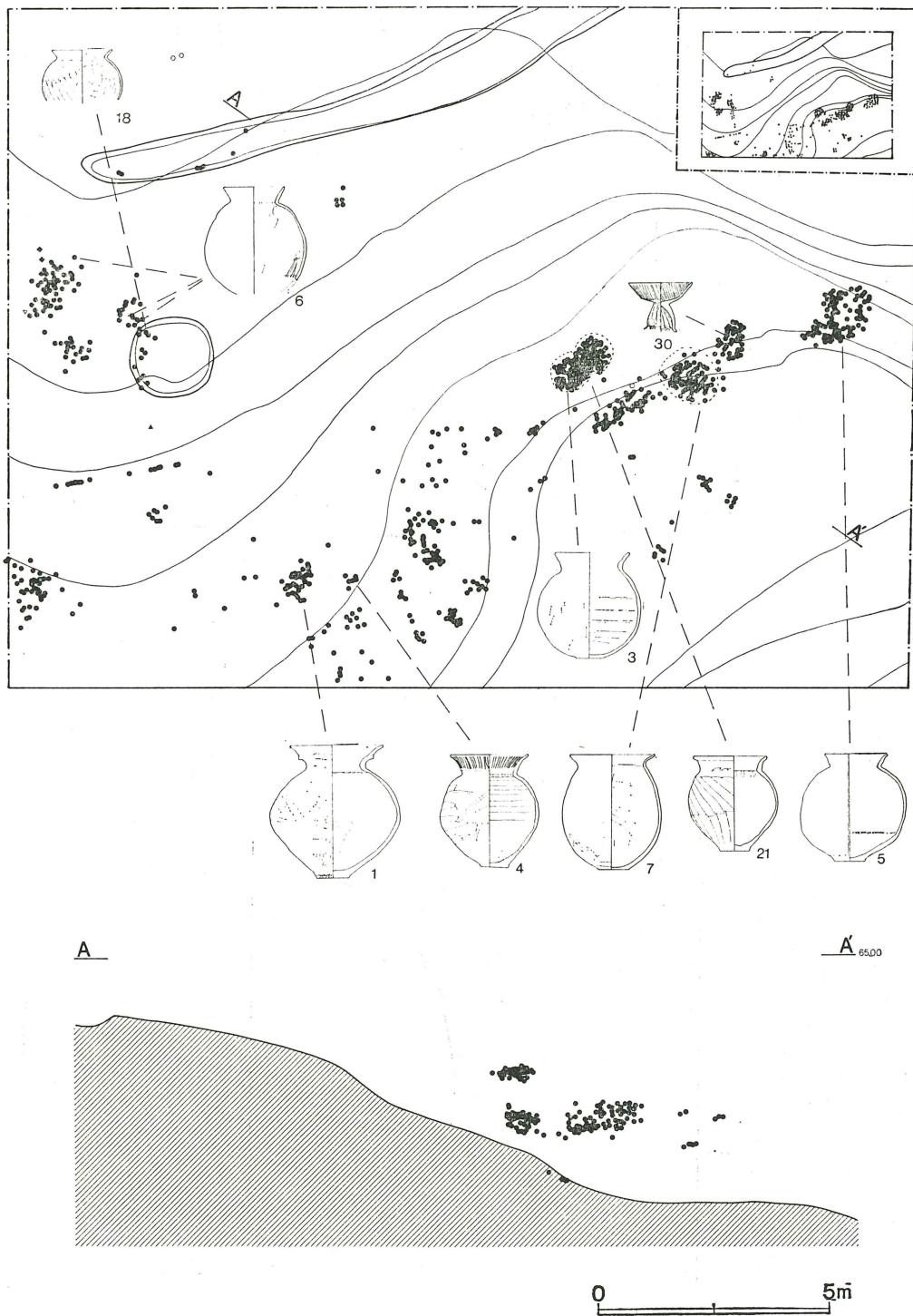
第3調査区西端カ—27~28区にかけて検出された。土器棄場は23~28区にかけて検出された谷状を呈する旧地形、谷部下面において検出されたものである。このうち、特に遺物の集中していた個所を図示したが、谷の埋没に伴って、覆土中にも多量の遺物が検出されている。

土器棄場として一括出土土器群が検出されたのは、カ—27区においてであった。

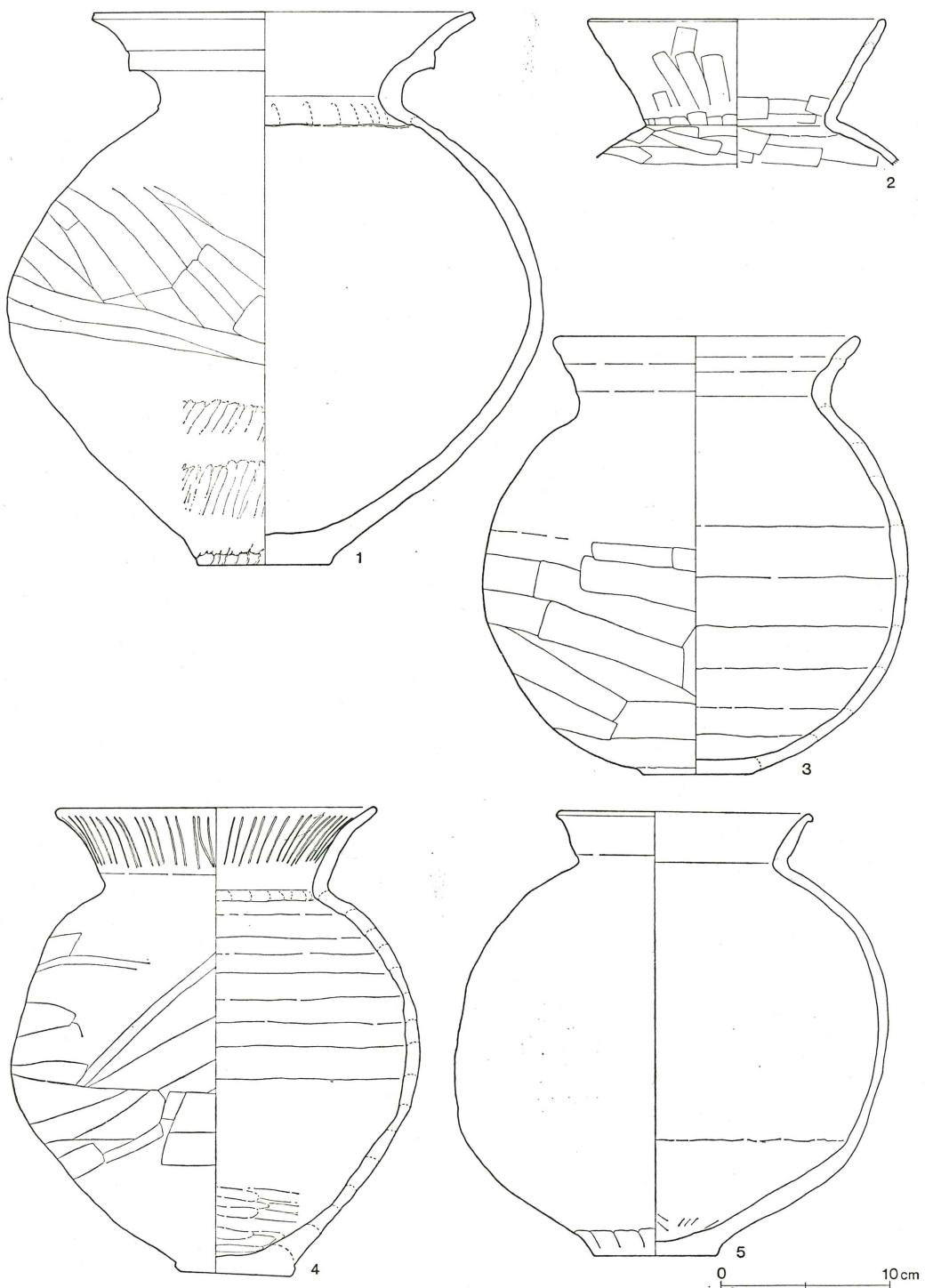
第3区で検出された旧地形は、23区より蛇行して調査区域内を東西方向に伸び、29区で調査区域外となっている。

谷は23区より東方向にゆるやかな落込みをもち、カ—27区で最深部、標高 62.25 m、現地表面より—3 m を測る。24~26区で舌状に膨り出し、28~29区で屈曲する。土器集中個所は、カ—28区で検出され、谷下面に沿って集中して完形土器の出土がみられた。

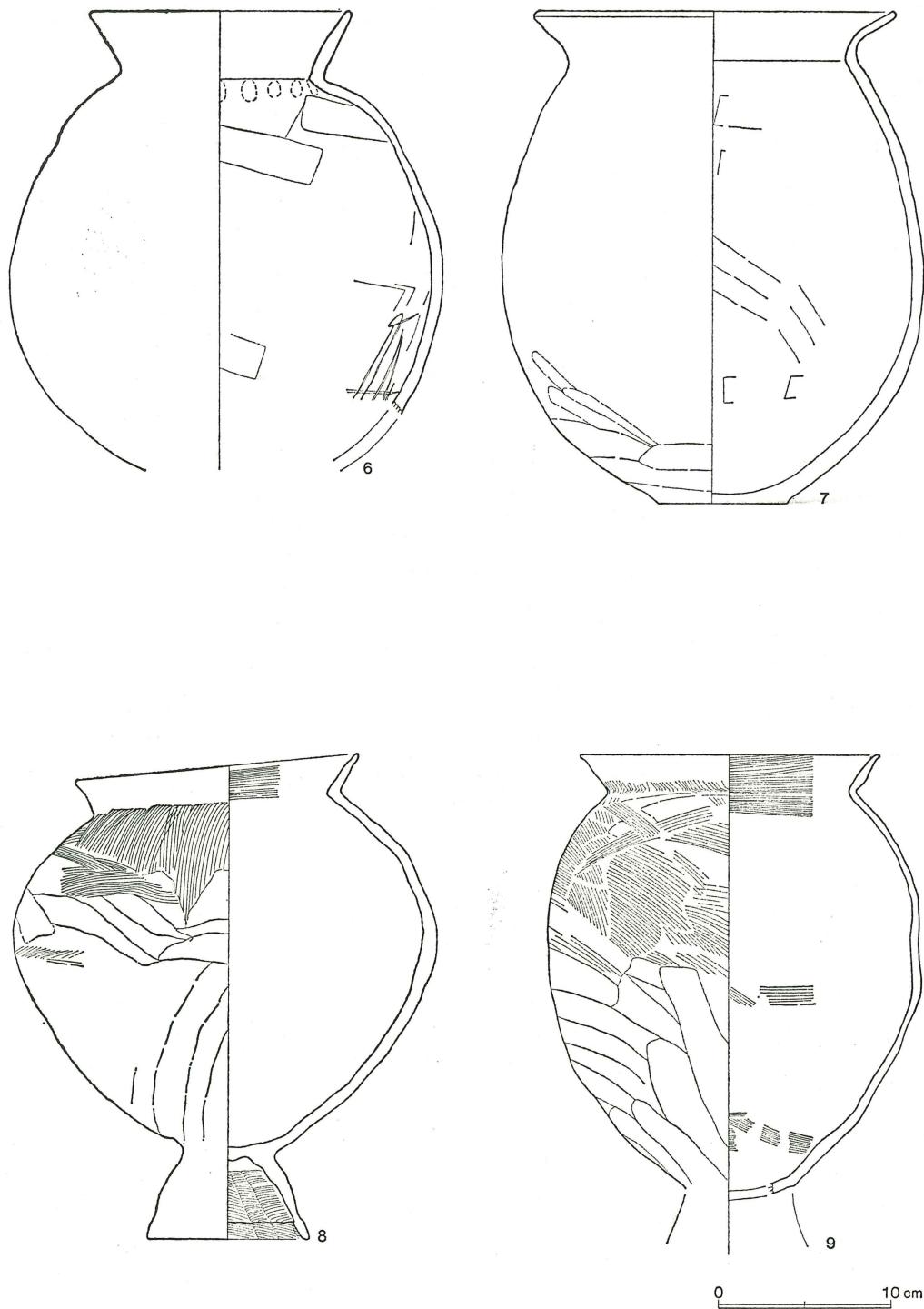
遺物は概ね2地点に集中しており、谷の落ち込み部から平坦面に至る区域に集中していた。出土土器はほぼ器形復元できるものが多く、壺、甕が出体を占めている。出土土器群から和泉～鬼高間にかけての所産と思われ、遺物レベルは両地点とも63 m 前後にほぼ平均して検出されている。



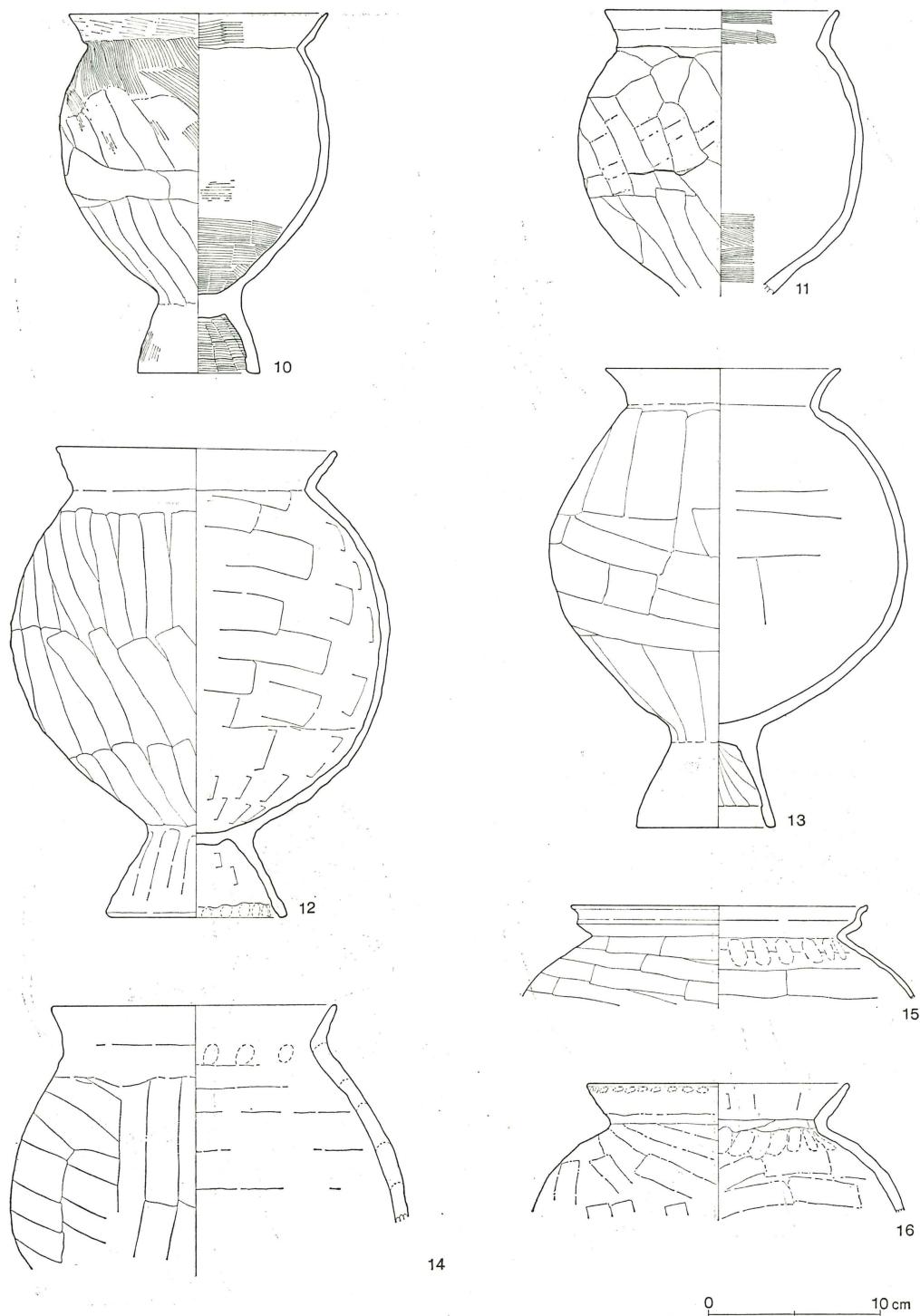
第130図 土器棄場遺物出土状態



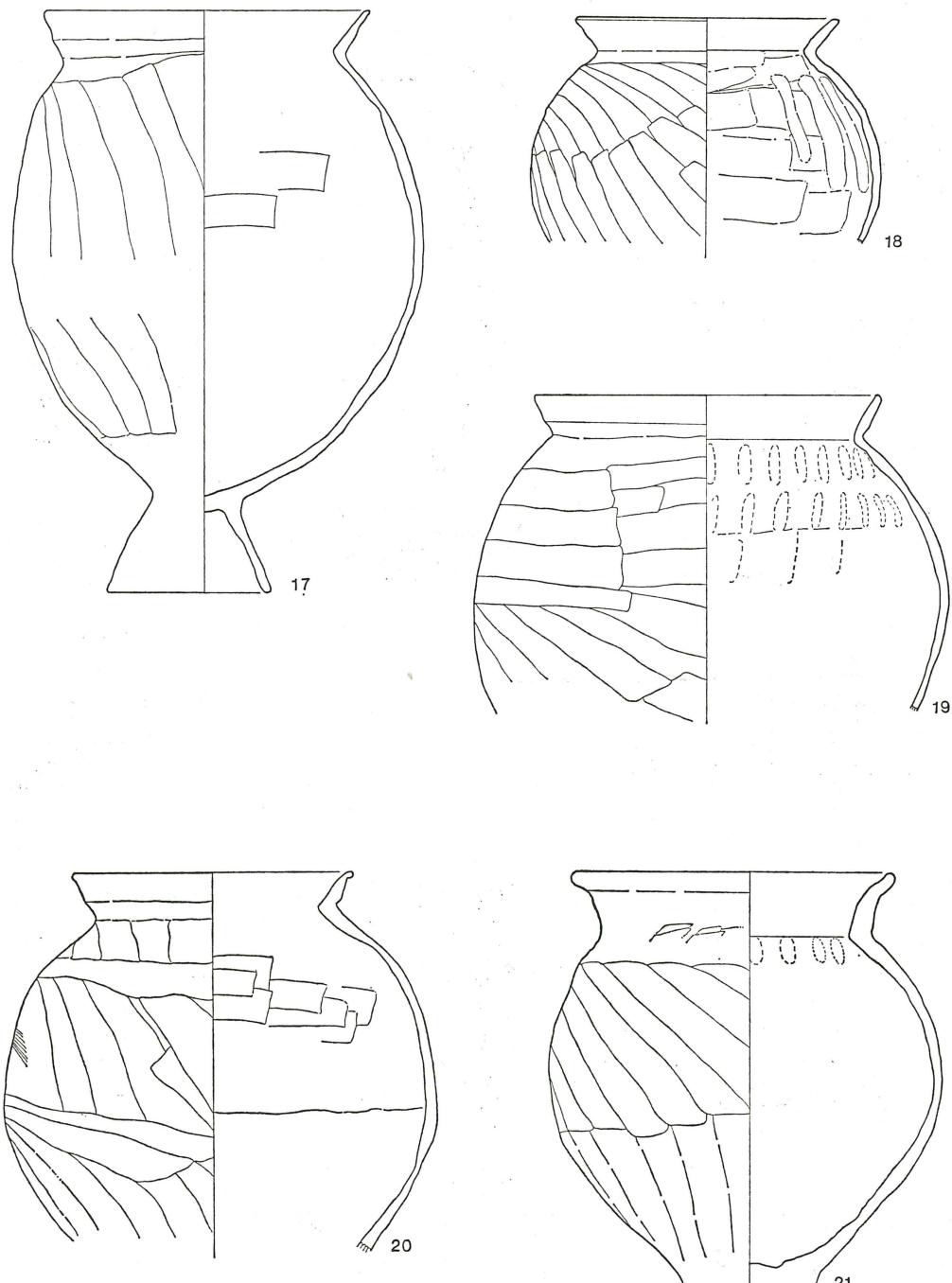
第131図 土器棄場出土遺物



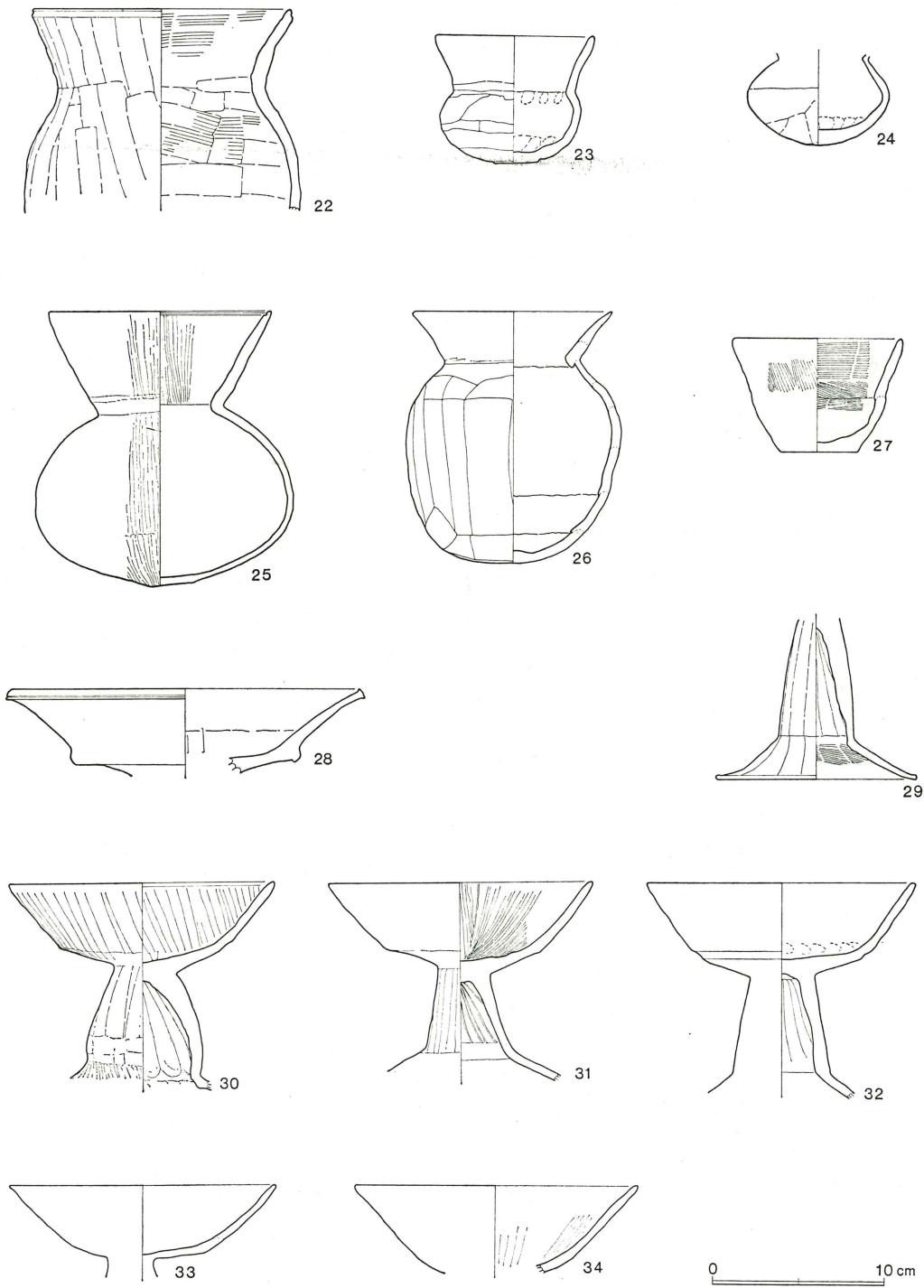
第132図 土器棄場出土土遺物



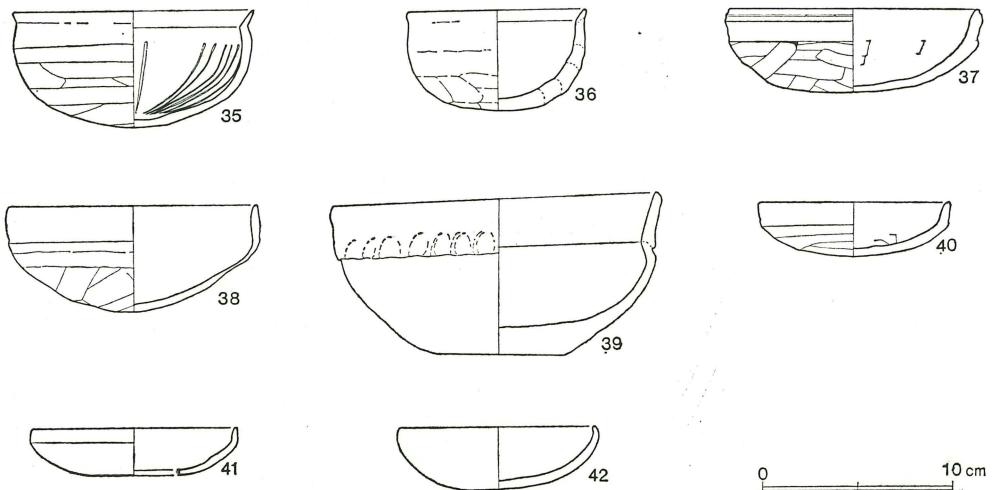
第133図 土器棄場出土遺物



第134図 土器棄場出土遺物



第135図 土器棄場出土遺物



第136図 土器棄場出土土器実測図

土器棄場出土土器

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径 23.1 器高 33.2 底径 8.1 最大径32.2	胴部中位で大きく膨り、頸部で強くすぼまる。口縁は有段で頸部より外反気味に強く開く。口唇は平坦。胴中位より底部にすぼまる。口縁内面にゆるい段をもつ。暗黄色乃至赤褐色。砂粒。小礫多。	器面は底部周辺に指頭ナデ。胴下半部はヘラナデが施され、上半部はヘラケズリ後、ナデが加えられる。内面は丁寧にナデられる。口縁内外は共に丁寧な横ナデ。	口縁一部欠
壺	2	口径 18.1 現存高 9.0	頸部で強くすぼまり、口縁は直線的に開く。最大径を胴部にもつ。暗黄褐色。砂粒、小礫多。	器面胴部ヘラケズリ。口縁に部分的にヘラケズリ痕残る。内面ヘラナデ口縁は丁寧なヨコナデ。	肩部以下欠
壺	3	口径 18.9 器高 26.3 底径 6.6 最大径25.8	球形胴部で、胴下半に最大径をもち上半部はゆるく立ち上がる。頸部でくびれ、口縁は凹凸も外反気味に立ち上がる。暗黄褐色。砂粒多。	器面胴部はヘラケズリ後ナデられ、下半部にヘラケズリ痕残る。内面はナデされるが下半部に輪積み痕残る。口縁内外は丁寧なヨコナデ。	完
壺	4	口径 19.6 器高 28.0 底径 6.6 最大径25.0	胴中位に最大径もち、頸部で強くくびれる。口縁外反し、端部強く外傾。形状崩れる。暗褐色。砂粒含多。	器面ヘラケズリ後全体をヘラナデ。胴中位にヘラケズリ痕残す。内面下半ヘラナデ、上半は粗いヨコナデ。口縁内外は丁寧なヨコナデ後暗文施す。	完
壺	5	口径 15.4 器高 26.6 底径 7.5 最大径25.3	形状崩れる。胴部は中位で膨り頸部で強くくびれる。口縁肥厚し外反、端部外方に強く膨り出す。暗黄褐色。砂粒多。	器面底郎周辺にヘラナデ痕残る。全体にヘラナデを丁寧に施す。内面底部周辺にヘラナデ、他はヨコナデ。口縁内外ヨコナデ。	完

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	6	口径 15.3 現存高23.3 最大径25.5	胴やや下半に最大径もち、球形に近い形状。頸部くびれ強く口縁直線的に開く。暗黄褐色。砂粒、小礫多。	器面丁寧なヘラナデ、内面胴部ヘラナデ。一部暗文状。口縁部に指頭おさて、口縁内外丁寧なヨコナデ。	底部欠
甕	7	口径 21.2 器高 28.7 最大径24.8	胴下半に最大径もつ。ゆるやかに立ち上がり口縁は中位で屈曲し強く外反し立ち上がる。暗黄褐色砂粒多。	胴部丁寧なヘラケズリ。下半はやや粗いヘケナデ。内面胴部ヘラナデ後全体をナデ。口縁内外ヨコナデ。	体部一部欠
台付甕	8	口径 16.6	形状崩れる。胴上半に最大径もつ。口縁直線的に開き端部やや外反。台部は下端肥厚し内面折り返しを呈する。暗黄褐色乃至暗黄良。砂粒小礫多。	器面粗いハケ目調整後中央部より下半をヘラケズリ、後粗くナデ台部ナデ、内面胴部粗いヨコナデ、台部内面ハケ目調整。口縁内面木口のヨコナデ、外面ナデ。	体部一部欠
台付甕	9	口径 17.7 現存高25.4 最大径21.6	胴上半に最大径。底部よりゆく立ち上がり、橢円形に近い状態口縁は立ち上がり肥なし直線的に強く開く。端部外反。暗黄褐色。砂粒、小礫多。	器面粗くハケ目調整後中央部より下半ヘラケズリ。内面粗くナデハケ目残す。口縁内面木口ヨコナデ、外面丁寧なナデ。	台部欠
台付甕	10	口径 15.6 器高 21.2 台底径 7.4 最大径15.2	胴中位に最大径もつ。ゆるやかに立ち上がり口縁は下位に段をもち直線的に開く。台部彎曲氣味に開き、内面に折り返し本する。明褐色乃至暗黄褐色。砂粒、小礫多	器面ハケ目調整後下半部をヘラケズリ。台部はナデられハケ目部分的に残る。内面下半部ハケ目調整、上半部ヨコナデ。台部内面ハケ目調整。口縁内外木口のヨコナデ。	口縁一部欠
台付甕	11	口径 13.9 現存高16.8 最大径16.9	胴やや上半に最大径もつ。丸味もつ胴部でゆるく立ち上がる。口縁中位にゆるい稜もち外反氣味に開く。	器面全体にヘラケズリ。内面底周部辺ハケ目調整、他はヨコナデ、口縁内面木口のヨコナデ。外面横ナデ。	台部欠
台付甕	12	口径 16.7 器高 27.7 台底径11.5 最大径22.6	胴部丸味強く中位に最大径をもつ。口縁部やや内彎氣味に開く。台部は大きく、強く直線的に開き端部肥厚、内面折り返し有する。暗黄褐色。砂粒、小礫多。	器面ヘラケズリ後、全体を粗くヘラナデ。台部ヘラナデ。内面ヘラナデ痕残る。台部は内面ヘラナデ。折り返し部指頭おさえ、口縁内外ヨコナデ。	口縁、体部一部欠
台付甕	13	口径 14.1 器高 27.0 台底径 8.3 最大径21.2	胴下半丸味強く中位に最大径もつ。形態崩れる。口縁は外反氣味に開く。台部直線的に開き、内面に折り返し有する。暗褐色。砂粒小礫多。	面接合部にヘラナデ。口縁内外ヨコナデ。	体部一部欠

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
台付甕	14	口径 17.0 現存高 15.4	胴部の立ち上がりゆるやかで、口縁短く直線的に開く。中位にゆるい稜をもつ。厚手のつくり。	器面ヘラケズリ後粗いナデ。内面粗いナデ、輪積み痕、指頭おさえ痕残る。口縁内外ヨコナデ。	欠体下半
台付甕	15	口径 17.7 現存高 6.2	S字状口縁有し、稜やや厚く端部強く外反。薄手のつくりで胴部大きく膨る。暗黄褐色。砂粒、小礫多。	胴部単位の狭いヘラケズリ。内面ヘラナデ。口頸部指頭圧痕顯著。口縁内外とも丁寧なヨコナデ。	欠体中央以下
台付甕	16	口径 15.6 現存高 7.5	頸部強くくびれ口縁下端にゆるい稜もち直線的に開く。	器面ヘラケズリ後ナデ。内面ヘラナデ。口頸部指頭おさえ。口縁内面ヘラナデ後ヨコナデ。外面口端指頭圧痕後ヨコナデ。	"
台付甕	17	口径 13.6 器高 32.7 台底径 9.2 最大径 23.5	甕に近い胴部で、最大径中位にもつ。口縁中位肥厚しゆるい稜もち直線的に開く。台部直線的に開き端部若干肥厚。暗褐色。粒砂、小礫多。	胴部ヘラケズリ後粗くナデられる。台部デナ。内面ヘラナデ痕残る。口縁内外ヨコナデ。	完
台付甕	18	口径 15.0 現存高 20.1 最大径 12.4	胴部丸味強く頸部で強くくびれる。口縁直線的に外反。	器面ヘラケズリ。内面幅広の横縦位のヘラナデ。口縁内外ヨコナデ。	体下半欠
台付甕	19	口径 19.8 現存高 18.0 最大径 27.1	形態崩れる。胴部丸味強く中位に最大径もつ。口縁下端にゆるい稜もち直線的に開く。	器面ヘラケズリ後粗くナデる。削り痕残る。内面ナデ。上半粗く指頭おさえ、輪積み痕残る。口縁内外ヨコナデ。	"
台付甕	20	口径 16.0 現存高 21.2 最大径 24.7	胴部丸味強くやや下半に最大径をもつ。頸部で強くくびれ、口縁立ち上がりゆるい稜もち肥厚、直線的に開き端部強く外反。暗褐色。砂粒、小礫多。	器面ヘラケズリ後粗いナデ。内面下半丁寧なナデ、上半ヘラナデ痕残る。口縁内外ヨコナデ。	"
甕	21	口径 18.2 器高 23.6 最大径 22.4	胴部丸味強く中位に最大径をもつ。口縁は外傾気味にゆるく開き端部はくびれ外反気味で厚手。暗黄褐色。砂粒、小礫多。	面ヘラケズリ。下半はナデられ削りの単位は不明瞭。内面は丁寧にナデられ口縁部に指頭おさえ、口縁内外丁寧なヨコナデ。	完
甕	22	口径 15.5 現存 11.8	高胴上半ゆるく内彎し、口縁長く直線的に開く。口端に浅い沈線が廻る。	器面ヘラケズリ後丁寧にナデ。内面ハケ目残る。口縁共に木口のヨコナデ。	体下半欠
埴	23	口径 9.4 器高 8.5 胴部最大径 8.3	胴部下端に浅く膨り出した底部もつ。丸味もち頸部でくびれる。口縁は長く直線的に開き、端部内傾気味。	器面胴下半にヘラケズリ残る。全体に丁寧にナデ、内面下端、口頸部に指頭おさえ残る。口縁内外とも丁寧なナデ。	完

器種番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
埴 24	現存高 5.6 胴部最大径 8.5	胴部算盤玉状呈し、くびれ強い。 赤褐色。砂粒含むが胎土良。	全体を丁寧にナデ、胴下半にヘラケズリ痕残る。内面下端指頭おさえ。他は丁寧なナデ。	口縁欠
小形壺 25	口径 13.4 器高 16.2 胴部最大径 16.5	胴部最大径を下半にもち、底部より強く開き頸部で屈曲。口縁は直線的で中位で外傾気味に開く。 内面端部にゆるい稜もつ。灰黄色砂粒多。	器面全体に丁寧なヘラミガキ。 胴部内面丁寧なナデ。口縁内面丁寧なヘラミガキ。	完
小形壺 26	口径 11.8 器高 14.9 胴部最大径 12.8	胴下半丸味もち内彎気味に立ち上がり肩部でくびれる。口縁は接合痕明瞭に残し直線的に開く。端部外反気味。	器面幅広のヘラケズリ後軽くナデる。内面丁寧なナデ。下半部輪積み痕残る。口縁内外ヨコナデ。	完
鉢 27	口径 10.0 底径 4.7 器高 6.8	底部より内彎気味に立ち上がり中位で直線的に開く。	内外面にもハケ目調整後、外面粗くナデ、内面下半ナデ。	完
壺 28	口径 20.9 現存高 5.3	有段口縁壺。立ち上がりの段は下端丸味をおびて直立気味に立ち上がる。口縁は外反気味に強く開き端部は平坦。口縁下に浅い沈線廻る。暗褐色。砂粒多。精選された胎土。	内面口縁立ち上がり部に接合痕残る。内面は下端ヘラナデ後全体を丁寧にナデ、外面はヘラナデ。	口頸部のみ残
高 坏 29	底径 12.0 現存高 9.8	脚部は径細くゆるやかに直立。 底部は直線的に開き、端部外反。明褐色。砂粒多。胎土良。	柱状部内面ヘラナデ。底部内面ハケ目調整後ナデ。器面は単位の大きなヘラナデ。	脚部のみ残
高 坏 30	口径 16.0 現存高 13.4	坏部は直線的に開く。柱状部は丸味強く下端は直立気味。内面シボリ目顯著。暗赤褐色。砂粒多。胎土良。	坏部内外ヨコナデ後、全体をヘラナデ。柱状部外面ヘラナデ。底部内外面ヘラナデ。	裾部欠
高 坏 31	口径 16.0 現存高 11.8	坏部は直線的に開く。柱状部は短く径細い円錐状。暗赤褐色。砂粒多。小疊含む。	坏部内外ヨコナデ後丁寧にヘラナデ。柱状部ヘラナデ。底部内外面ナデ。	"
高 坏 32	口径 16.2 現存高 12.6	坏部立ち上がりにゆるい段をもち口縁直線的に開く。明黄褐色。砂粒多。	全体に風北著しい。内面立ち上がりに指頭痕残る。	"
高 坏 33	口径 15.9 現存高 5.7	立ち上がり丸味もち口縁直線的に強く開く。端部内面若干肥厚。暗赤褐色。砂粒多。	器内外風北著しく不明。	口縁残

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高 坯	34	口径 16.9 現存高 5.7	坯部立ち上がり丸味強く口縁は外反気味に開き、内面若干肥厚。暗赤褐色。砂粒多。	坯部内外面ともヨコナデ後ヘラナデ。	坯部のみ残
椀	35	口径 12.8 器高 6.2	丸底呈し口縁短く外折する。暗褐色。細砂多いが胎土良。	器面底体部横位ヘラケズリ。内面ヘラナデ後丁寧なナデ。放射状の暗文もつ。口縁内外丁寧なナデ	完
椀	36	口径 9.6 器高 5.4	平底気味の底部より直線的に立ち上がる。口縁外折する。厚手のつくり。灰褐色。細砂含む。胎土良。	器面底体部下半粗いヘラケズリ。器内面ヨコナデ。口縁内外ヨコナデ。	口縁一部欠
坯	37	口径 13.5 器高 4.5	口縁立ち上がりに段をもち、口唇は外削ぎ状を呈する。厚手のつくりで底体部平底気味。灰黄褐色	器面底体部ヘラケズリ。内面やや粗いナデ。口径内外ヨコナデ。	13欠
坯	38	口径 13.4 器高 5.6	底体部深く強く開く。口縁立ち上がりにゆるい段をもちゆるく内傾明赤褐色。砂粒多。	全体に風化著しい。器面底体部ヘラケズリ。内面ナデ。口縁内外ヨコナデ。	口縁一部欠
鉢	39	口径 17.6 器高 8.3	底部より内傾気味に開き口縁立ち上がりで内折。二重口縁もち直線的に開く。明褐色。砂粒、小礫多。	全体に粗いつくり。内外面ナデ。口縁は外面立ち上がりに指頭圧痕もつ。	完
坯	40	口径 10.4 器高 3.0	底体部浅く、口縁は立ち上がりに沈線廻り段を作出。直線的に開く。暗赤色。細砂含み胎土良。	外面底体部ヘラケズリ。内面ヘラナデ。立ち上がりより外面口縁ヨコナデ。	完
坯	41	口径 11.2 器高 2.5	平底呈し口縁内傾気味に立ち上がる。暗赤良。細砂多。	底体部内外面ナデ。口縁ヨコナデ。	底体部一部欠
坯	42	口径 10.8 器高 3.3	丸底呈し内傾気味に開く。口端部内折し若干肥厚する。赤橙色。細砂多。	内面、外面口縁ヨコナデ。底体部風化著しく不明。	完



第137図 水田状遺構

(5) 水田状遺構 (第137~138図)

第3調査区ネー17区で検出された。

遺構は地山が畦畔状に残されており、一辺が長径2.8m×短径1.9mを測る。

全体が確認されたのは一面だけで、精査した限りでは概ね5面が確認されている。

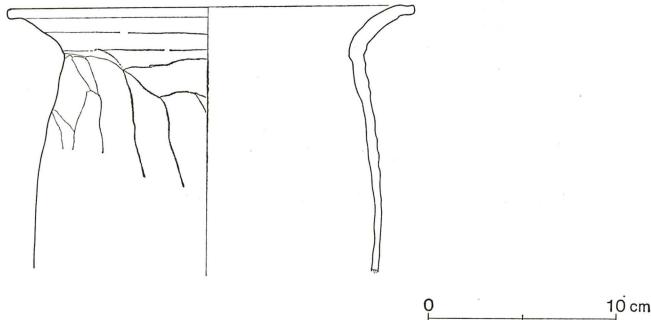
畦畔状の盛土幅は上面が10cm~30cmの幅をもち、下面が30cm~50cmを測り、断面は台形を呈している。

遺構は全体に西から東へゆるやかな傾斜を示しており、粒径の粗い川砂が全面に堆積していた。

砂の堆積は畦畔状遺構が検出された部分にのみ認められた。恐らく川の氾濫によって砂が堆積した部分のみ遺存したものと思われる。

覆土除去後、底面の精査を行った結果、足跡と思われる窪みが2方向にわたって検出された。部分的に畦畔状遺構を切っている。

本遺構に伴なう遺物は検出されなかったが、遺構を切っている溝、覆土中の遺物などから、平安時代以降と推定される。



第138図 水田状遺構覆土内出土遺物

水田状遺構出土土器

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
長甕	1	口径 22 現存高 14.5	体部は中位ですぼまり、口縁部は中位に弱い稜をもち強く外反、端部はほぼ水平に開き、口唇内面に浅い沈線が一周する。暗黄褐色。砂粒多。	体部縦位のヘラケズリ、内面は丁寧なナデ、口縁丁寧なヨコナデ	体下半欠

(6) 溝と出土遺物 (第139~144図)

村後遺跡では総計33本の溝が検出された。そのうち古墳時代に属する溝は2~6、22~23、26、33号溝で他は遺物の出土が貧弱で、明確な時期は不明であった。15号溝は出土遺物から江戸後期と思われる。16~22号溝は15号溝との関連が考えられるが、全て浅い溝で、配列から一群の遺構として一括して類別した。

1号溝

ム~エ~10区で確認された。2、3号溝と併行し、N~13°~Wをもって、ゆるやかに蛇行しながら発掘区を横断する。溝北側は次第に幅狭となる。最大幅は約60cmで、確認面よりの深さは10~15cmを測る。覆土は灰黄褐色砂質土1層のみで遺物の出土はない。

2号溝

ム~エ~11区で確認された。1、3号溝に狭まれ、北側で4号溝を切っている。N~12°~Wをもって発掘区を横断する。覆土は4層からなり、最大幅は2.3m。平均2m前後で、南側で次第に幅狭となる。確認面からの深さは約80cmを測り均一である。断面形は台形をなし、底面は平坦である(第144図1~3)。

3号溝

ム~エ~11区で確認された。N~11°~Eをもって発掘区を南北に横断する。確認面は4号溝より上層にあり、古墳時代以降の構築である。幅は概ね60cm程度で、確認面からの深さは10~15cm程度と浅い。覆土は1号溝と同様、1層からなり。遺物の出土はない。

4号溝

ム~11~14区にかけて確認された。N~84°~Eをもって発掘区を東西方に走る。ム~11区で2号溝に切られ、ム~13区では5号溝を切っている。幅は2~2.3mで、ム~11~12区にかけて、北側に膨り出し状に2ヶ所掘り窪められている。深さは2号溝との切り合い部分で確認面より1.7mを測り、全体に1.6~1.7m前後である。断面形は中位に段をもち、底面は丸味をもつ。覆土は下面に砂層が検出され、酸化鉄分を含んでいる。

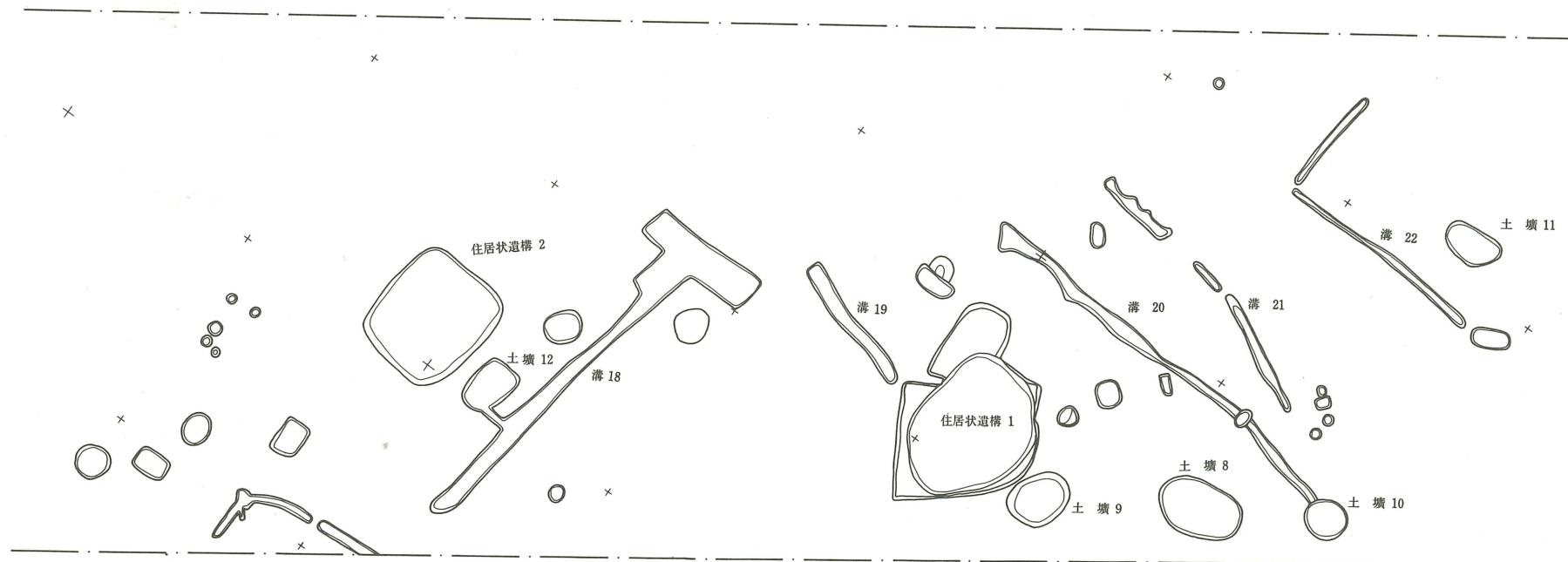
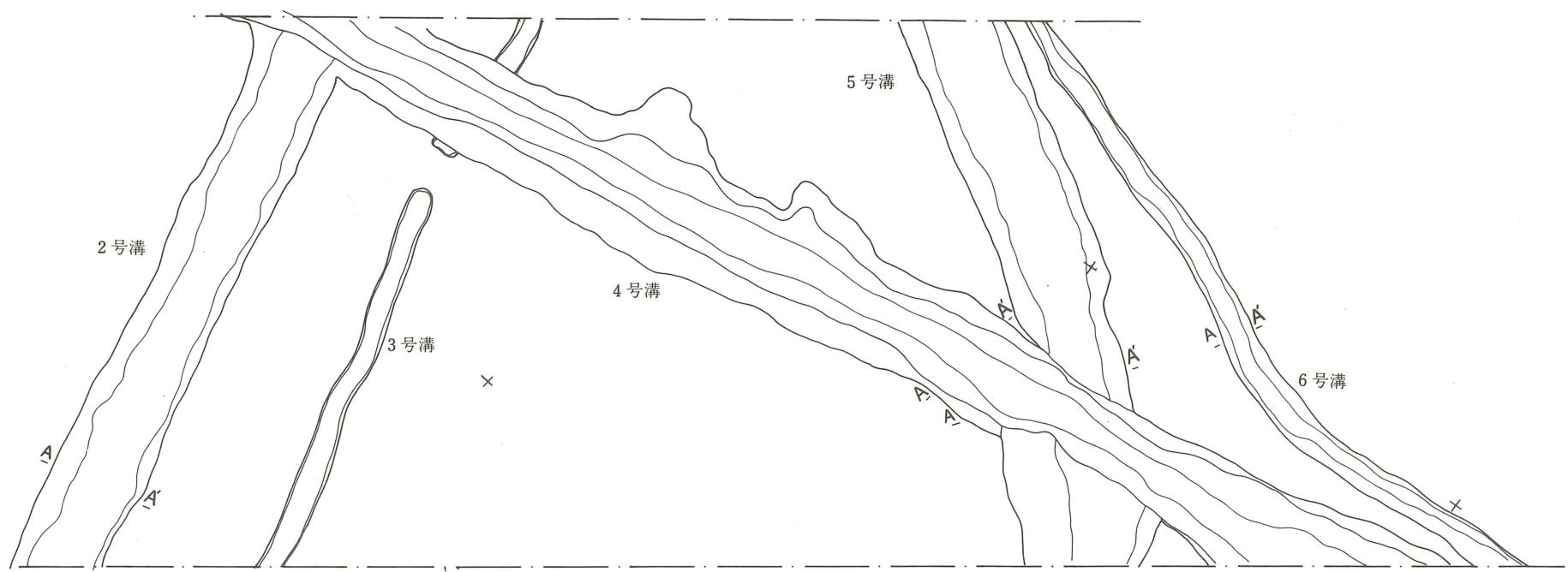
遺物は完形を含む土師器が多く検出されたが、いづれも覆土中位より土層から検出され、全体に風化が著しい(第143図)。

5号溝

ラ~12~ム~13区にかけて確認され、N~49°~Wをもって、発掘区を横断する。ム~13区で4号溝に切られている。切り合い部分で確認面よりの深さは0.5mを測る。全体に0.4~0.5mを測る。5号溝との切り合い部では幅1.6mと最も狭くなる。最大幅は3.2mを測る。断面形は概ね台形を呈する。遺物は完形を含む土師器、須恵器が出土しているが、全て覆土中位からの出土である(第144図4~9)。

6号溝

ラ~12区よりム~14区にかけて確認された。ム~13区で大きく屈曲し、4、5号溝に沿って走る。幅は0.75~1.0mで深さは1.3~1.5mを計る。覆土は5層からなり、遺物は覆土内から土師器細片が出土した程度で貧弱である。



第144図 第2、3、4、5、6号溝、3区溝状遺構

7号溝

ナ—14区で確認された。6号溝に切られており、N— 14° —Eをもって北側に伸びる。長さは3m幅は0.8m前後、深さは0.3mを計り、覆土は砂層1層のみである。遺物の出土はない。

8号溝

ナ—14～16区にかけて確認され、N— 88° —Eをもって発掘区をやや湾曲気味に東西に走る。ナ—14区で6、7号住居を、ナ—12～13区で11、13号住居、及び溝状遺構を切っている。幅は0.9～1.5mで、確認面からの深さは0.55～0.6mを計る。断面形は台形を呈し、底部は幅0.4～0.5mで南側がやや傾斜している。遺物は覆土中から土師器破片が出土した程度である。

9号溝

ネ—15～16区にかけて確認された。西東に蛇行気味に走る。8号溝より派生し、溝状遺構、13号住居の上面で確認された。両遺構埋没後に構築されたものである。幅は0.3～0.5mで深さは0.1～0.15mである。覆土上面から土師器が比較的まとまって出土している（第149図—10～16）。

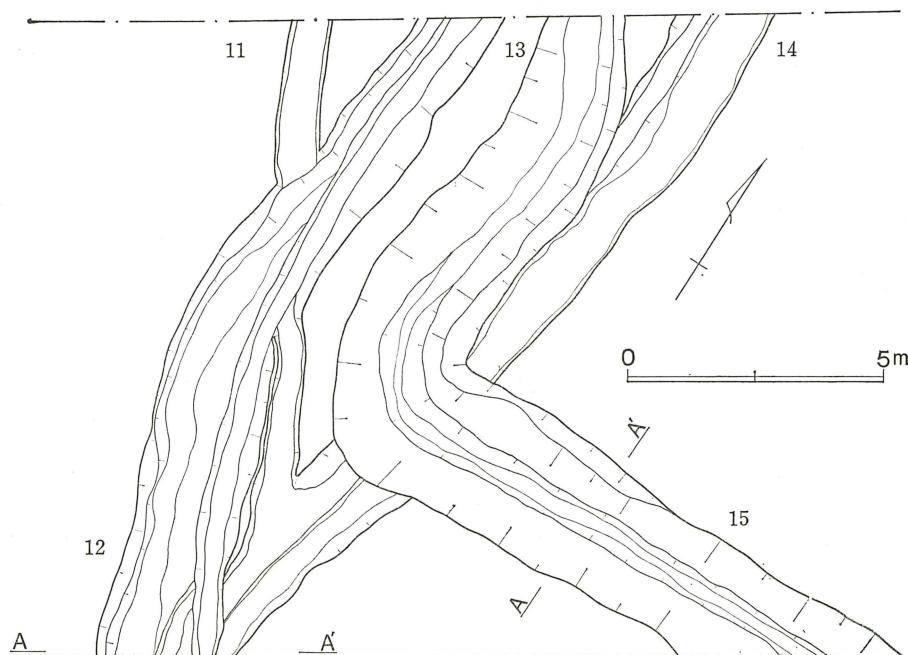
10号溝

ネ～ナ—15ナ区にかけて確認された。発掘区を東西に湾曲して走る。確認面は9号溝と同様である。幅は0.4～0.5m、深さは0.1m前後である。9号溝同様黄灰白色砂質土を覆土にもつ。

11、12、13、14、15号溝（第139図）

ソ～ネ—18区～ツ19区にかけて11～15号溝が重複して検出された。

11号溝は12号溝を切り、13号溝に切られている。確認面での幅は1.4m前後、深さは0.35～0.4mを計る。



第139図 第11、12、13、14、15号溝

12号溝は11、13、14号溝に切られている。幅は0.9m前後、深さは0.3m～0.5mを計り、東南方に向で深さを増している。

13号溝は11、12、14号溝を切り、11号溝東側に重複しながら発掘区を南北に横断する。断面形は溝西側で1段、東側では部分的に2段の掘り込みをもつ。幅は0.6～1.1m、深さは0.6～0.75mを計る。

14号溝はN—8°—Wをもって発掘区を北北東—南々西に湾曲気味に横走し、13、15号溝に切られている。最大幅は1.8m計る。溝東側は2段の掘り込みをもち、深さは0.3～0.6mである。

15号溝はツ18区でほぼ直角に屈曲する。幅は1.7～2.6mで、深さは1.1m前後である。いわゆる「薬研掘り」を呈し、底部幅は0.3～0.5mと狭い。覆土は4層からなり、3層上面には礫とともに近世陶磁器が一括出土した（第145図）。

11～14号溝土層は、発掘区南壁で確認された。その結果、及び、平面形態から、12→14→13→11→15号溝への切り合いが想定される。15号溝を除いては、遺物の出土はなく、時期不詳である。

16号溝

レ～ツ～20区で確認された。N—84°—Wをもって発掘区を南北に横断する。ソ～19区でゆるく屈曲する。地山土である暗黒褐色粘質土を掘り込んでおり、17、18号住居は16号溝埋没後に構築されたものである。幅1.1～1.2m、深さは0.15～0.2mで断面形は台形を呈し、地山土の傾斜に沿って東側壁はやや浅い。覆土は灰黄色砂質土一層のみで遺物は検出されなかった。

23号溝

カ～25～ヲ～27区にかけて確認された。N—45°—Eをもって発掘区を西南西～東北東に横切る。21、22号住居を切っており、ヲ～27区で24号溝と接する。暗黒褐色粘質土を掘り込んでおり、幅0.7～1.0m、深さは最深部で0.48mを計り、北進するにつれて浅くなり、ヲ～27区北壁際で0.14mを計る。暗黒褐色粘質土は22～29区にかけて落ち込んでおり、溝西端は検出できなかった。覆土は7層からなり、遺物の出土は希薄である。カ～25区では21号住居からの遺物が落ち込んで検出された。

24号溝

ヲ～27～28区にかけて確認された。N—83°—Eで、両端はそれぞれ23、25号溝に接しているが、新旧関係は不明である。幅0.3～0.5mで深さは0.2m前後を計る。覆土は暗黒褐色粘質土一層で遺物の出土はない。

25号溝

ワ～27～ル～29区にかけて確認された。N—42°—Eをもって発掘区を西南西～東北東に大きく蛇行気味に横切る。暗黒褐色粘質土下層、暗黄色粘質土を掘り込んでおり、23号溝と併走する。ヲ～28区で24号溝と接する。幅0.4～0.6m、深さは0.2m前後を計る。覆土は暗黒褐色粘質土1層で遺物の出土はない。

26号溝

ヌ～ヲ～29～30区にかけて確認された。南北座標に沿って存在する。暗黒褐色粘質土で確認されたが、北壁の土層観察から、暗黒褐色土上面から掘り込まれていることが確認された。覆土は10層

からなり、下層には砂と酸化鉄分の沈澱が認められた。掘り込み面の幅は立ち上がり部分で1.8m、底部は0.7mで、溝西側は段をもつ。遺物の出土はない。

27号溝

30～35区にかけて、N—53°—Eをもって、発掘区北壁に沿って確認された。30区で溝先端部が南々西にゆるく屈曲する。ト—35区で28号溝に切られている。幅は0.6～0.9mで深さは0.25～0.3mを計る。覆土は暗黒褐色粘質土1層のみで、覆土上面から流れ込みと思われる遺物（第149図—17～19）が出土している。

28号溝

ト～チ—35区で確認された。26号溝と同様、主軸を座標南北方向にもつ。立ち上がりの幅は1.3～1.9m、底部は0.3m前後を計り、溝東壁に段をもつ。27号溝を切っており、29号溝とも重複関係にあるものと思われる。覆土は5層からなる。遺物の出土はない。

29号溝

ト～チ—35区で確認された。N—21°—Wをもって発掘区を横断し、チ—35区では井戸跡に切られている。幅1.5～1.7m、底部で0.2～0.4mを計る。溝東壁に段をもつ。覆土は4層からなり、全て砂質土であり、26・28号溝と近い。遺物の出土はない。

30・31号溝

ホ—38～39区にかけて確認された。30号溝はN—81°—Wで、東西方向に伸びる。幅0.6～0.9m、深さは0.2m前後で、先端部は0.1mと浅い。

31号溝は大部分30号溝に切られている。先端部で幅0.4mで、深さは30号溝との切り合い部分で0.1mをはかる。遺物の出土はない。

32号溝

ホ—38～39区にかけて確認された。30号溝と蛇行気味にはぼ併走し、幅0.55m、先端部で0.9mとなる。深さは0.1m前後で、覆土は30号溝と同様、砂混じりの暗黒褐色粘質土である。遺物の出土はない。

33号溝

ニ～ホ—40～41区にかけて確認された。N—55°—Eをもって発掘区を西北西～南々東に横断する。確認面での幅は0.8m前後、底部は0.2～0.25mをはかる。断面形は概ね整った台形をなす。

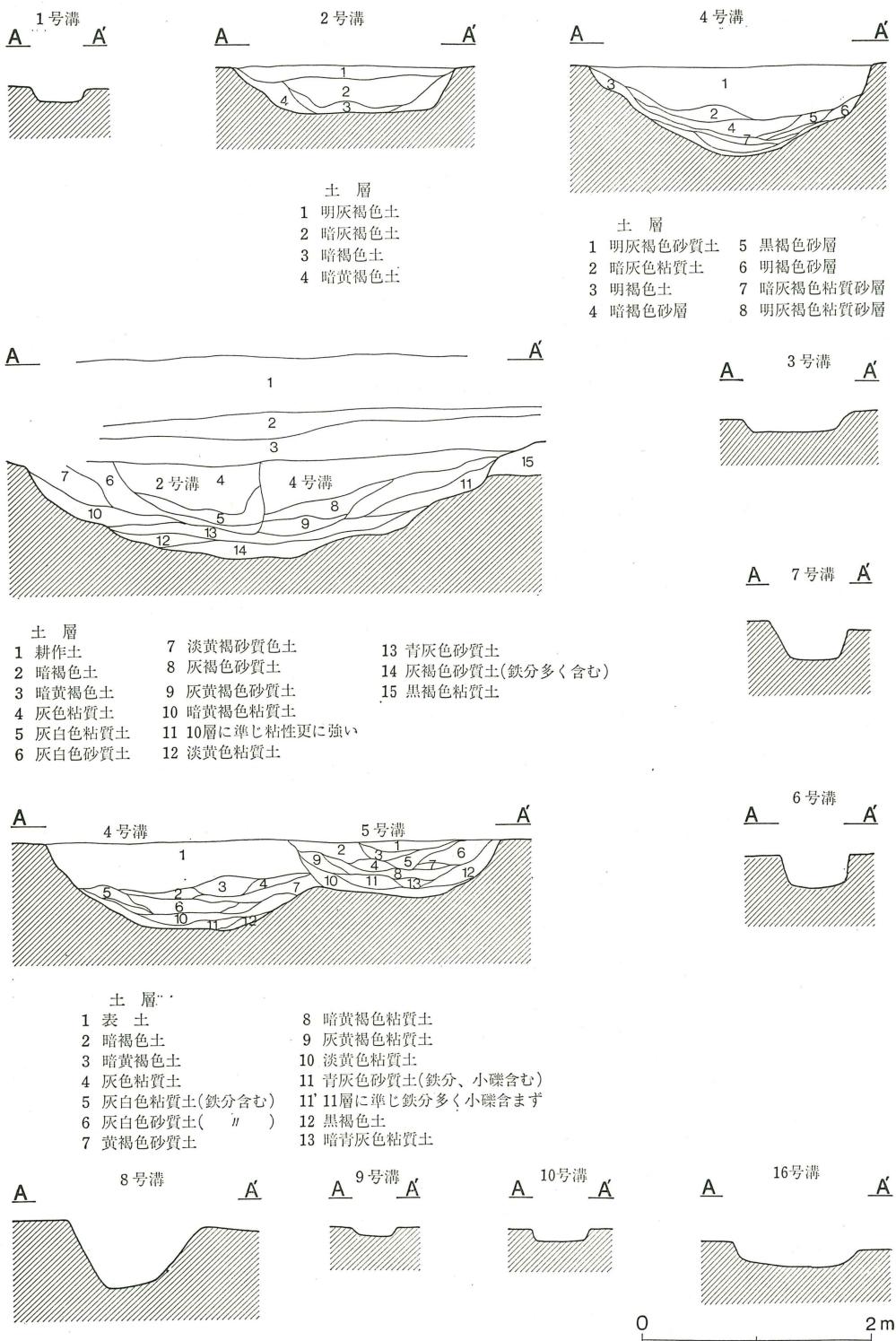
覆土は暗黒褐色粘質土一層からなり、遺物は土師器破片が流れ込んだ状態で覆土上面から若干出土したに過ぎない。

(7) 近世溝状遺構（第140図）

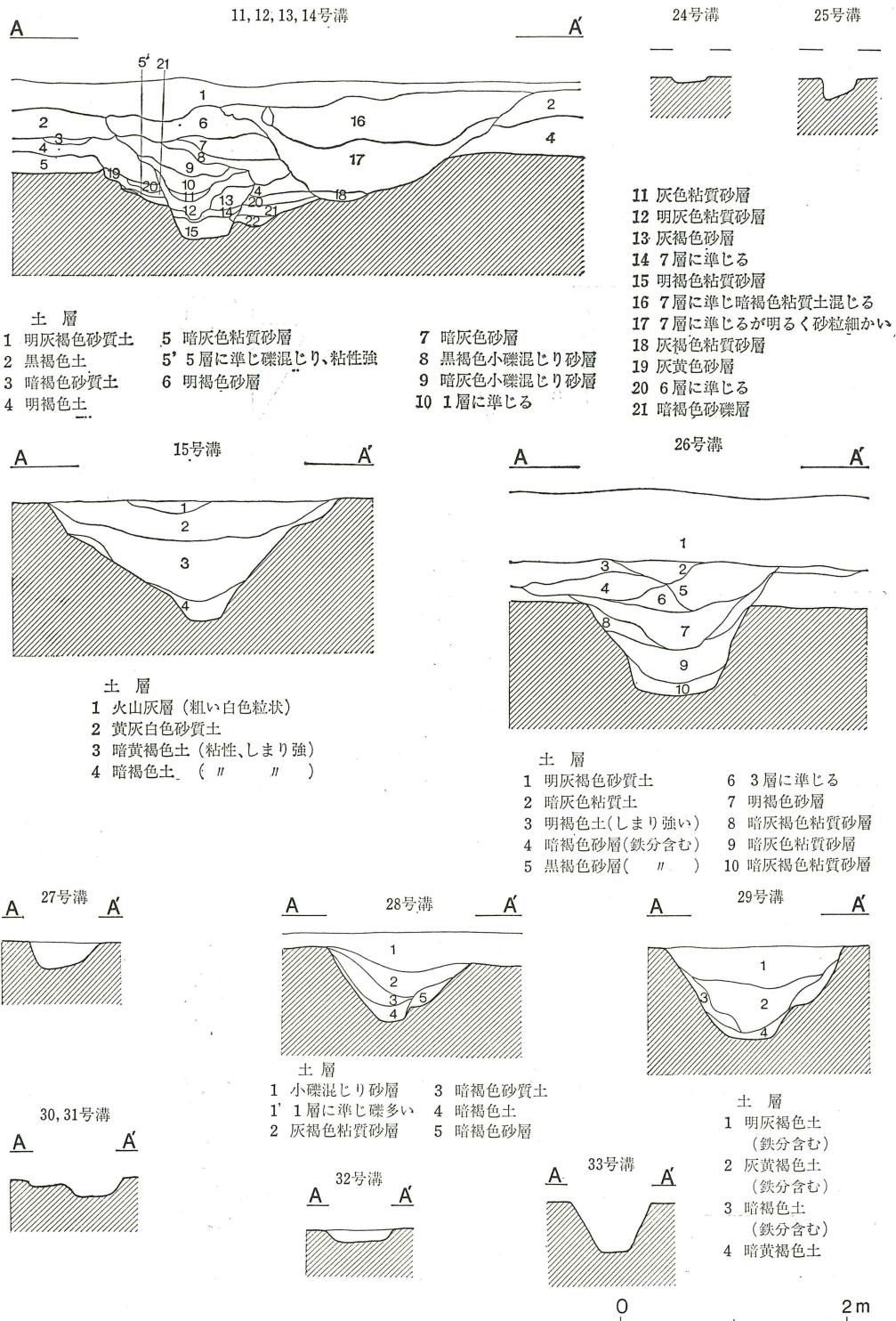
第3調査区20～23区で検出された。遺構は旧地形覆土、暗黄色砂質土上で検出された。概期の遺構は18～22号溝、10～12号土壙、1、2号住居状遺構が該当する。土溝、住居状遺構については別項で取り上げる。

検出された溝は全て確認面より5～10cm程度掘り込まれているにすぎず、全体に非常に浅い。

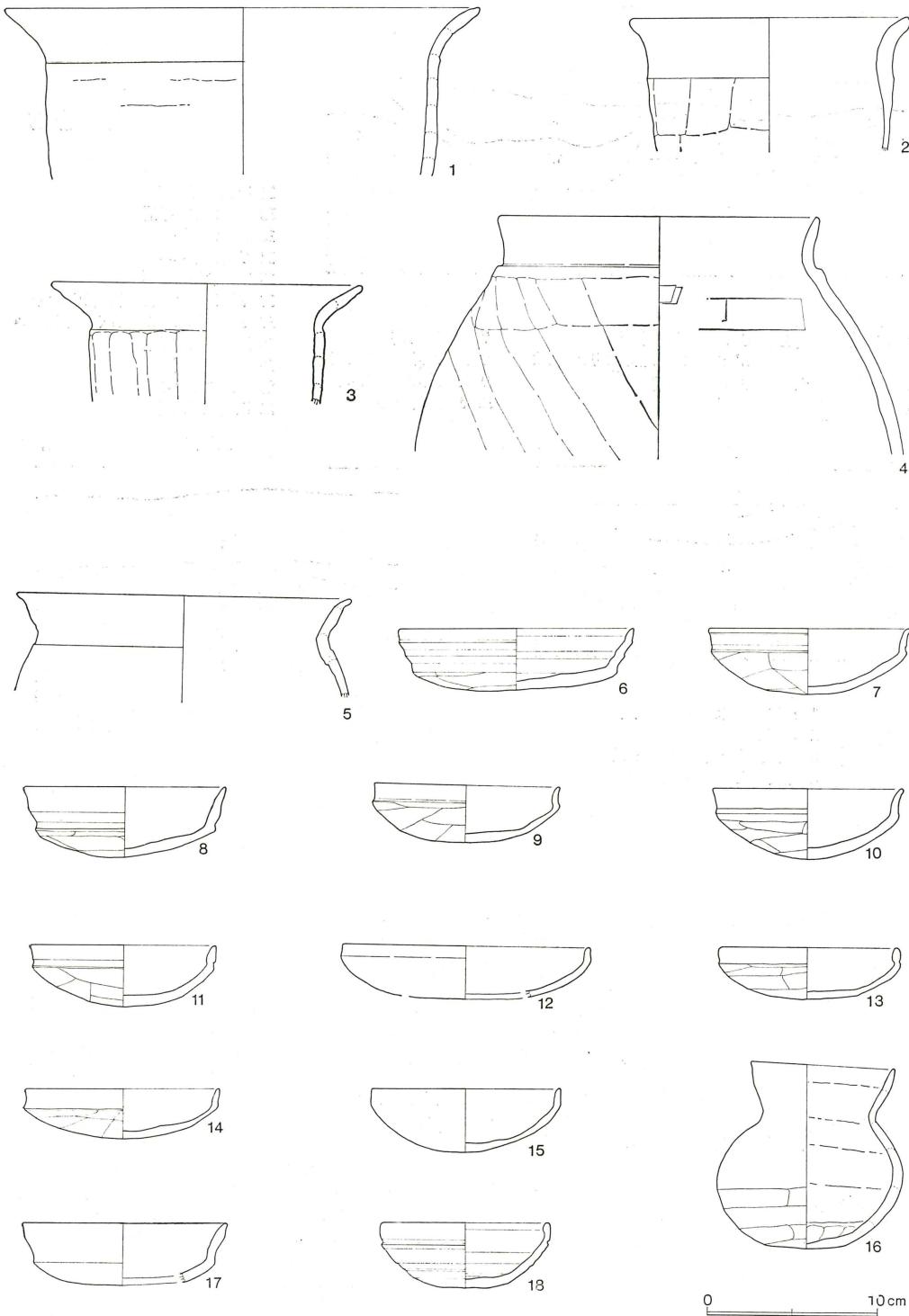
18、20号溝は「L」字状に構成され、中間に19号溝が検出された。20号溝の5m北側では、併走



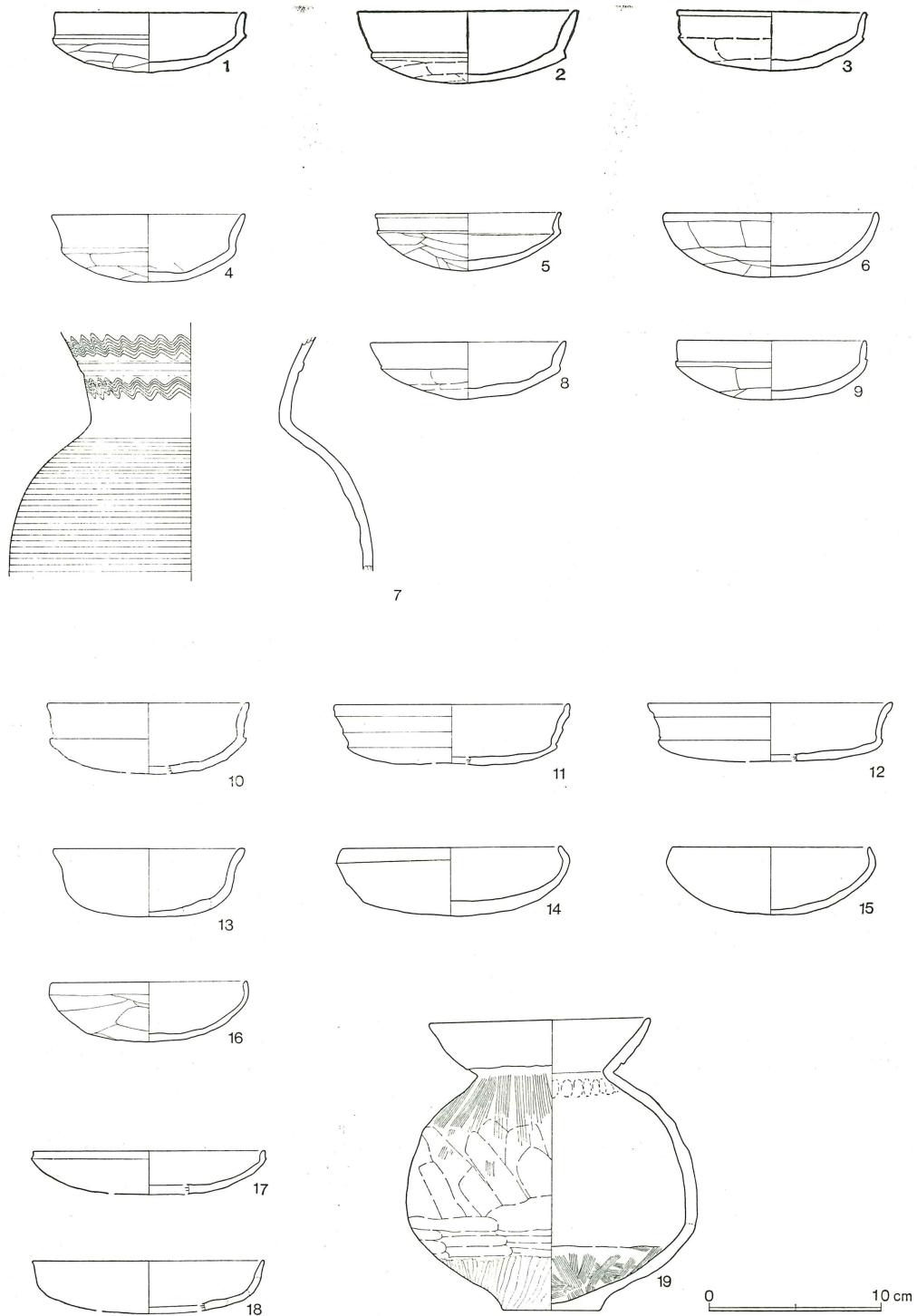
第141図 溝土層断面図



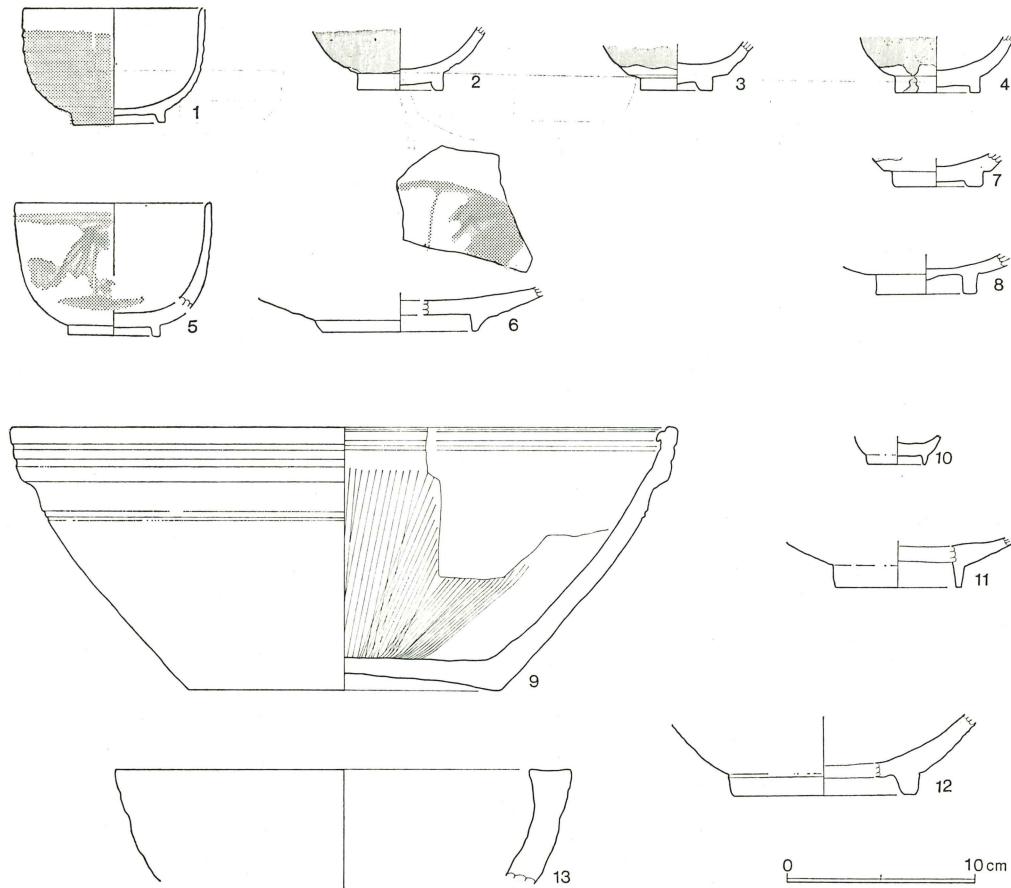
第142図 溝土層断面図



第143図 溝出土遺物



第144図 溝出土遺物



第145図 第15号溝出土遺物

して22号溝が検出された。8、11号土壌、1、2号住居状遺構は溝区画内側で検出された。主軸は18号溝がN—12°—E、20、21号溝がN—3°—Wにもつ。遺物は全く検出されなかった。

(8) 第15号溝出土遺物 (第145図)

15号溝からは礫と共に陶磁器片が一括出土した。第150図に可能な限り図示した。

1～5、7、8は茶碗である。1はかけわけで体部上半～底部にかけて茶褐色釉、口端～内面にかけて透明釉をもつ。付け高台。口径9.8cm、器高6.2cm、底径5.0cm。

5は染付茶碗で淡青灰色を呈し、口縁に沿って2本の染付が廻る。口径5.6cm、器高7.2cm、底径5.0cm。6は染付皿と思われる。底径9.0cm。2～4、7～8は天目茶碗である。内面及び底部上端まで鉄釉がかけられている。底径は2=4.8cm、3=4cm、4=4.8cm、7=4.8cm、8=5.3cm。

9はすり鉢で内面は10本1単位の櫛目が口縁から底部に重畠して施されている。口縁に2条の浅い沈線と体部に沈線横走。内面に凸帶もつ。口径36.5cm、器高14.4cm、底径17.2cm。

10は白磁と思われる。小形で底径2.3cmを測る。11は皿、12は鉢状を呈すると思われる。12は内面に淡い黒色の染付をもつ。底径は11=7.0cm、12=10.3cm。

4号溝出土土器

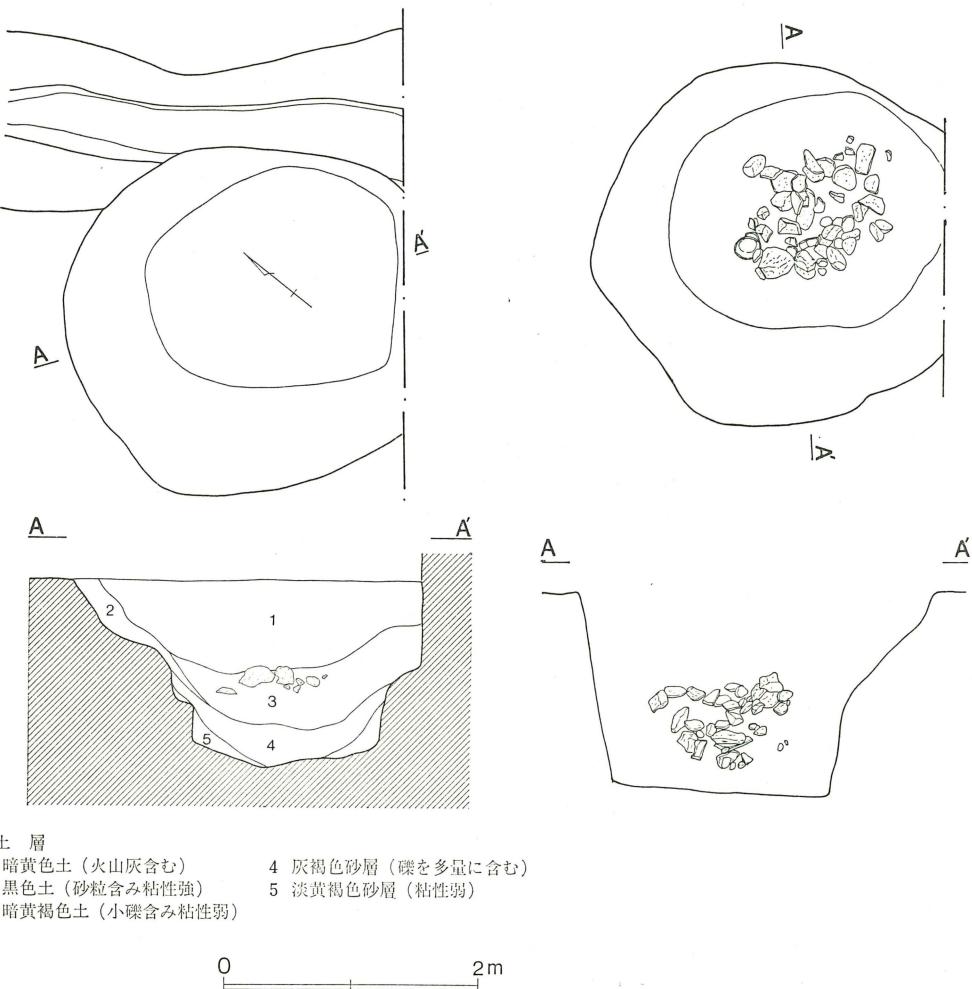
器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
長甕	1	口径 28.3 現存高 12.0	体部上半直線的に立ち上がり、口縁立ち上がりにゆるい段をもち、強く外反して開く、浅黄橙色。砂粒多。小疎含む。	器面体部ヘラケズリ後ナデ。内面丁寧ヨコナデ、口縁内外ヨコナデ。	体下半欠。 口縁½残。
長甕	2	口径 16.4 現存高 8.0	口縁は立ち上がりで肥厚し、外反氣味に強く開く。浅黄橙色。砂粒多。	器面体部ヘラケズリ。内面及び外面口縁部ヨコナデ。	口縁¼残。
長甕	3	口径 18.5 現存高 7.2	立ち上がりに段をもち、口縁は直線的に開く。	器内面ヨコナデ。外面体部ヘラケズリ後ナデ。口縁ヨコナデ。	口縁～体上半½残。
	4	口径 19.0 現存高 14.4	体部に最大径をもち肩部すぼまり立ち上がりに段をもつ。口縁は外反氣味に開く。明黄褐色。砂粒、小疎多。	器面体部ヘラケズリ後全体をナデ。内面体部ヘラナデ痕残る。口縁内外ヨコナデ。	口縁～体部½残。
甕	5	口径 19.8 現存高 5.8	肩部でゆるくすぼまり立ち上がりに浅い段をもつ。口縁は中位で肥厚し直線的に開き、端部は外折する。内面に接合時の段残る。暗黒褐色。砂粒。小疎多。	器面胴部はヘラケズリ後丁寧にナデられる。器内はヘラナデ。口縁内外共ヨコナデ。	口縁～体部上半¼残。
坏	6	口径 14.0 器高 3.7	平底扁平な底体部をもち、口縁は内彎氣味に開き2条の明瞭な段をもつ。口縁内面にもゆるい段を3条有する。明赤褐色。砂粒多。胎土良。	器面底体部ヘラケズリ、周辺部ヨコナデ。内面は丁寧なナデ。口縁内外丁寧なヨコナデ。	口縁¼残。 底体部完。
坏	7	口径 12.0 器高 4.0	丸底呈し、立ち上がりにゆるい段をもつ。口縁短かく直立し、端部若干肥厚し、ゆるく外反。明赤褐色。細砂多。胎土色。	成形坦い。器面底体部ヘラケズリ後粗いナデ。内面ヨコナデ。口縁内外丁寧なヨコナデ。	½残。
坏	8	口径 12.0 器高 4.2	丸底気味の底部をもち、立ち上がり明瞭な段をもつ。口縁中位に段をもち外反氣味に立ち上がる。淡黄色。砂粒多。	器面底体部ヘラケズリ。内面底体部粗いナデ。口縁内面立ち上がりより外面丁寧なヨコナデ。風化著るしい。	½残
坏	9	口径 11.0 器高 3.4	丸底呈し、立ち上がりゆるい段をもつ。口縁は短かく内傾氣味に開く。壺色。砂粒多。白色粒子多量に含む。	底体部ヘラケズリ。内面底体部指頭圧痕残る。丁寧なヨコナデ。口縁外面丁寧なヨコナデ。	¾残
坏	10	口径 11.3 器高 4.2	丸底呈し直線的に開き立ち上がりにゆるい段をもつ。口縁は外反	風化著るしく底体部ヘラケズリ痕僅かに残る。口縁内外ヨコナデ。	完

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	11	口径 11.0 器高 3.7	氣味に開き、端部若干肥厚。淡赤褐色。細砂多。	口縁部ヨコナデ。外面ヘラケズリ。内面平滑りにナデ。全体に風化。	1/4残
坏	12	口径 14.8 現存高 3.0	器高低くゆるやかに開く。立ち上がり浅い段をもち内彎氣味に開く。橙色。細砂多。小礫含む。	風化著るしい。口縁ヨコナデ。外面ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。	口縁1/4残
坏	13	口径 10.5 器高 3.1	丸底呈しやや屈曲氣味に開く。立ち上がりに浅い段をもち肥厚し内傾氣味に開く。口縁内面に段をもつ。淡赤褐色。細砂多。	口縁ヨコナデ。外面ヘラケズリ丁寧。内面ヨコナデ。	完
坏	14	口径 11.5 器高 3.0	浅い丸底呈し立ち上がり弱い段もつ。口縁は下半内傾し上半部はほぼ直線的に開く。内面凹凸顯著。赤橙色。砂粒多。	口縁強くヨコナデ。外面ヘラケズリ。内面指頭抑圧による凹凸残りヨコナデ。	完
坏	15	口径 11.2 器高 3.8	丸底呈しやや直線的に開く。立ち上がり弱い段をもち口縁短かく内傾氣味に開く。内面凹凸残る。橙色。砂粒多。	口縁ヨコナデ。外面ヘラケズリ後全体を丁寧にナデ。内面丁寧なヨコナデ。	完
坏	16	口径 12.0 現存高 3.7	底体部下半平坦、立ち上がり弱い段もをち口縁は上半肥厚し、外反氣味に開く。橙色。細砂多。	風化著るしく内外とも不明。	口縁1/4欠
坏	17	口径 10.0 器高 3.9	体部は丸味をもって立ち上がる。口縁立ち上がりに沈線が廻る。口縁は直立し内面が肥厚する。灰色細砂含む。胎土良。	口縁はヨコナデ。体部は内外面ともヨコナデ。底部は切断後周辺部も含めてヘラケズリ。	口縁1/2欠
小型壺	18	口径 8.5 器高 11.0 最大径11.1	形態崩れる。体部やや上半に最大径有し、口縁は内彎氣味に開く。粗いつくり。灰褐色乃至黒色。砂粒多。	口縁粗いヨコナデ。体部は外面ヘラケズリ後上半部を丁寧にヘラナデ。内面底部周辺指頭ナデ。体部は粗いナデで輪積み痕残る。	1/2残

2、5、9、27号溝出土土器

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	1	口径 11.2 器高 3.5	体部浅く立ち上がりに明瞭な段をもつ。口縁は外反気味に開く。赤褐色。砂粒多。	口縁ヨコナデ。外面ヘラケズリ内面ヨコナデ。	½残。2号溝
坏	2	口径 13.0 器高 4.3	体部深い。立ち上がり浅く沈線廻らせ段を作出。口縁は直線的に開き内面若干肥厚。赤褐色。砂粒多。	口縁丁寧なヨコナデ。外面ヘラケズリ。内面ナデ。内面は風化著しい。	完 2号溝
坏	3	口径 11.0 器高 3.5	口縁立ち上がりに段をもち、直線的に開く。端部肥厚しゆるく外傾丸底呈する。赤橙色。砂粒多。	口縁ヨコナデ。外面ヘラケズリ後ナデ。内面丁寧なヨコナデ。	½残。2号溝
坏	4	口径 11.4 器高 4.0	口縁立ち上がりに段をもち、外反気味に開く。端部若干肥厚。内面立ち上がり屈曲顯著。灰白色。砂粒多。	口縁ヨコナデ。外面ヘラケズリ。内面底部周辺ヘラナデ。体部ヨコナデ。	½欠。5号溝
坏	5	口径 11.0 器高 3.4	立ち上がりに段をもつ。口縁は外傾して開き端部肥厚。内面立ち上がり屈曲。赤橙色。砂粒多。	口縁ヨコナデ。外面丁寧なヘラケズリ。内面ヘラナデ後全体をヨコナデ。	½残。5号溝
坏	6	口径 12.5 器高 3.8	丸底を呈しゆるやかに内彎気味に立ち上がる。赤橙色。砂粒多。	外面単位かいヘラケズリ。口縁ヨコナデ。内面ヨコナデ。	½残。5号溝
壺	7	口頸現存径 15.0 現存高15.3 最大径21.6	胴部に最大径持ち肩部で強くすぼまる。口縁は直線的に開く。中位肥厚し隆帶状をなし、上下に櫛描波状文。体部櫛のヨコナデもつ灰白色。細砂含む。胎土良。	内外面とも風化、剥落顯著。内外面ヨコナデ。	体部½欠。 5号溝。
坏	8	口径 11.5 器高 3.4	立ち上がりに段をもち、口縁は直線的に開く。内面に弱い稜をもち、底体部は凹凸顯著。丸底呈しやや尖り気味。明赤褐色。砂粒多。	口縁ヨコナデ。外面ヘラケズリ。内面指頭圧痕残る。ヨコナデ。	5号溝
坏	9	口径 11.1 器高 3.5	立ち上がりに段をもつ。口縁は外反気味開きゆがむ。丸底呈する。赤橙色。細砂多。	口縁ヨコナデ。外面不規則なヘラケズリ。内面底体部下半粗いナデ。立ち上がりにかけてヨコナデ	完。5号溝
坏	10	口径 11.8 現存高 4.1	立ち上がりに段をもち、口縁は中位で肥厚し外反気味に開く。端部外傾気。味丸底呈する。赤橙色。細砂多。胎土良。	風化受け整形下明瞭。	½残。9号溝
坏	11	口径 13.8	平底気味の底部もち立ち上がり	口縁ヨコナデ。外面ヘラケズリ	½残。9号

器種番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
	器高 3.5	口縁に3条の段をもつ。口縁は直線的に開き、端部直立気味。口縁内面にゆるい段をもつ。薄手のつくり。暗褐色。細砂多。胎土良。	後デナられる。内面は丁寧なヨコナデ。	溝
壺	口径 14.5 器高 3.5	口縁立ち上がりに沈線廻り段を作出。口縁外反して開き2条の段をもつ。内面立ち上がりにゆるい段、薄手のつくり。暗褐色。細砂多胎土良。	口縁ヨコナデ。外面ヘラケズリ後丁寧なナデ。内面ヨコナデ。	1/3残。9号溝
壺	口径 11.3 器高 4.0	体部中位で直立気味に開き、口縁は肥厚気味に直線的に開く。明赤褐色。砂粒多。	口縁ヨコナデ。外面ヘラケズリ後丁寧なナデ。内面ヨコナデ。	底部一部欠9号溝
壺	口径 12.9 器高 4.0	体部は浅く丸味をもつ。口縁は短かく強く内折する。赤橙色。砂粒多。	口縁ヨコナデ。外面ヘラケズリ後ナデ。内面ヨコナデ。	1/2残。9号溝
壺	口径 11.7 器高 4.0	14同様の器形をもつ。底部薄手	14と同様	完。9号溝
壺	口径 9.5 器高 3.5	薄手のつくり。体部は丸味をもち口縁直行する。暗黄褐色。砂粒多。	口縁ヨコナデ。外面粗いヘラケズリ。内面底部周辺指頭圧痕もつ粗いヨコナデ。	完。9号溝
壺	口径 13.7 器高 2.6	浅い体部で口縁短かく外反気味に立つ。薄手。内面凹凸顯著。赤褐色。細砂多。	口縁ヨコナデ。外面ヘラケズリ後ナデ。内面立ち上がり部より丁寧なヨコナデ。以下は粗いナデ。	1/2残。27号溝
壺	口径 13.7 器高 3.1	体部平底気味で直線的に強く立ち上がり、端部ゆるく外面。赤褐色。砂粒多。	口縁ヨコナデ。外面ヘラケズリ後ナデ。内面ヨコナデ。	1/2残。27号溝。
壺	口径 13.0 器高 17.0 最大径17.3	底部より強く開き、体下半に最大径もつ。頸部で強くくびれ口縁は直線的に開く。二重口縁有する。暗赤色。砂粒。小砾多。	口縁ヨコナデ。外面上半ハケ目調整後ヘラケズリ→ナデ。下端底部周辺は丁寧なヘラナデ。内面底部周辺ハケ目調整。体部はヨコナデ。	完。27号溝



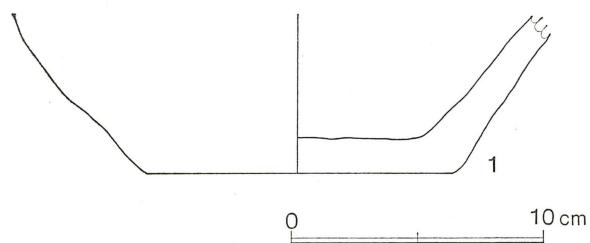
第146図 井 戸 跡

(9) 井 戸 跡 (第 146 ~ 147 図)

ワ—36区で検出された。遺構は第29号溝を切って掘り込まれており、北側は調査区域外となってい。N—55°—E。確認される最大径は2.75mで橢円形を呈するものと思われる。壁は階段状に掘り込まれ、底部は中央部が窪む。

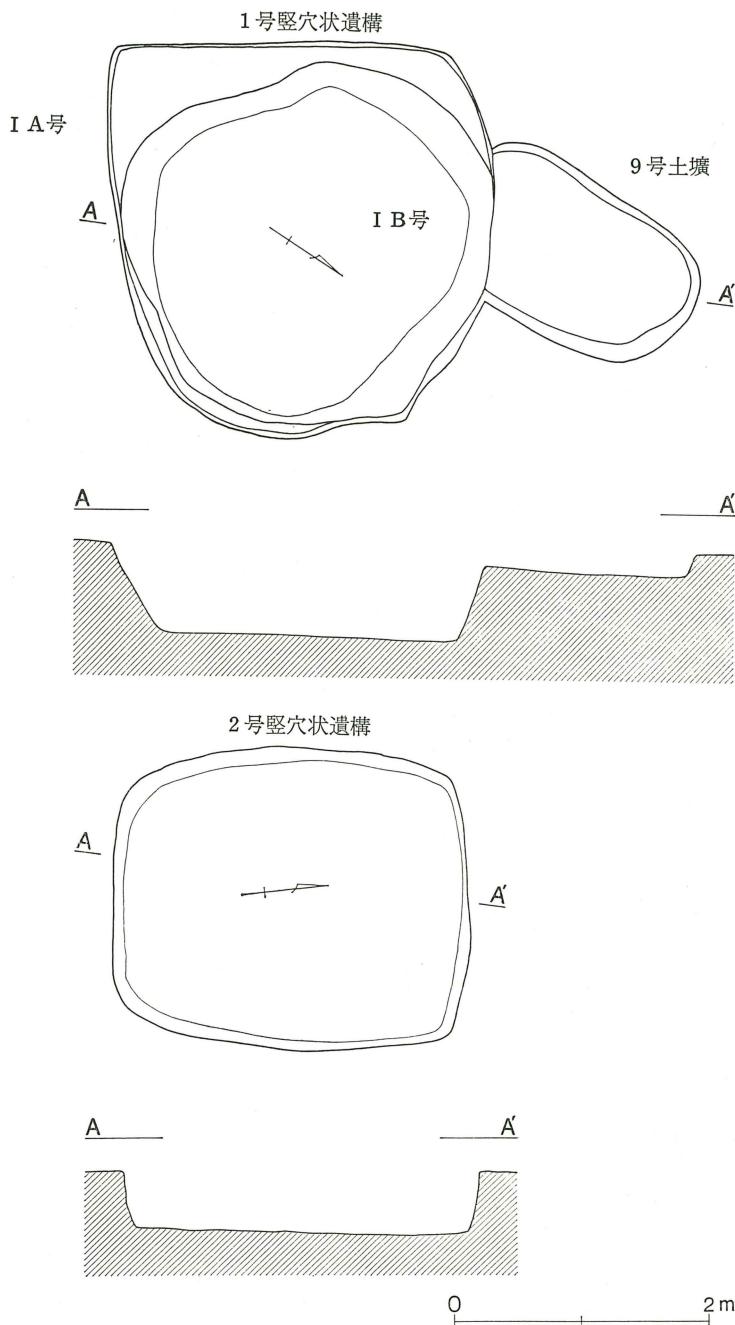
最深部は確認面から1.5mを計る。

覆土は5層からなり、3層上面では多量の礫が投棄されたような状態で検出され、礫に混じって、中世陶器底部破片が一点出土している。



第147図 井戸跡出土土遺物

(10) 堅穴状遺構



第148図 堅穴状遺構

(10) 壁穴状遺構(第148図)

1号壁穴状遺構

第3調査区レ-21~22区で検出された。1A、B号、9号土壙と重複関係にある。

1A号遺構は西壁2.65mを測り、南北壁は湾曲気味である。1B号遺構は1A号遺構を切って構築され、径約2.8mの不整円形を呈する。断面形は台形を呈し、壁は鋭角に立ち上がっている。

砂質土に掘り込まれ、床面は良好な検出状態とは言えなかったが、壁高は90cmを測り、床面は平坦である。

2号壁穴状遺構

第3調査区レ-20~21区で検出された。N-20°-Eを主軸にもち、北壁2.1m、南壁1.6m、東壁2.7m、西壁2.6mを測り、東西壁は湾曲気味で長方形プランを呈する。

遺構は前者同様砂質土中に掘り込まれており、床面の検出状態は良好とはいえない。

壁高は南壁側40cm、北壁側50cmを測り、床面は南から北側にゆるやかな傾斜を示している。

壁は南北側でほぼ垂直に立ち上がり、東西側はやや鋭角気味に立ち上がる。覆土は暗灰褐色砂質土1層のみで、遺物は全く検出されなかった。

(11) 土器焼成遺構(第149図)

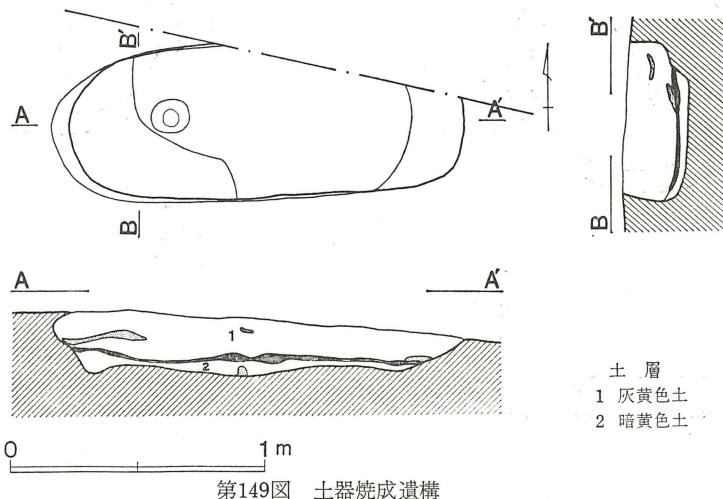
第2調査区ウ-10区で検出された。主軸は座標東西ラインに一致する。長径1.56m×短径0.54mを測り、長楕円形を呈する。

長軸西側は立ち上がりに径 cm、深さ cmの小ピットをもち、壁はオーバーハングして立ち上がる。東壁はゆるやかな立ち上がりをもつ。

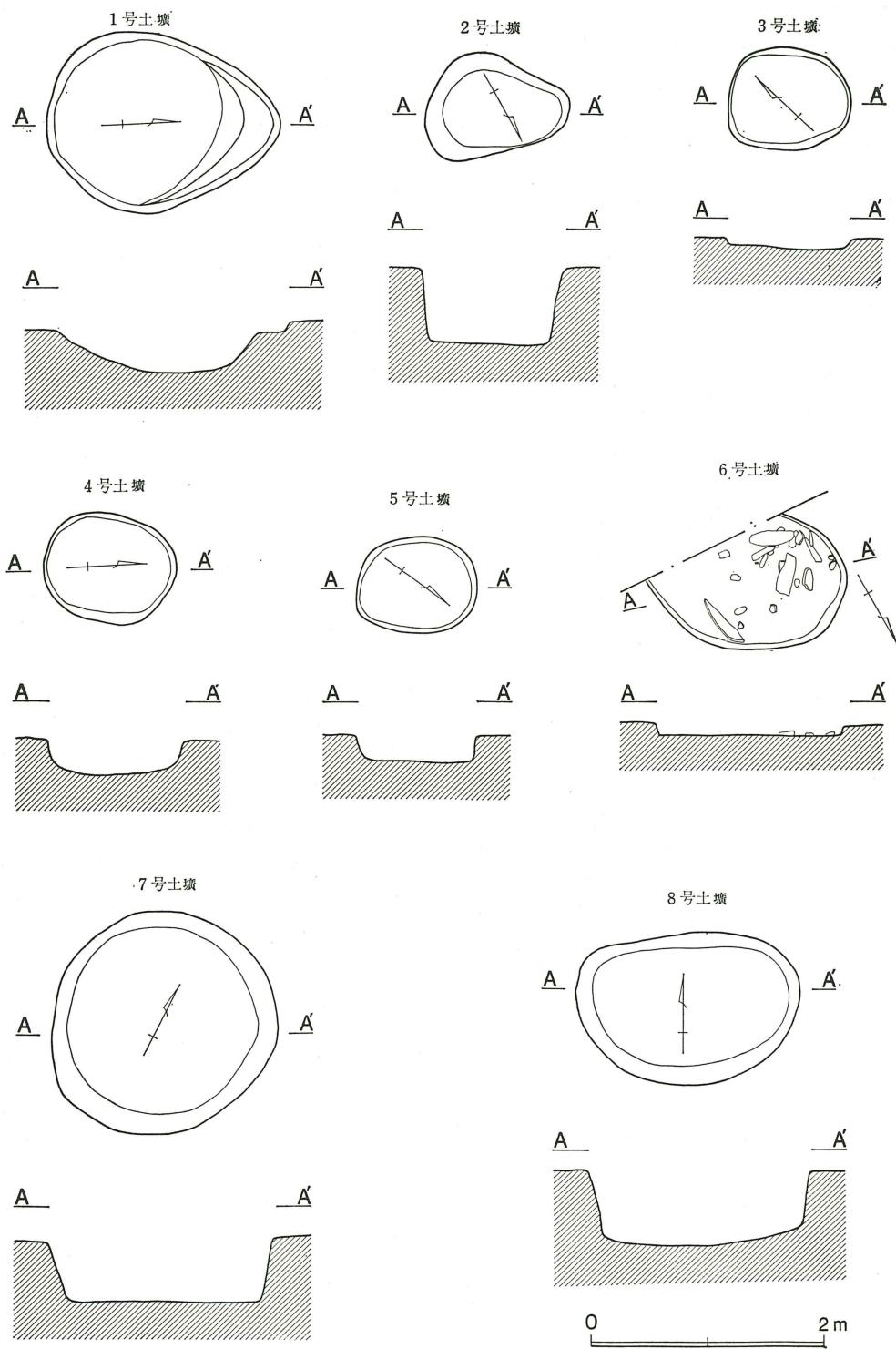
底面はゆるい凹凸をもち、南、北壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は暗黒褐色土1層のみであるが、遺構内には若干浮いた状態で炭化物層が2~4cmの厚さで全体に堆積していた。西壁に接して覆土中層には焼土層がみられ、西壁は火熱を受け部分的に赤変している。

本来、土壙として分類すべきかもしれないが、本項では、土器焼成遺構として取り扱った。



第149図 土器焼成遺構



第150図 土 壤

(12) 土 壤 (第 150 ~ 151 図)

1号土壌

エ—10区。N—3°—E°長軸2.08×短軸1.57m、深さ0.42mの不整橢円形を呈する。底部は北側で深くなり、立ち上がりは強い段をもつ。

2号土壌

ノ—9区。N—60°—W°長軸1.24×短軸0.93m、深さ0.67mの不整橢円形を呈する。底部は平坦で、ほぼ垂直に立ち上がる。

3号土壌

エ—9区。N—42°—W°長軸1.05×短軸0.9m、深さ0.11mの隅丸長方形を呈する。底部は平坦で掘り込みは極めて浅い。

4号土壌

ウ—9区。N—25°—E°長軸1.15×短軸0.94m、深さ0.3mの隅丸長方形を呈する。底部は西側がやや深く、垂直に立ち上がる。

5号土壌

ウ—10区。N—36°—W°長軸1.1×短軸0.84m、深さ0.25m。ほぼ平坦な底部で垂直に立ち上がる。

6号土壌

ナ—16区。N—72°—W°深さ0.12mで、橢円形を呈すると思われる。底部は平坦で、砂質土のため不明瞭、覆土内に河原石、片岩類、骨片などが検出されている。火葬に伴う埋葬施設か？

7号土壌

カ—24区。N—62°—E°径2.0m前後でほぼ円形を呈する。深さ0.54mで底部は平坦。若干開き気味に立ち上がる。覆土は暗黒褐色粘質土、20号住居跡に近接する。

8号土壌

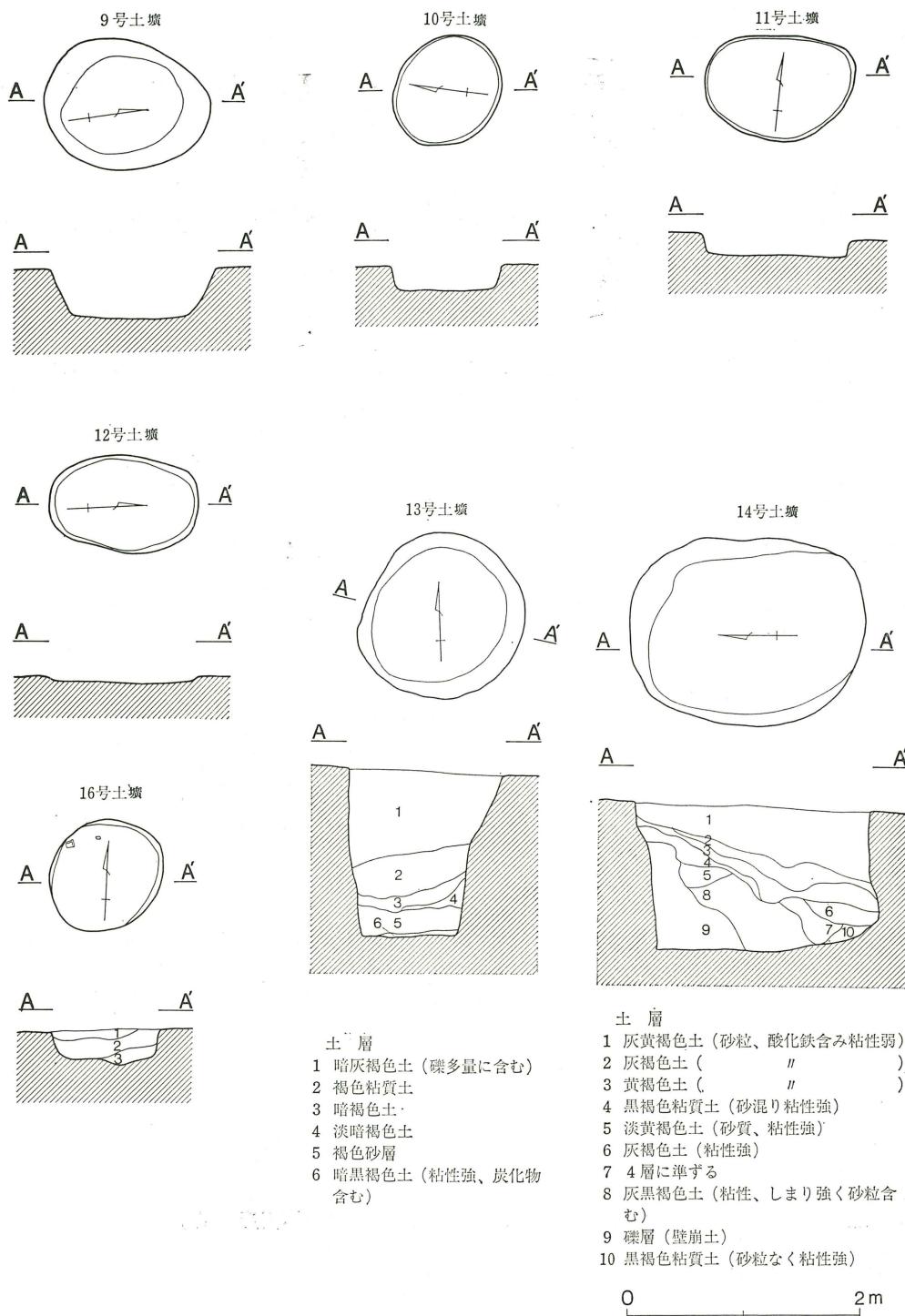
レ—22区。N—0°—E°長軸1.85×短軸1.32m、深さ0.66mの橢円形を呈する。底部は中央部に向かってゆるやかに落ち込み、西壁は開き気味に立ち上がる。

9号土壌

レ—22区。N—10°—E°長軸1.45×短軸1.14m、深さ0.42mの橢円形を呈する。底部は平坦で開き気味に立ち上がる。

10号土壌

レ—22区。N—71°—W°長軸1.03×短軸0.93m、深さ0.18mの橢円形を呈する。覆土は11号土壌。



第151図 土 壤

11号土壙

タ—22区。N—83°—E。長径1.3×短径0.93m、確認面からの深さは0.18mの橿円形を呈する。覆土は10号土壙同様、灰黄色砂質土である。

12号土壙

レ—21区。N—3°—E。長径1.29×短径0.86m、深さ5cm内外。隅丸長方形を呈する。

13号土壙

ル—30区。N—28°—E。長径1.45×短径1.35m、深さ1.45mの橿円形を呈する。覆土は6層から成り、最下層には炭化物が含まれている。

14号土壙

ル—30区。N—99°—E。長径2.09×短径1.52m、深さ1.26mの隅丸長方形を呈する。底部は南側にゆるく傾斜し、オーバーハングする。覆土は10層から成り、9層は壁崩落礫層である。13、14号土壙は近接し、ともに礫層を掘り込んでいる。

15号土壙

ハ—56区。径1.00前後でほぼ円形を呈する。底部は東側で一段落ち込み、やや開き気味に立ち上がる。南側はオーバーハングを呈する。縄文早期条痕文条土器が壁際から出土している。深さ最深部で0.32mを計る。

3 グリット出土遺物

(1) 土 器 (第 152 ~ 154 図)

第 152 図 1 は体部に丸みをもち、口縁が強く外反する甕形土器である。口頸部は 6 本 1 単位の櫛歯状工具を 3 段廻らせ、櫛歯文間に同様の工具を 1 単位ずつ押圧を施しており、各単位間は連続しない。沈線は断面半円形で、小枝等をたばねたものを用いたと思われ、部分的にずれている。地文は附加条 $R \left\{ \frac{L}{L+L} \right. \left(R \left\{ \frac{L}{L} \right. \text{の可能性もある} \right)$ を斜位回転させており、口唇上にも施文されている。口径 25.0cm、現存高 22.3cm、胴部最大幅 20.5cm を計る。明赤褐色。

同図 2 は最大径を口唇下にもつ甕形土器である。底部よりゆるやかに立ち上がり、口唇は強く内湾する。口唇下に平行沈線による波状文が廻る。口唇は内削ぎ状を呈する。地文は繩文が横回して施され、波状沈線施文後、器面にヘラ削りが加えられている。下半は粗く輪積み痕残る。赤橙色呈し、砂粒、小礫とも多く含む。推定口径 23cm、現存高 14.6cm を計る。

同図 3 は鉢、乃至は台付鉢形を呈すると思われる。ゆるやかに立ち上がり、口縁は内湾気味に立つ。口唇は内削ぎ状を呈し、内面に稜をもつ。口縁下に平行沈線が廻り、沈線間には橢円形の刺突が充填されている。口唇及び口縁部に繩文が施されている。口縁下は概ね丁寧なヘラ磨きが施されている。赤黒色を呈し、砂粒、小礫とも多く含む。口径 29.2cm、現存高 9.8cm を計る。

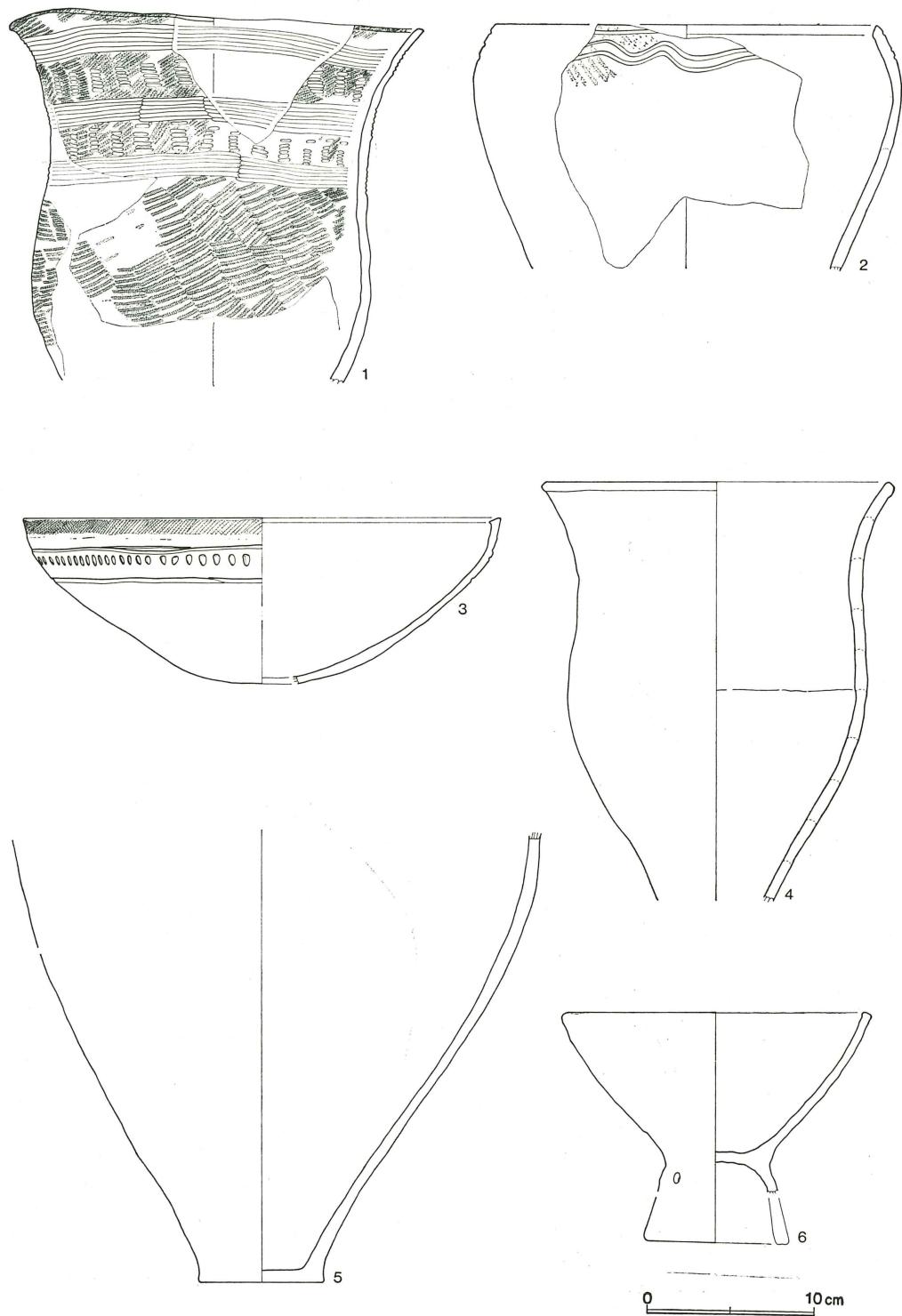
同図 4 は体中央部で内傾気味に立ち上がり、口唇外反する甕形土器である。口唇は肥厚く若干外方に突出する。無文で器面は丁寧にヘラナデされている。暗黄褐色、砂粒、小礫多く含む。口径 20.8cm、器高 25.2cm、体部最大径 28.2cm を計る。

同図 5 は壺形を呈すると思われ、つぶれたような状態で出土した。体上半は欠損している。底部より内湾気味に開く。器内外面とも風化が著しいが、器面は丁寧にナデが施されたと思われる。赤橙色を呈し、砂粒、小礫とも多く含む。現存高 26.2cm、現存高最大径 32cm、底径 7.7cm を計る。底部には布目压痕有するが不明瞭である。

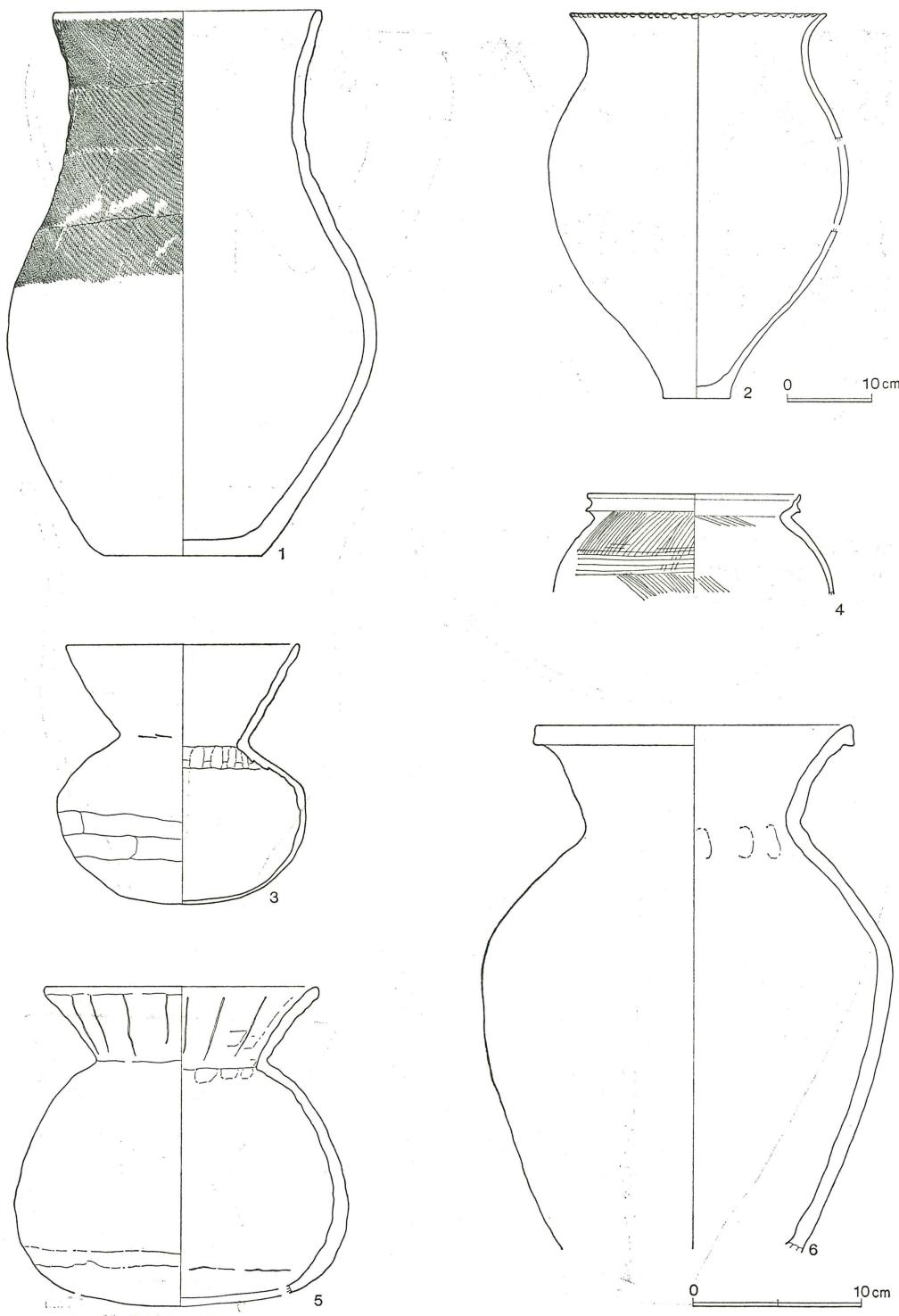
同図 6 は台付鉢形を呈する。台部高は 5cm 前後と推定される。やや内湾気味に開き、口唇は平坦。台部には円孔を有する。暗石褐色、砂粒多く含む。器面は丁寧にナデられる。口径 18cm、推定器高 13.8cm を計る。

第 153 図 1 は体下半で大きく膨り、口頸部ですぼまり口唇が外反して開く甕形土器である。口唇から体膨り出し部まで輪積み痕が顕著に観取される。繩文は口唇下より 4 段に上方から施されている。原体は 5cm 前後と推定される。繩文帯幅と輪積みの相関性は有さない。膨り出し部より底部にかけては器面が丁寧にヘラナデされている。暗黄褐色を呈し、砂粒を多く含む。口径 16.5cm。器高 32.5cm、最大径 22.4cm、底径 9.6cm を計る。ニ—50 区より単独で出土した。

同図 2 は体上半に最大径をもち、口頸部でくびれ、口縁が大きく外反して開く甕形土器である。口唇内外面に指頭を交互につまんで作出したと思われる小波状を呈する。器面には部分的に擦痕が残るが、全体にナデされている。橙色を呈し、砂粒を多く含む。口径 31.2cm、推定器高 46.2cm、体部推定最大径 36.6cm、底径 8.4cm を計る。ヘ—63 区より 2 × 2m の範囲で出土した。



第152図 グリット出土土器



第153図 グリット出土土器

同図 3 は小型壺形土器である。体部上半で膨り口頸部で強くくびれ口縁は直線的に開く。体下半にヘラ削りが残るが器面は全体に丁寧にヘラナデされている。内面は口頸部に指頭おさえ痕残り、他は横ナデ。口縁は外面ヘラナデ、内面横ナデ、赤橙色を呈し、細砂多く含むが胎土良。口径 14.2 cm、器高 15.4 cm、体部最大径 15 cm を計る。ヨー24区出土。

同図 4 は S 字状口縁を有する甕形土器である。口縁端部は薄く鋭いつくりで、立ち上がり部は、外方に強く突出する。体部は縦位、横位にハケ目調整を有する。口縁横ナデ、内面はハケ目調整後丁寧にナデられる。明褐色を呈し、砂粒多く含むが胎土良。口径 12.9 cm、現存高 6 cm を計る。ニー42区出土。

同図 5 は体下半に最大径をもつ小形壺形土器である。丸底呈し、口頸部で強くくびれ、口縁は肥厚気味に外反して開く。口縁内外に暗文をもつ。器面は丁寧なヘラナデ。内面口頸部に指頭おさえ残る。赤色を呈し、砂粒含むが胎土良。口径 16.6 cm、器高 19.2 cm、最大径 20.3 cm を計る。ルー30区出土。

同図 7 は須恵器甕である。肩部で大きく膨り、口頸部で強くくびれ口縁は外反気味に強く開き、端部は下方に突出する。器面は丁寧にナデされる。内面は粗いナデ。口縁横ナデ。灰色を呈し、砂粒多く含む。口径 19 cm、現存高 31.3 cm、最大径 25 cm を計る。ウー12区出土。

第 154 回はグリット出土弥生式土器を一括した。第 3 調査区から出土し、全て旧地形覆土内から検出されたものである。

第 155 ~ 156 図はグリット出土須恵器、陶器を一括した。

第 155 図 1、3 は甕の胴部破片。内面に青海波文をもち、器面は 1 が格子目の叩きをもつ。共に青灰色を呈し、胎土は砂粒多く含む。

2 は瓦である。凹面に布目痕をもち、凸面にはヘラナデを施している。両端部はヘラにより面取りされている。灰白色、砂粒多く含む。

同図 4 ~ 10 は甕口縁部破片を揭示した。いづれも口縁が強く開き大形甕形器形を呈するものと思われる。

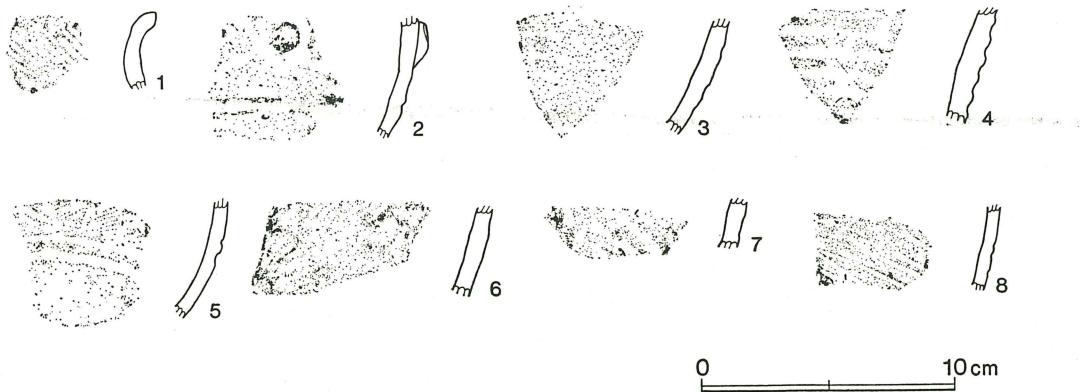
1 は口縁外反し、端部肥厚する。器面には繩文 R L が横回転されている。2 は口縁部砂片で、円形貼付文を中心に沈線文が描き出されている。口頸部に沈線が廻る。3 ~ 9 は胴部砂片と思われる。3 は器面に粗く擦痕状のナデが加えられている。4、7 は器面に幅広い沈線で直線的なモチーフをもつ。沈線は浅い。

5 は 2 本の平行沈線で器面を区画し、地文に節の細かな繩文 L R が横回転して施されている。区画内には地文上に沈線文が描かれている。6 は繩文 L R が粗く施されている。

8 は口縁部砂片と思われる。口縁に沿って斜位に粗く擦痕が加えられている。

3、4、7 は小礫多く含み赤橙色を呈する。他は細粒多く、暗褐色を呈する。4 は口端が直立気味となり肥厚する。口唇は平坦でナデされる。口頸部には 4 条 1 組の波状沈線が残存部で 4 段にわたって施されている。

5 は口唇が肥厚し、下端が深く抉り込まれている。口唇に沿って微隆起線が廻り、残存部には 7 本 1 組の波状文が廻っている。



第159図 グリット出土遺物拓影

6は口唇形が5に似るが下端の抉り込みはない。存在部に2本一組の波状文が2段にわたって施されている。

7は口縁部で弱く外反、口唇は肥厚し、微隆起が廻る。残存部に6本一組の波状文が3段にわたって廻らされ、波状文内には浅い沈線が廻っている。

8、9は口縁が外反気味に開き、8は口端肥厚し、下端に浅い抉り込みを有する。9は口唇形が6に近いが厚味が強く、肥厚も弱い。

10は口端が屈曲し縁帶状となる。いづれも青灰色を呈し砂粒を多く含んでいる。

第155図11～第156図1～20は甕の胴部破片である。

11、14、15、17、18は内面に青海波文をもつ。12、13、16、19は内面の叩きは直線的である。

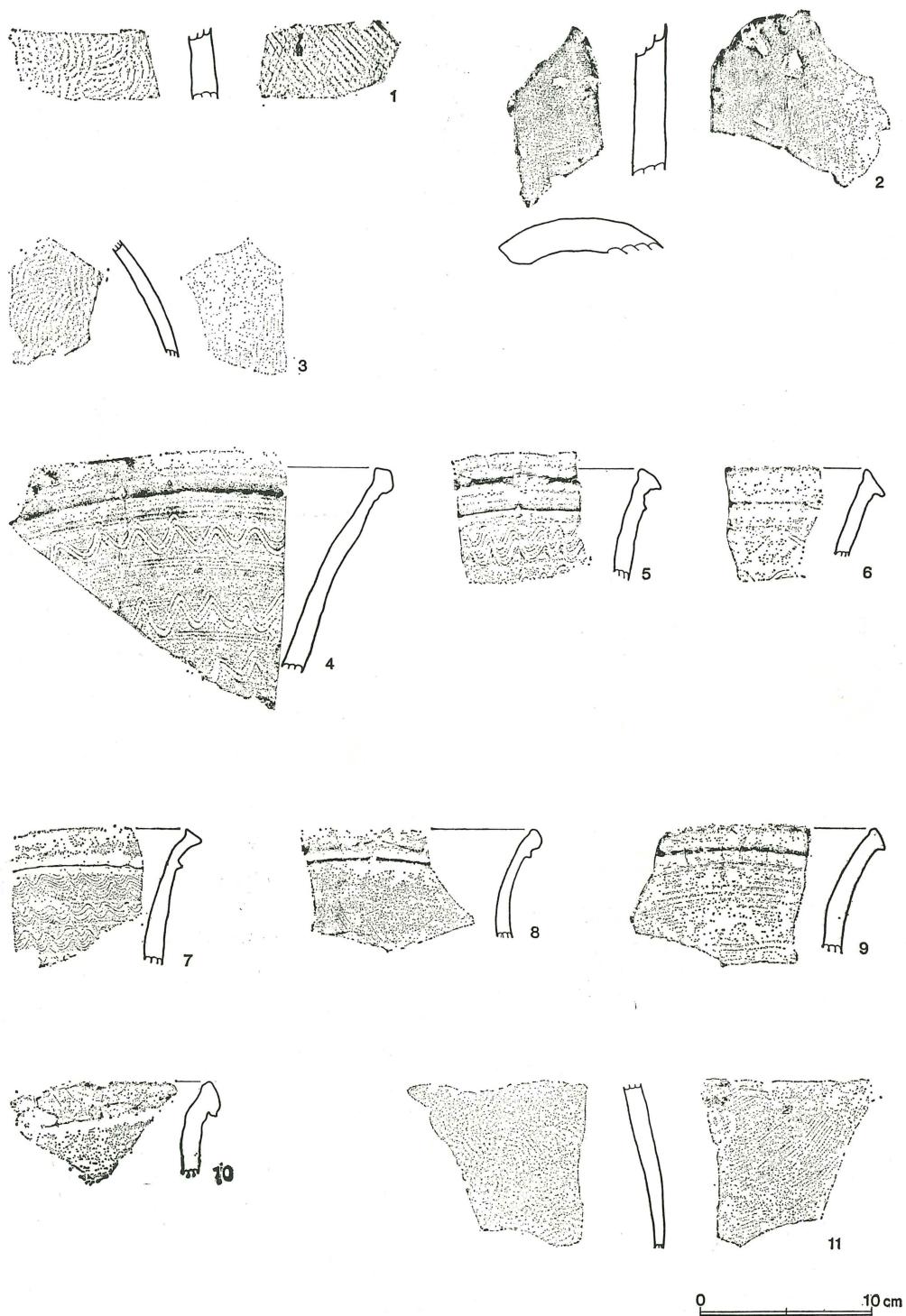
外面は11、12、20が平行叩き目を、13、17、18、19は平行叩き目の施工方向をずらして交子目叩き状に施している。15、16は交子目叩きを有する。14は口頸部で強く外反する甕物～口頸部であるが、器面には窯壁が付着し、整形は不明である。

色調は青灰色を呈し、砂粒分多い。

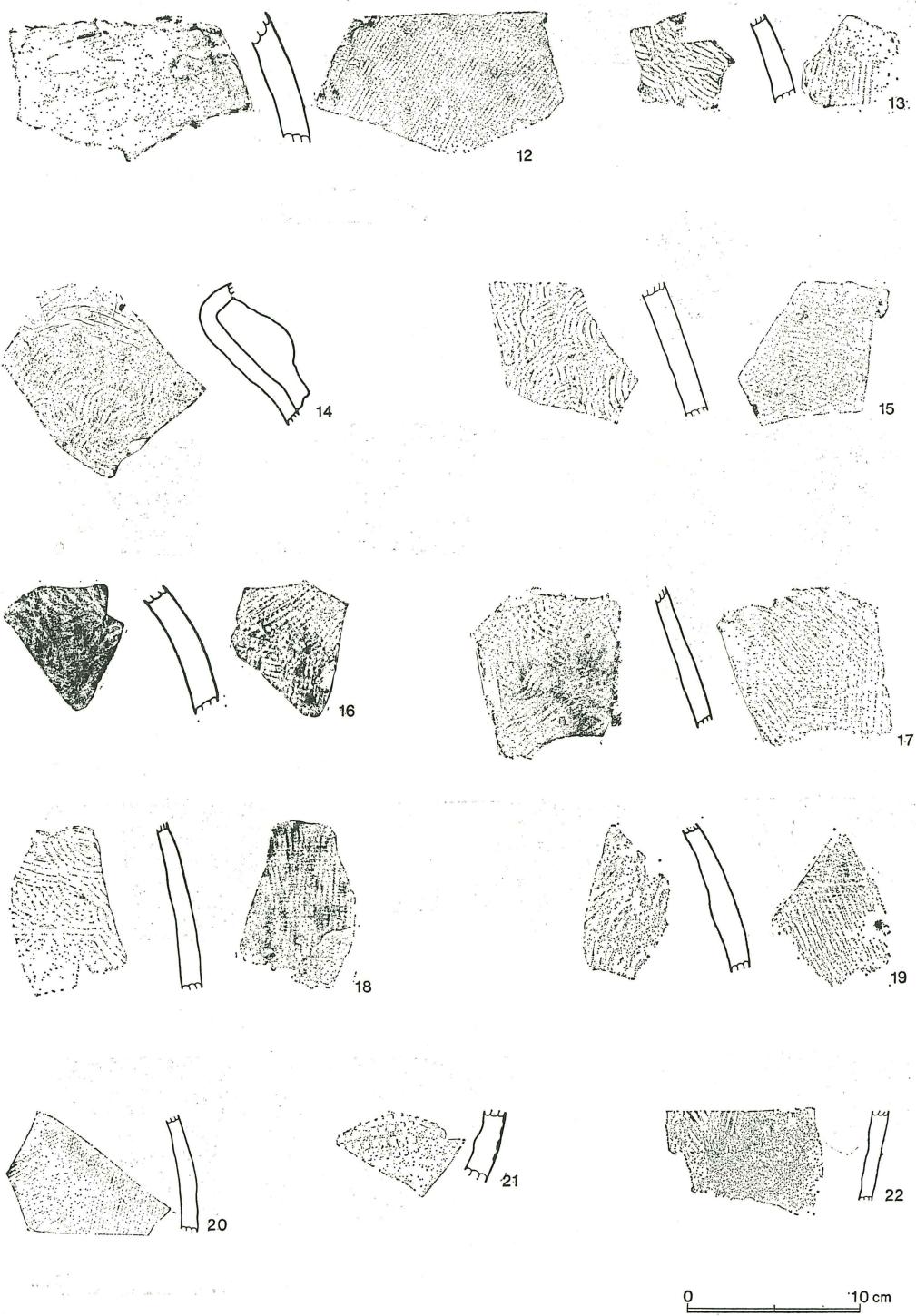
21、22は陶器片である。いづれも当具痕跡を器面にもつ。暗白色、器面は褐色呈し、胎土良好。

(2) 石 器 (第157～159図)

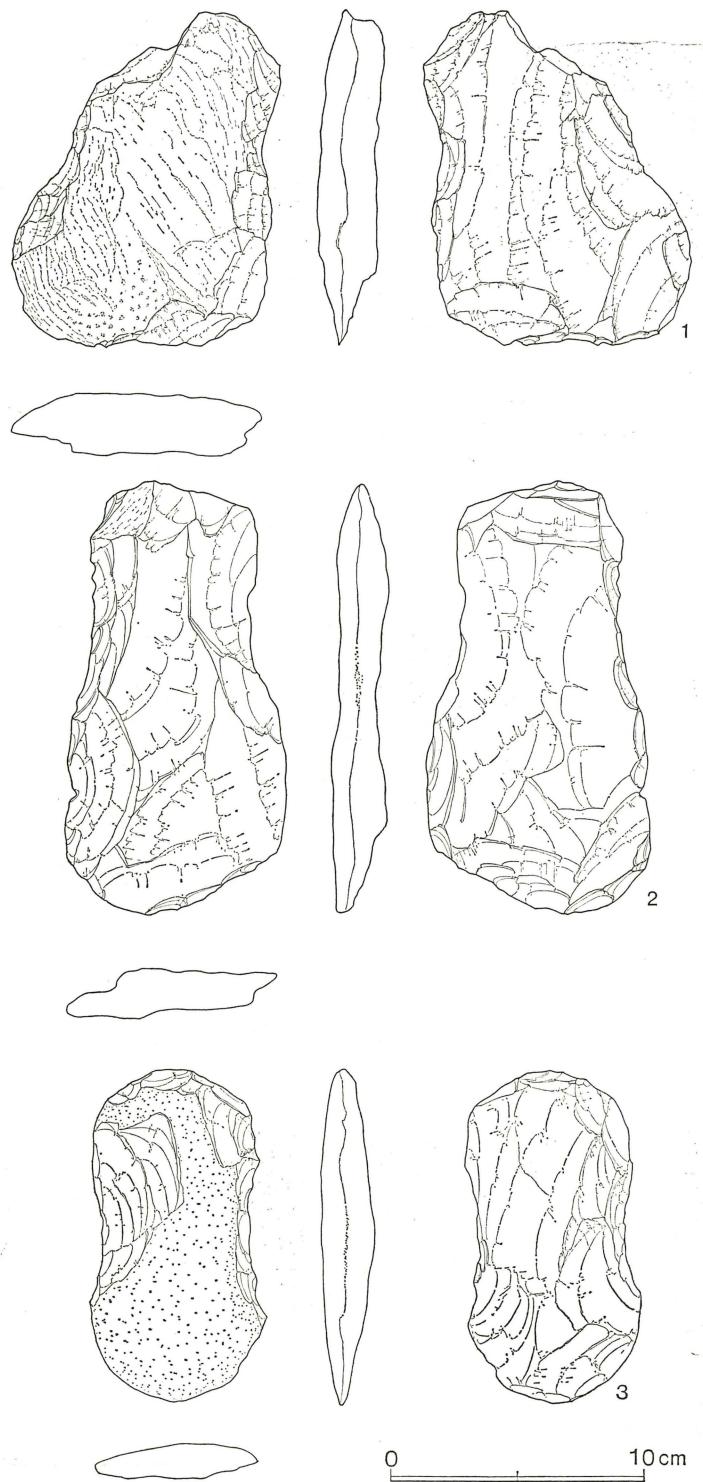
図示した石器は全て第3調査区より出土したものである。第3調査区は旧地形が埋没しており、石器は谷覆土下層青灰色粘土層上面からも出土している。谷埋没土中からは繩文式土器は検出されず、石器と同様の出土状態で弥生式土器も検出されていることから、石器も弥生式期に伴う可能性が強い。



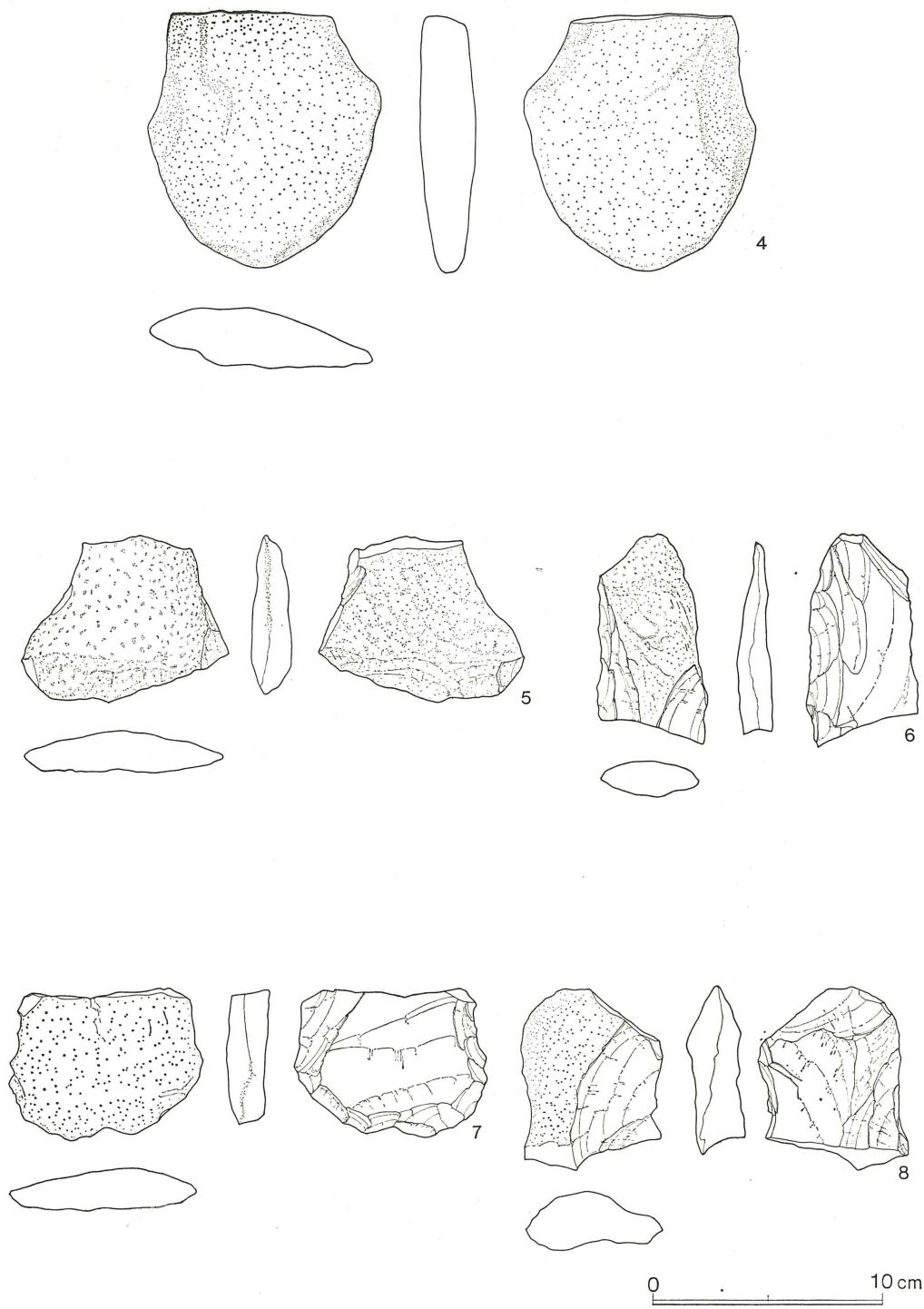
第155図 グリット出土土器（拓影）



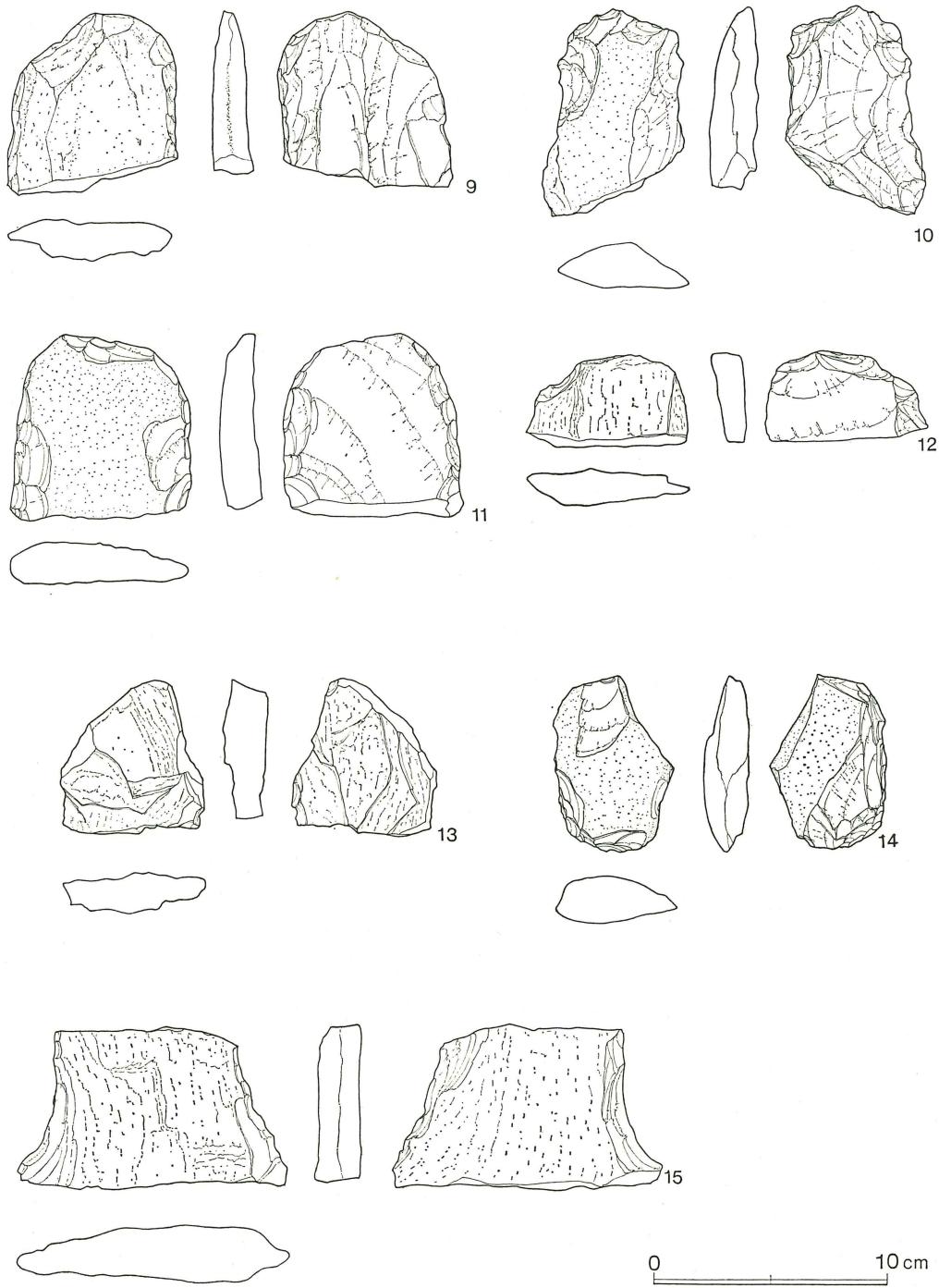
第156図 グリット出土土器（拓影）



第157図 グリット出土石器



第158図 グリット出土石器



第159図 グリット出土石器

図版	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	出土地点	備考
1	打製石斧	13.5	10.3	2.4	460	ホルンフェルス	ヲ-23 c	基部一部欠損
2	"	17.3	9.1	2.2	420	"	表採	完
3	"	13.5	6.7	2.2	250	砂岩	"	完
4	"	11.4	10.0	2.5	412	"	タ-23 c	基部欠損
5	"	7.0	9.0	2.8	190	粘板岩	カ-25 d	基部欠損
6	"	8.5	5.0	1.5	80	"	タ-23 c	刃部欠損
7	"	6.5	8.6	1.7	145	"	ヲ-23 c	基部欠損
8	"	8.1	6.2	2.4	152	"	表採	基部先端 刃部 欠損
9	"	7.0	7.3	1.6	150	"	ヲ-23 b	刃部欠損
10	"	8.0	6.1	2.0	135	"	タ-23 a	基部先端 刃部 欠損
11	"	7.7	7.6	1.8	185	砂岩	ヲ-23	刃部欠損
12	"	4.0	7.2	1.5	55	粘板岩	表採	基部先端部のみ 残
13	"	6.1	6.3	1.8	95	チャート	ヲ-23 c	基部のみ残
14	"	7.6	5.2	2.1	103	粘板岩	ワ-27 d	基部先端欠損
15	"	6.9	11.8	2.4	240	"	タ-22 d	基部 刃部欠損

第157図11～3。第158図5～8は打製石斧である。全体に完形品が少なく3点のみの出土であった。

第157図1～2は撓形を呈する。裏面の剥離は粗い。縁辺部に粗く調整剥離をもつ。2はくびれ部に磨耗痕をもつ。

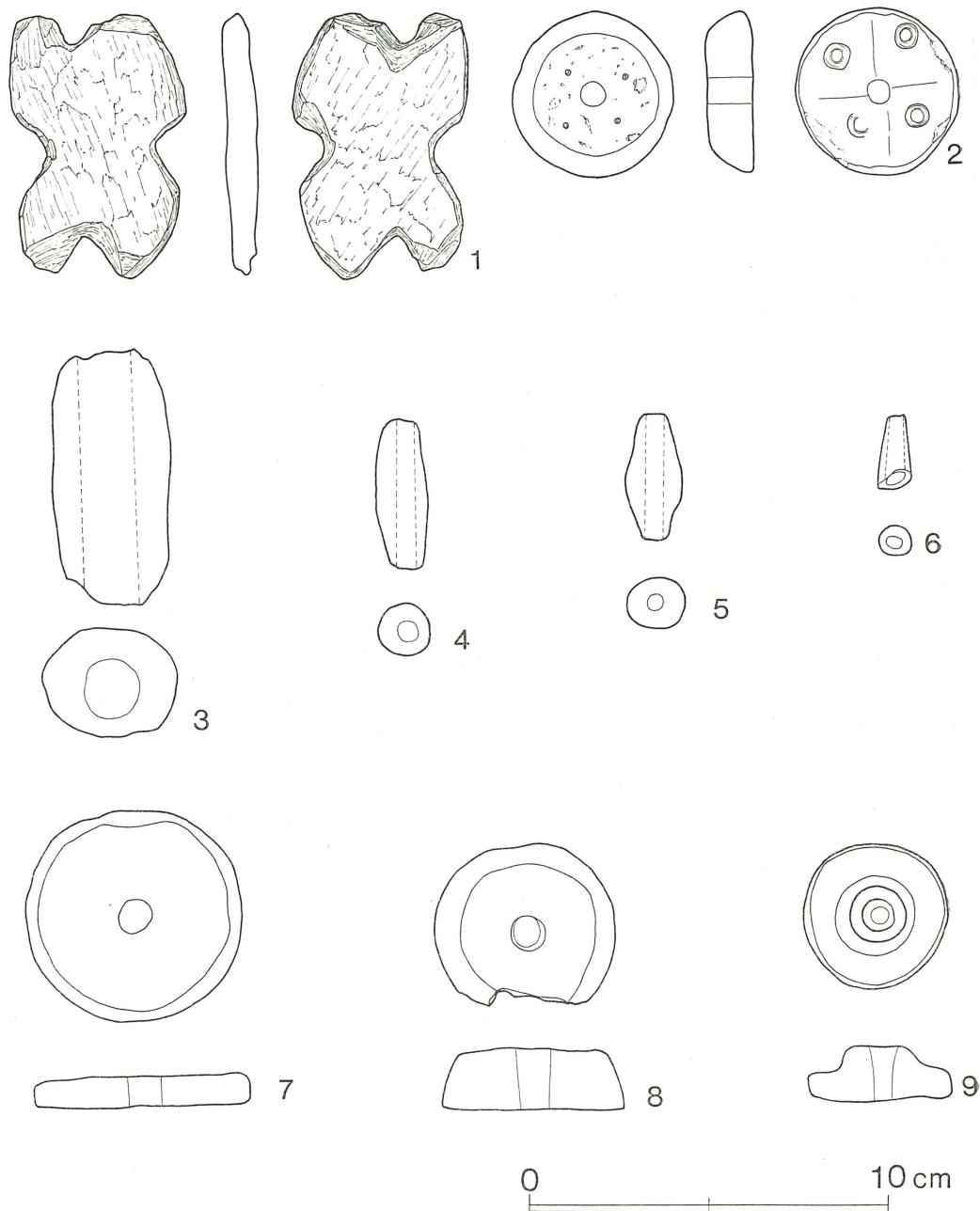
3は分銅形を呈する。自然面を残し、裏面は粗い剥離が施されている。刃部に細かな調整剥離をもつ。

第158～156図には欠損品を掲載した。第163図4、5、7は基部欠損品、4は尖り気味の刃部をもち、基部は直線状の大形品が推定される。全体に風化が著しい。

5は撓形、7は短冊形に近い形態が想定される。7には縁辺部に丁寧な調整剥離をもつ。

第163図6、8、第164図11～13は刃部欠損品である。6、9、11は縁辺部が直線状で短冊形に近い形態が想定されよう。

8は両側縁にくびれをもつ。片縁は欠損している。10、13、15は基部、刃部共に欠損しているが10は撓形に、15は、第163図4同様刃部に丸味をもつ。いわゆる、鍔形石器の範疇に含めることができるものと思われる。



第160図 グリット出土土製器 石製品

図版	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	出土 グリット	備考
1	錘(?)	7.6	5.0×3.2	0.9	48	縁泥変岩		完
2	紡錘車	4.6		1.4	55	"		
3	錘	7.1		3.9				
4	"	4.1		1.5	25			
5	"	3.6		1.6	26			
6	"	2.3		1.0	18			
7	紡錘車	6.0		0.9	30			
8	"	5.2		1.7	35			
9	"	4.1		1.5×0.9	28			

(3) 土製品 石製品 (第 160 図)

1は扁平な礫の縁辺部を剥離、研磨によって形状を作出している。両側縁及び上、下端部に抉入部をもち、特に両側縁は抉入部の磨耗が著しい。縁辺部は丸味をもって作出され、形状は 型を呈する。用途は不明であるが、錘としての機能も考えられよう。

2、7～9は錘垂車である。2は石製で、断面台形を呈する。全体によく磨かれ、中央部は孔をもつ。底面は孔を中心として十文字に浅い切り込みをもち、更に深い盲孔が4箇所に配される。

7～9は土製錘垂車である。7は扁平な円盤状を呈し、周辺は面取りされている。8は断面は扁平な台形を呈する。9は円形で中央部の孔を中心として一段高くつくられている。7～9ともに中央部に孔をもつ。

VII 結 語

1 向田遺跡の遺構と遺物

向田遺跡では古墳時代前期（五領、和泉期）の住居跡3軒と平安時代の住居跡6軒、土壙墓1基時期不詳の溝1条が検出された。これらの遺構は地形的にみて集落の南縁部に相当するもので、集落の中心は調査区北側に拡がっているものと考えられる。ここでは古墳時代の遺構、遺物については資料提示に留め、平安時代のそれを取りあげて概観したい。

該期の遺構分布をみると、1・2号住と土壙墓、9号住、5～7号住の3群に視覚的に分割され各群は20m程度離れて営まれている。1号住と2号住は極めて近接して構築されており、同時期に併存したとは考えられない。また土壙墓は2号住廃絶後の構築であることは明らかで、土壙墓を含めて2内至3段階の推移が想定できる。

5～7号住により構成される最も西よりの一群では、6号住と7号住が重複して存在する。この2軒は主軸方位、カマドの構造（石製支脚、袖石）、貯蔵穴状の土壙の位置等類似性が強く、7号住（旧）→6号住（新）という連続的な建替えが想定できる。次に5号住6の間隔をみると約1.6m離れて存在するが遺物をみると大きな時期差を欠いている。同時存在とすればまさに軒を接することになるが、ここでは堅穴住居の土間化（笛森1978、柿沼1979）を考慮して両者の居住時期に差があると理解しておきたい。5～7号住の間で3段階の推移を想定しておく。

さてこれらの遺構に伴う遺物は、所謂コの字甕衰退以降の国分期でも後半の様相を示すもので羽釜によって特徴づけられる。この段階の土器群の編年に関しては、高橋一夫（高橋1975）、市川修（市川1977）、浅野晴樹（浅野1980）等の諸氏によって検討されているが、特に年代観については見解が大きく異っている。最近では群馬の清里、陣場報告で該期土器群の体系的な編年が試みられ、羽釜の出現以降は4段階に細分された（中沢1981）。ここでは清里、陣場編年等を参考に出土土器の位置づけを行いたい。

出土土器を概括的に分類すると、甕にはⅠ、コの字甕の系譜をひくもので器壁の厚いもの（20図-7）、Ⅱ、ロクロ整形後ヘラケズリを施し、器壁の非常に厚い小形甕（20-6）、Ⅲ、口縁部がくの字状に外反し、口径の大きいもの（17-4）がある。羽釜は口縁部の形態によってⅠ内傾するもの（19-3、4）、Ⅱ内傾した口縁の上位が立ち上がるものの（19-6）、Ⅲ口縁部が長く直立気味のもの（9-4）に分けられるが何れも最大径は鐔部にある。供膳形態では酸化焰焼成、ヘラケズリを特徴とする所謂土師器坏は存在しない。須恵器も焼成、色調等大きく変貌しており、従来の須恵器=還元焰、土器=酸化焰焼成という理解では律しきれない。中沢氏は土師質土器なる概念を提唱し須恵器と峻別しているが理解が充分でないため対比が困難である。ここでは平底のものを坏、高台の付されるものを塊とするにとどめ、分類は保留する。他の器種では擂鉢（19-7）や灰釉小瓶（20-5）、塊（9-1、24-2）等がある。

煮沸形態からみて最も古く位置付けられるものは甕Ⅰ類を有する7号住である。これは口縁部形

態、ヘラケズリの特徴にコの字甕の影響が窺えるものの硬い焼きで器壁も厚い等明らかにコの字甕とは区別し得る。この種の甕は周辺の諸遺跡でも羽釜受容前後の段階にみられ、形態的にはかなりのバラエティーが認められるが一応コの字系甕として一括しておく。7号住ではこの甕Ⅰ類に甕Ⅱ類、灰釉小瓶、塊、坏が伴う。甕Ⅱ類は田中前遺跡13号住で羽釜と共に伴する他、瓶塙神社前遺跡（中村1980）では遺構外の出土ではあるが台付の形態をもつ例も存在する。

7号住に後続するのが5、6号住である。本遺跡ではこの段階に至って羽釜が登場する。5号住では羽釜Ⅰ類、甕Ⅲ類に塊、高い高台を持つ塊（17—1）が伴う。この高い高台を有する塊は阿知越遺跡5号住（鈴木1983）や宮下遺跡第2カマド（菅谷1976）に類例があり、何れも羽釜と共に伴する。6号住は羽釜Ⅰ、Ⅱ類に擂鉢、体部が内彎する法量の大きい塊、やや小ぶりで浅い坏が伴出する。擂鉢は新久窯跡E地点住居跡（坂詰1971）に出土例があるが類例は少ないようである。5、6号住出土土器は清里、陣場編年に対比すると第4期土器群に相当するものと思われる。5号住と6号住の前後関係は明確にできないが、須恵質に近い羽釜や擂鉢等をもつ6号住がより古い様相を示すものと理解しておきたい。一応実年代をあてれば7号住を10世紀 $\frac{3}{4}$ 期、6号住を $\frac{3}{4}$ 期、5号住を $\frac{4}{4}$ 期を中心とした時期と捉えておく。

1、2、9号住に関しては、時期を正確にし得る程の遺物量に恵まれていない。1号住では羽釜Ⅲ類と灰釉塊の出土がある。灰釉塊は漬け掛けによる施釉、底部外面回転ヘラケズリにより糸切り痕を消す手法が観察されるところから東濃の大原2号窯式期に比定できよう。伴出する羽釜はⅢ類で比較的新しい様相を呈すると考えられる。これに対し2号住出土の羽釜はⅠ類に相当するもので1号住よりも古い様相が窺われる。2号住廃絶後構築された土壙墓の棺底から出土した灰釉塊は釉も薄く底部外面糸切り痕をそのまま残すという特徴から灰釉陶器終末段階の丸石2号窯式期に位置付けられる。少ない遺物から時期を決定するのは危険であるが、灰釉塊の型式から1号住を10世紀末～11世紀初頭、土壙墓を11世紀 $\frac{3}{4}$ 期から中葉段階と想定すると（註1）、2号住は羽釜の出土及び1号住との位置関係から10世紀後半期頃に位置することになる。

9号住の坏（13—3）は軟質ながら須恵器の範疇にある。焼成は異なるものの比較的類似した形態は6、7号住出土土器のなかにみられる。いずれにしろ器種組成が不明であるため明確な位置付けはできない。

さて本遺跡における羽釜の出現はコの字系甕→羽釜という推移で示され、両者の併存は確認されなかった。児玉郡周辺の諸遺跡の出土例からコの字甕の変質後羽釜出現までの段階における煮沸形態の組成を追ってみると、いくつかの組み合せが存在することがわかる。

即ちA、本遺跡7号住の如くコの字系の甕によって構成されるもので枇杷橋1号住（坂本1973）沼下22、24号住（大和1982）、清水谷16号住（中島1981）等がある。B、コの字系甕にくの字状の口縁を呈し大型のロクロ整形による甕（仮に甕Ⅳ類としておく）が伴う例、清水谷11号住。C、コの字系甕と羽釜が共伴する例、枇杷橋15号住、瓶塙神社前26号住、十二天7a号住（鈴木1981）、清水谷23号住等。D、甕Ⅳ類に羽釜が伴う例、十二天7b号住。E、コの字系甕、羽釜、甕Ⅳ類が共伴する例、清水谷6号住。F、大型の煮沸形態が羽釜のみで構成される例、清水谷15号住、十二天3b号住等の他本遺跡6号住も含まれる。

以上の様に大型の煮沸形態に限定しても 5 タイプを抽出することができる。これに小型台付甕、ロクロ整形の小型甕を含めるとより複雑な状況を呈する。県内の諸遺跡では純粋な意味でのコの字甕の段階で羽釜を伸出する例は確認されていないが、C タイプでみられたようにコの字系甕には確実に半っている。しかし全てのコの字系甕に伸出するとも限らず（A タイプ）、果して 7 号住の段階に羽釜が存在したかどうかは明確にできない。

コの字甕の形式学的連続が崩壊する段階（鈴木1983）以降の煮沸形態の変化は、概念的には A → C → F という流れのなかで展開されたものであろうが、現実にはここでみたように様々な組み合せが存在し、羽釜の受容をめぐる様相は一様ではない。集落単位あるいは一集落内にあってもその様相が異なるような現象さえ見受けられるのである。いづれにしても羽釜受容をめぐる実態を明らかにすることは現状では難しい。それはこの時期に急激に進行した土師器生産の解体、須恵器生産体制の変貌との関連のなかで検討すべき問題であろうがここでは触れられなかった。羽釜出現以降の土器群の編年も含め、機会を改めて検討したい。

(富田 和夫)

2 村後遺跡の遺構と遺物

弥生時代

弥生時代の遺構は第 3～第 4 調査区で 4 軒の住居跡が検出された。20～22 号住居跡は旧地形の舌状部にほぼ主軸を同じくして検出されている。

住居跡からは器形復元し得る 9 個体の資料と、破片が若干出土した程度で、全体に散満な出土であった。

20 号住居跡からは甕形土器、壺形土器、及び甕形土器破片が出土している。復元された 2 個体の甕はいづれも口縁が外反し、胴下半でやや膨る同様の器形を呈し、第78図-1 は口唇に小波状の刻目を有するが、口唇刻目の有り方は、第 158-2 が宮の台期特有の有り方を示すのに対し、やや異った手法をもつ。器形は秩父市橋立遺跡出土例に酷似しているが、口唇の外反はさほど顕著ではない。

文様モチーフは、平行沈線による波状文で沈線間に綾杉状に刺突が充填される資料は、例えば長野県栗林遺跡等に散見することができる。口縁部、胴部の文様間に無文帯を有する構成は甕形土器に多く存在するようであり、岩槻市南遺跡、行田市池上西、同池上遺跡などが掲げられる。前者と後者を比較すると口縁部文様帯が前者で短かく後者は拡大に伸びない。無文部の縮小がおこっているが、一連の変化として考えるならば、当然後者も同一系統を引くものと考えられ、以降の変化の過程に位置づけられよう。

第78図-4 は器面に植物の茎を回転押捺したものと思われ、「稜ある筒形の回転」と称されたものと同一である。(註1)池上遺跡では地文の多くがこの種の原体であった。(註2)

同図-2、3 は細頸長頸壺である。2 又は口縁部に鋸歯状の平行線文をもち、沈線間に繩文が充填される。上敷面遺跡例などと比べ、重畳する文様帯をもたず、簡略化した様相があえる。

破片は地文に繩文をもつもの（第83図-5、8～9、11～13）と、沈線だけで文様描出されるもの（第78図-6～7、10）とに大別される。前者は池上、池上西遺跡に類似資料がある。後者（第

78図-10) は重四角文をもつものと思われる。何れも細片で正確な対比は困難だが、子の神84号住栗林遺跡、相山神社北遺跡等に類似資料がある。

21号住居跡は20号住居跡とほぼ同様の資料をもつ、甕形土器は地文に繩文をもたないものと、21号住居跡のように、地文繩文の2系統の存在が考えられよう。施文順位は繩文→沈線→貼付の順である。

器形復元されたものは第86図-1以外に良好な資料はなかった。大形で口縁部が外反し、端部が肥厚する。口唇部から胴下半部にかけて粗く櫛歯が垂下する。子の神8号住居跡、藤の台遺跡等に類似資料がある。

本住居跡出土遺物は地文が無文となるものが多く、第82図-1は指頭つまみ状の小波状口縁と斜行する櫛歯文をもつ。他に第82図4～第88図は直線的な沈線文で幾何学的な文様構成をもち、遺跡出土例と近似した文様構成をもつものと思われる。

24号住居跡出土遺物(第94図-1、2)は、口縁が大きく外反する甕と、口縁が直立し、胴部の膨る甕とで構成される。後者の文様モチーフは在地からの系譜で追えることはできない。池上遺跡では器面を隆帯で4分割し、隆帯間を沈線で重四角に充填する資料がある。同様の観点に立て女方遺跡、野沢遺跡等で類似資料が散見される。文様帶を貼付文によって分割する手法はみられないことや、例えば貼付文によって文様帶を分割する手法は「コ」字重ねのモチーフをもつ甕形土器等に普遍的に認められ、同様の出土例をもつ秩父市、蕨遺跡等に近いようである。

一方無文の甕形土器(第94図-1)は底径に比べ口径が大きく、口縁も強く外反する点などは宮の台式の甕形土器に極めて近いものと思われる。

須和田式から宮の台式にかけての変遷は遺物量の制約が大きく、特に須和田式土器に関しては、調査例のほとんどが再葬墓であり、集落址の調査例が極めて少ないとから充分な検討が加えられていない。しかし、行田市池上遺跡などのように環濠集落の調査例もあり、今後の資料的充実が待たれる。

須和田式土器は県内出土例をみると、上敷面遺跡に比べ明らかに後出的様相をもつと言える村後遺跡周辺では美里村神明ヶ谷戸遺跡、寄居町用土遺跡等が知られている。更に秩父地域では下原、蕨遺跡などが調査され、下原遺跡は住居跡3軒と多量の遺物が出土したと聞く。現在までに示された資料からみると、両遺跡ともに信州系統の遺物が主体を占め、池上遺跡などとは土器内容が大きく異っている。この点は単に地域的様相と解釈すべきか問題の多い点と思われる。

宮の台期の遺跡が近年調査例を増し、浦和市大北遺跡では住居跡の良好な資料が調査されている。本遺跡例と地域的に離れた資料を直接的対象とすることは適切ではないが、例えば24号住居跡出土遺物がこれらの遺跡と近い時期にくると思われる。一方村後遺跡20～21号住居跡は遺構の形態、出土遺物からほぼ近接した時期のものと思われ、24号住居跡に先行し、周辺の神明ヶ谷戸遺跡、(註3)用土平、或いは蕨遺跡等に先行する段階とし、須和田式の範疇に含めて考えておきたい。

県内での資料は信州系、北関東系と思われる資料が地域的に偏って存在しており、各地の編年を確立する作業から開始せねばならないであろう。従って、信州編年を考えるならば、栗林式から百瀬式までの土器群の整理が急務となろう。

註1 山内清男 1979 「日本先史土器の繩文」による

註2 中島 宏氏の御好意により資料を実見させていただいた。

註3 岡本幸男氏の御好意により資料を実見させていただいた。

五領期

古墳時代前期五領式期に属する遺構は、第5調査区を中心として、住居跡8軒、方形周溝墓1基が確認された。調査区の関係上、完掘されたものは32号住居跡1軒のみであったが、住居跡の形態構築法(住居跡床面掘り方)、主軸方向に差異が認められた。本項では、主に上記の点について略述する。

五領期の住居跡は、方形周溝墓の周囲に検出され、方形周溝墓との重複関係を有していない。大別して、26、27号住居跡を中心とするグループと28、31、32号住居跡を中心とする住居群との2群に分けることができよう。仮りに前者をA形態、後者をB形態としておこう。

A形態はB形態に比べ、住居面積はやや大きく、形態も菱形に近いものをもつ。

住居跡床面下の精査によって検出された掘り方は壁面を階段状に掘り窪め、主柱穴を中心として、柱穴を取り囲むように、周溝状に掘り方が廻らされている。掘り方面には黒褐色粘質土が貼り床されている。26、27号住居跡は住居跡主軸が各々、N-39°-E N-40°-Eにもつ。

28、30、31号住居跡は26、27号住居跡に比べてやや小形で、隅丸方形、乃至は長方形プランを呈している。主軸は各々N-72°-E N-76°-E、N-90°-Eと前者と大きく異っている。床面下の掘り方は、中央部を台状に残し、壁内面を大きく掘り込んで作成しており、段階的には、1)柱穴配列→2(荒掘り→3)柱埋設→4)貼り床の手順を追って行なわれている。

住居跡掘り方については、方南峰遺跡(重住 1979)で主に構築法に関して詳しい検討が加えられているほか、機能面に関して、主に除湿効果としての役割(小久保 1979)を有するものと考えられている。

方形周溝墓は南側部分のみの調査であったが、前方後方形を呈するものと思われる。

本遺跡周辺では岡部町石蔵B遺跡第8号周溝墓、美里村志戸川南第4号周溝墓、鈴の宮3号周溝墓などが掲げられよう。本遺跡例は、周溝部にブリッジをもつ点が上記の遺跡例と異なるが、田中新司氏の分類に従うならB類に分類することが可能であろう(田中 1377)

五領期の遺物は26~27、28、31、32号住居跡から出土しており、特に27、32号住居跡からは比較的纏った資料が得られた。住居跡出土土器を器種別に分類し、更に各住居跡の土器群について若干触れておきたい。

分類

壺形土器

A類 有段口縁壺形土器 口頸部が直立気味となるもの

B類 直口縁で、肩部が大きく膨るもの

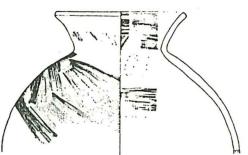
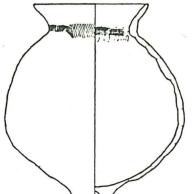
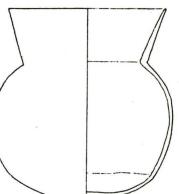
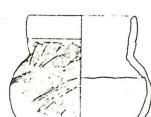
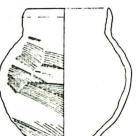
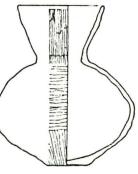
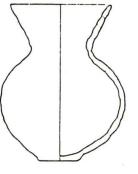
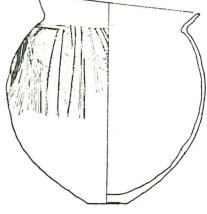
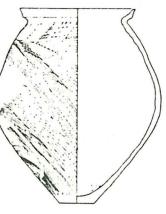
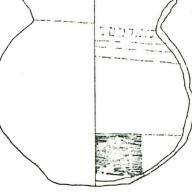
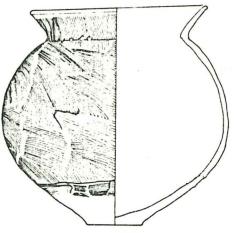
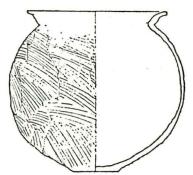
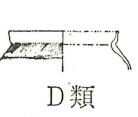
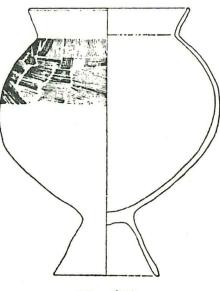
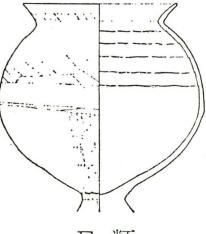
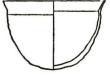
C類 直口縁で、胴下半部に最大径をもつもの

D類 球形胴部口縁が直線的に開き、口縁幅の長いもの

E類 口縁部直立気味で、球形に近い胴部と口唇下に浅く沈線の廻るもの

F類 口縁部短かく、胴部上半に最大径をもち、ゆるく底部にすぼまるもの、底部に対し、閃放射状に粗いハケ目を有する。

G1類 口頸部が強くすぼまり、胴部は算盤玉状の形態を有するもの。口縁部は内湾気味に立ち上がる。

壺								
								
甕								
								
鉢			高 坏		器 台			B 類
手捏ね								

第161図 土器分類図

G₂類 口縁部は直線的で、胴部の丸味が強いもの

甕形土器

A類 口頸部で強くくびれ、口縁は直線的に開く。胴部上半に最大径をもち、底部へゆるやかに移行するもの。底径は極めて小さく、中央部に浅い窪みをもつ。

B類 口縁部は受け口状を呈し、胴部中位に最大径をもつもの。口頸部に横線入る。

C₁類 口縁は外反気味、球形胴部で器面が粗くヘラナデされるもの

C₂ 口頸部で強くくびれ、口唇端は平坦。胴部の丸味の強いもの

C₃類 口縁短かく、口唇端部強く外反し、C₁2類に比べて小型のもの

D類 口縁部に段をもち直立気味で、頸部に横線が廻るもの

E₁ 台付甕形土器、単口縁で、口頸部のくびれが強く、胴部は球形、脚部に折り返しをもたない。口唇は平坦に面取りされたものと、やや丸味をもつものとがある。

E₂類 E₁類に比べて木型で、器面にハケ整形後ナデ消しが加えられるもの

鉢

A類 口縁がくびれ、深いもの

B型 器高が浅く、内湾気味に開くもの

高坏

1点のみの出土、脚部は反り気味で大きく開き、3孔を有する。

器台

A₁類 受け部が内湾気味に開き、中央部に孔をもたないもの

A₂類 形態はA₁類と類似し、中央部に孔を有するもの

B類 受け部は浅く、端部が内湾気味に立つもの。中央部に孔をもつ。

手捏ね土器

A類 内湾気味に開くもの

B類 内湾気味に立ち上がるもの

以上が住居跡出土土器群の主な器種別分類である。各土器群の分類は、総体的に遺物量が少なかったため、時期的な変遷を意図したものではない。

次に各住居跡出土土器群について触れておきたい。

26号住居跡では、甕（A類） 壺（F類） 鉢（A類） 器台（A₂類） 手捏ね土器（A類） が出土している。甕は2個体出土しており、いづれも底径が極めて小さく、庄内式の甕に形態が類似している。また、器面に粗く、一見タタキ目風のハケ目をもっている点が特徴である。同様の在り方は壺F類にもうかがえる。

27号住居跡からは、壺（C類） 甕（B、C₁、C₂類） 器台（A₁類） が出土している。甕形土器が比較的纏っており、器面全面にハケ目整形されるC₂類と、ハケ目整形後、ナデ消しの加えられるC₁類とが共存している。

甕B類は所謂「受け口」状を呈する。同様の形態は、近接する志戸川南遺跡3号住居跡からも出土しているが、志戸川南例は口縁部に斜位に刻目が付されるのに対して、本例は口縁全体に横ナデ

が施され、明らかに新しい形態を備えていると言えよう。

28号住居跡からは壺（B、G₁、G₂類） 鉢（B類） 高坏が出土している。高坏は坏部が浅く、口径の大きな第111図一1、坏部が深く口唇端がやや外反する第111図一2等が出土している。壺G₁、G₂類は壺形土器として分類される場合も考えられている。本住居跡の伴出事例から別系統の変化をもつものとして分類した。

31号住居跡からは壺（A類） 甕（D類） 手捏ね土器（B類）が出土した程度であるが、甕（D類）は口縁部に浅い屈曲がみられ、肩部に横線文が付されることから、S字口縁とも考えられよう。

32号住居跡は最も纏った資料が得られた。壺（D、E類） 甕（E、G₁、G₂類） 器台（B類）から構成される。甕（G₁、G₂類）は口縁部の刻目は消失しており、器面にハケ目を残すものと、ハケ目調整後、全体をナデ消す新しい手法の土器群が共存しているが、全体的に胴部は球形で、甕（G₁、G₂類）とも最大径を胴部上半に有している点が特徴である。

五領式土器の細分について、近年纏った論攻が発表されてきている。しかしながら本項では各氏の見解を具体的に検討する余裕をもたないため、五領遺跡における細分試案に照らして検討することとした。

本遺跡出土土器群は、児玉、美里周辺の概期の調査例のなかにも、該当する資料を検出することができない。従って、周辺地域の土器群との対比が問題となろう。

各住居出土土器群の特徴は以下の通りである。壺、甕とともに口頸部の屈曲が強く、甕形土器では球形胴部を呈していること。

甕C、E類ともに一部にナデ消しの手法をもつ土器群が共存しており、甕E類では口唇の刻みはなく、口縁に横ナデの手法がみられること。

甕A、B類にはタタキ目的な手法がみられる他、器形が特徴的であること。

児玉周辺に特徴的なS字口縁台付甕がみられないこと。

以上の点が掲げられよう。

遺物総体としてみるとならば、五領式の古手の様相がうかがわれる。近似した資料として、地域は異なるが富士見市南通遺跡第3地点31号住居跡が掲げられる。五領遺跡を基準とするならば、第1～第3段階（A区Ⅰ類～A区Ⅱ類、B区Ⅱ式）に位置づけられよう。

個々の住居跡出土土器群の先後関係は明確に捉えることはできないが、25、27号住居跡、28、31、32号住居跡における住居構築、主軸方向の相違出土土器群などからすれば、或いは26、27号住居跡をより古く位置づけることも可能かと思われ、児玉周辺で最も古く位置づけられる諫訪遺跡25号住居跡（小久保 1979）に先行する位置づけを与えておきたい。

方形周溝墓内出土土器群は、伸出した器台裾部が大きく湾曲しており、第27、28号住居跡よりもやや下降する位置づけが与えられるかもしれない。

何れにしても、今後資料の増加をまち、改ためて検討を加えてゆきたい。（細田 勝）

鬼高窓

本節では、村後遺跡から出土した鬼高窓の土器を中心に考察を試みたい。本文で提示した土器から、1・2・3・4・7・12・14・15・16・17・18号住居跡は鬼高窓の住居跡であるか、あるいはその可能性が強いことが明らかになった。また発掘期間中3・4・5区と仮称してきた弥生中期の住居跡群・五領期の住居跡群の周辺にも鬼高式土器の範疇に入る土器は散見され、特にⅢ区土器捨場と呼称した台地斜面の土器包含層にもやや多くの鬼高窓の土器が確認された。

この包含層には、五領期の最新の段階から、国分期の古い段階の遺物まで出土し、大きな洪水の時期が数度にわたってあったことが、土層観察の結果から考えられたため、安定した時期のセットがまとまりよく出土している部分はほとんどなかった。ただし、鬼高窓前後の土器に限っていえば第132図7の長胴化傾向の甕、第135図30～34の短脚化した所謂「和泉型高坏」（中村 1979）、第136図35・36の丸底の塊などは、柿沼幹夫氏（柿沼 1978）、小久保徹氏（小久保他 1979）、利根川（利根川 1982a）がかつて、児玉郡における鬼高式土器の古い段階の一群と考えたものの中に入れることができる。第131図3～5も口縁部の整形の特徴の異なりがあるが、和泉期最新段階か鬼高窓最古段階と考えられるもので、壺形土器との区別が不明確な一群である。

これに対して、住居跡の一群はいずれもかなり新しい段階のもので、高坏が消滅し、小形鉢や口縁部の外傾する坏が形式化し、甕の長胴化が極限に達しているということなどが主な特徴として指摘できる時期である。特に1・14・18号住は割合良好なセットである。これらのうち1号住はやや古相を示すようである。14・18号住はほぼ同時期と考えられ、口縁部が外傾して段を有する坏が食器の主体を占めるのが大きな特徴である。セットとしては前述のように鉢、長甕を中心に、大小の甌、丸甕など実用品ばかりになっている。

利根川は、外傾する口縁部に段を有する坏がメルクマールとなる段階は①坏身が深くより丸底傾向の時期、②坏身が扁平化し、口径が大きくなる時期、③全体的に小振りになり、段がゆるくなる時期の3段階があり、それぞれ西暦6世紀第4四半期、7世紀第1四半期、7世紀第2四半期にあてはまるこことを指摘したが、対象が熊谷市域の遺跡であったので、児玉とは同一視できなかった（利根川 1982b、1983）。坏形土器の型式学的変遷に関する筆者の認識は当時と変わっていないので、参考願いたいが、年代観については、疑問の余地があることを数人の方からご指摘いただいた。

そこで、本遺跡の鬼高窓の主体となる一群（14号住）の位置付けの厳密化をはかり、旧説の誤りを補正してみたい。まず須恵器の検討からはじめよう。14号住出土の須恵器は坏である。口径の小型化は顕著で、口縁部の立ち上がりはやや高くしっかりしている。蓋受けは貧弱化し、底面の回転ヘラケズリで底部中央が平底風に作られるなどより後出的な特徴もある。胎土が砂粒多く、ザラザラした感触をもち、くすんだ灰白色の色調を呈するというもので、少なくとも近畿や東海西部産のものではないようである。法量比からいって田辺編年TK 209型式以前のやや大振りな坏類が盛行する時期にはあたらないであろう。したがって、7世紀前半から中葉という、最近の須恵器編年上最も年代の安定しない時期の中で考えざるをえない。奈良国立文化財研究所の飛鳥・白鳳期の土器編年（稻田 1976、西 1978）でこの土器の位置づけを行なうならば、坂田寺の池SG 100出土の坏Hとの類似を考慮して、飛鳥Ⅱ期二7世紀第2四半期にあてはめることができる。しかし、坂田寺

の池の掘削→土器・瓦博類の廃棄・流入→池の埋没というプロセスが追試できるような正式報告は未だなされていないし、小塙田宮推定地の報告においても、都宮跡と考えられる遺構がないため、型式学的変遷による相対編年に、京都市幡枝瓦窯跡などのわずかな状況証拠に基いて、7世紀前半代にまで拡大して暦年代を与えていたことが奈文研編年の基本的立場であった。これに対して白石太一郎氏（白石 1982）、春成秀爾氏（春成 1983）による7世紀代の須恵器編年の再検討が行なわれた。両氏は難波宮下層遺跡と整地層出土の土器群、四天王寺と関連性の深い明石市高丘窯跡群出土の須恵器、大津宮期とされる大津市穴太遺跡出土の土器群などを定点とし、宝珠つまみ蓋坏出現の時期を7世紀第2四半期でも新しい段階に想定し、盛行期は7世紀第3四半期にあるとしたのである。

奈文研編年の暦年代の定点は藤原宮跡の木簡を伴出する7世紀末葉の土器群、京都市幡枝瓦窯出土の素弁10葉蓮文軒丸瓦・素弁8葉有稜蓮華文軒丸瓦とそれに伸出する乳頭つまみ・かえりを有する須恵器蓋坏である。このうち後者には、幡枝瓦窯の瓦の供給先である京都市北野庵寺が、日本書紀に伝えられる秦氏の氏寺「蜂岡寺」であり、日本書紀の記載どおり、7世紀初頭創建と考えてよいという「前提条件」が必要である。また、豊浦寺創建期瓦の瓦窯である宇治市隼上り窯にも乳頭状つまみの蓋坏が伴出するが、豊浦寺自体も日本書紀のみならず、『元興寺伽藍縁起』など複数の伝承が残存し、年代的には落ち着かない。

坂田寺の池SG100の坏Hと同じ形態を示す、所謂「逆転期」直前の須恵器蓋坏は難波宮下層遺跡と前期難波宮の整地層から出土することが知られるが、難波長柄豊崎宮の造営開始が白雉元年（649）なのは近年大化改新否定論者の間でもほとんど史実として認められている（原 1980など）。村後遺跡14号住の須恵器坏はやや古相は呈するものの、この資料に形式的距離が近い。したがってTK209型式の下限と考えられる7世紀第1四半期にはその上限が含まれる可能性もあるが、「逆転」した蓋坏に確実に先行する純粹な資料は今のところなく、静岡県の大沢・川尻窯なども飛鳥Ⅱ期併行期を初現とすることが型式学的には考えられるので、7世紀第2四半期に含まれるが、第3四半期に一部かかり、660年ぐらいを下限と考えてよいであろう。このタイプの須恵器は地域ごとに、口縁部の立ち上がりや蓋受けの形態が異なるが、630～660年を中心として、その前後に生産・消費され、漸時的に乳頭状つまみそして宝珠つまみ蓋坏に入れかわっていくのであろう。その時期も上限の確定はむずかしいが、640年前後まで下るものと思われる。乳頭状つまみは宝珠つまみに対して形式的には先行するが、時間軸上ではかなりの重複期間を持ち、なおかつ地域的には器種使用上の「選択」が働いた可能性があると思われる。以上のことから村後遺跡14号住の須恵器坏は西暦620～660年頃の間のある時期ということになる。土師器甕の変遷については鈴木徳雄氏の検討に従う限り（鈴木 1983）、7世紀後半期の圧延技法・板状粘土巻き上げ技法盛行期に先行するものが本遺跡例になるし、坏の場合も口縁部を内側に折り曲げる技法が登場する以前の段階である。よって7世紀第2四半期中心の時期に当てられ、結果的に利根川旧説VIII期の一群にこの年代を与えたことになった。本報告をもって訂正しておきたい。

（利根川章彦）

引用参考文献

- 青木義脩 小倉 均 1983 「西谷・和田南、大北・大間木内谷遺跡発掘調査報告書」 浦和市遺跡調査会報告書 第25集
- 青木義脩、小倉 均 1983 「大北遺跡発掘調査報告書」 浦和市遺跡調査会報告書 第24集
- 相京建史他 1981 「清里・庚申塚遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 浅川利一他 1981 「町田市 桐山神社北遺跡」 町田市桐山神社北遺跡調査会
- 浅野晴樹 1980 「埼玉県内出土の平安末期の施釉陶器」 埼玉県立歴史資料館 研究紀要 第2号
- 赤石光資他 1978 「薬師耕地前遺跡」 上尾市文化財調査報告 第4集
- 阿久津久 1979 「大宮町小野天神前遺跡の分析」 茨城県歴史館報 6
- 市川 修 1977 「田中前遺跡」 埼玉県遺跡調査会報告書 第32集
- 稻田孝司 1976 「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ」 奈良国立文化財研究所
- 岩崎卓也 1963 「土師器研究上の諸問題(Ⅲ)」 大塚考古 第5号
- 大村 直 1979 「弥生時代中期前半の遺構と土器」 桶田遺跡群1978年度調査概報 桶田遺跡調査会
- 大村 直他 1982 「神谷原 Ⅲ」 八王子市桶田遺跡調査会
- 岡本 勇他 1975 「歳勝土遺跡」 港北ニュータウン地域埋蔵文化財調査報告 V 横浜市文化財調査委員会
- 岡本孝之 1972 「東日本先史器時代末期の評価」 考古学ジャーナル №97~102
- 小川貴 橋本博文 1980 「大久保山 Ⅰ」 早稲田大学本庄校地文化財調査室
- 尾崎喜左雄他 1968 「石田川 石田川遺跡調査報告」 石田川刊行会
- 柿沼恵介、山本良知 1975 「水沼遺跡」 倉淵村史別冊
- 柿沼修平 1979 「土字」 日本文化財研究所文化財調査報告 6
- 柿沼幹夫・小久保徹 1978 「東谷・前山2古墳・古川端」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第16集
- 柿沼幹夫・小久保徹 1979 「下田・諫訪」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第21集
- 神沢勇一 1966 「弥生文化の発展と地域性 関東」 日本の考古学 Ⅲ
- 金井塚良一 1971 「シンポジウム 五領式土器について」 台地研究 №19
- 金井塚良一 1981 「五領遺跡」 東松山市史資料編 第1巻
- 熊野正也 1977 「入門講座・弥生土器一南関東2・3」 考古学ジャーナル №138~139
- 倉田芳朗他 1978 「千葉・南総中学遺跡」 駒沢大学考古学研究室
- 小林 茂 1964 「秩父出土の弥生式土器」 埼玉考古 第2号
- 小林 茂・吉川國男 1966 「秩父・三角穴半洞窟遺跡発掘調査概報」 埼玉考古 第2号
- 小林 茂・吉川國男 1966 「秩父・浦山岩合遺跡発掘調査概報」 埼玉考古 第4号
- 小林 茂・吉川國男 1983 「秩父市下ノ原遺跡の調査」 古代 第74号
- 小出輝男 1983 「針ヶ谷遺跡群一南通遺跡第3地点1」 富士見市遺跡調査会報告 第21集
- 小久保徹 1976 「鶴ヶ丘遺跡の発掘調査」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第8集
- 更級埴科地方誌刊行会 1978 「更級埴科地方誌 第二巻」
- 駒宮史朗 1979 「雷電下・飯玉東」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第22集
- 坂詰秀一 1971 「武藏新久窯跡」
- 坂本和俊 1973 「枇杷橋遺跡発掘調査報告書」 埼玉県遺跡調査会報告 第20集
- 笹森建一 1978 「川崎遺跡(第3次)・長宮遺跡」 上福岡市教育委員会
- 白井久美子 1981 「市原市上総国分寺台出土の東海系「有段口縁」甕形土器について」 古代 第71号
- 白石太一郎 1982 「畿内における古墳の終末」 国立歴史民族博物館研究報告 第1集
- 重住 豊他 1978 「方南峰遺跡」 文化財シリーズ 21 杉並区教育委員会
- 下津谷達男他 1982 「勢志久保」 流山市教育委員会
- 菅谷浩之 1976 「宮下・樋之口遺跡発掘調査概報」 埼玉県児玉郡美里村教育委員会
- 杉原莊介 1971 「市川市史 第1巻 原始・古代」

- 杉原莊介 1967 「下総須和田出土の弥生式土器に就いて」 考古学集刊 第3巻第3号
- 鈴木敏弘他 1981 「東京都板橋区成増一丁目遺跡発掘調査報告」 板橋区教育委員会
- 鈴木徳雄 1981 「金屋遺跡群」 児玉町文化財調査報告書 第2集
- 鈴木徳雄 1983 「阿知越遺跡Ⅰ」 児玉町文化財調査報告書 第3集
- 鈴木徳雄 1983 「古代北武藏における土師器製作手法の画期」 土曜考古 第7号
- 澄田正一 1967 「新編 一宮市史 資料編2」
- 澄田正一 1975 「朝日遺跡群 第一次報告」 愛知県教育委員会
- 静岡考古学会 1980 「第5回シンポジウム資料一冊」
- 三県シンポジウム 1983 「東日本における黎明期の弥生土器」
- 高橋一夫 1975 「国分期土器の細分・編年試論」 埼玉考古13・14号
- 田口一郎 1978 「鈴ノ宮遺跡一圃場整備事業に伴う元島名遺跡群の調査報告(1)」 高崎市文化財調査報告書 第4集
- 田口一郎 1981 「元島名將軍塚古墳」 高崎市文化財調査報告書 第22集
- 田口昭二 1982 「美濃窯の灰釉陶器と綠釉陶器」 考古学ジャーナル №211
- 田中新史 1977 「市原市神門4号墳の出現とその系譜」 古代 第63号
- 立石盛詞 1982 「後張」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第15集
- 立石盛詞 1983 「後張」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第26集
- 利根川章彦 1982 a 「古墳時代集落構成の一考察」 土曜考古 第5号
- 利根川章彦 1982 b 「新ヶ谷戸」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第集
- 利根川章彦 1983 「三ヶ尻天王・三ヶ尻林(1)」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第集
- 中沢悟 1981 「清里・陣場遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 中島宏 1981 「清水谷・安光寺・北坂」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第1集
- 中島宏 1983 埼玉県立さきたま資料館報
- 中村倉司 1979 「宇佐久保遺跡」 埼玉県遺跡調査会報告 第集
- 中村倉司 1980 「櫛庭神社前・一本松古墳」 埼玉県遺跡調査会報告 第39集
- 西弘海 1978 「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ」 奈良国立文化財研究所
- 沼沢豊 1977 「東寺山石神遺跡」 千葉県文化財センター
- 日本考古学協会 1981 「シンポジウム 関東における古墳出現期の諸問題 資料」
- 八王寺市郷土資料館特別展 1983 「三~四世紀の東国 特別展図録」
- 原秀三郎 1980 「日本古代国家史研究」 東京大学出版会
- 春成秀爾 1983 「明石発見の鶴尾新資料」 藤沢一夫先生古稀記念古文化論叢
- 藤原高志他 1983 「ささら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第24集
- 古内茂 1977 「宮の台式土器の変遷について」 船橋考古 第7号
- 望月幹夫 1978 「子の神」 厚木市教育委員会
- 望月幹夫 1983 「子の神(Ⅱ)」 厚木市教育委員会
- 柳田敏司他 1968 「大宮市史 第1巻資料編」
- 柳田敏司他 1971 「諏訪山貝塚・諏訪山遺跡・桜山貝塚・南遺跡」 埼玉県遺跡調査会発掘調査報告 第8集
- 大和修 1982 「沼下・平原・新堀・中山・お金塚・中井丘・鶴巻・水久保・猪俣遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第16集
- 横川好富他 1972 「加倉・西原・馬込・平林寺」 東北自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ
- 吉川國男 1982 「西関東における弥生文化の波及について」 埼玉県史研究 第9号

VII 附 編

村後遺跡出土土器の胎土分析結果報告

第四紀地質研究所 井 上 厳

X線回折分析および電子顕微鏡観察

1 実 験

1—1 試 料

分析に供した試料は第1表胎土性状に示すとおりである。

X線回折試験に供する置物試料は洗浄、乾燥した後に、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。

電子顕微鏡観察に供する置物試料は断面を観察できるように整形し、φ10%の試料台にシルバーペーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

1—2 X線回折分析

土器胎土に含まれる粘土鉱物および造岩鉱物の同定は、X線回折分析法によった。

測定には理学電機製X線回折装置を用い、X線管球、銅対陰極、フィルター、ニッケル、印加電圧—電流、30KV—15mA、スリット系、 $1^{\circ}—0^{\circ}$ 15mm— 1° の条件で行った。

走時速度は、 $2^{\circ}/\text{mm}$ 、フルスケールは800カウントとした。

なお、胎土の分析に先だって、原土と思われるローム質粘土の分析を行った。X線回折試験は原土、電気炉において 700°C 、 900°C で各々1時間焼成した試料（同一試料を石英ガラスに定着し、原土、 700°C 、 900°C と順次実験を行う）の3段階で実施した。その結果、組成上に大きな変化がないことを確かめた上で胎土分析を行った。ただ、 900°C 以上になった場合の組成については明らかではなく、今後の検討が必要である。

1—3 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物およびガラス生成の度合いについての観察は、電子顕微鏡によって行った。

観察には日本電子製T—20を用い、倍率は $\times 45$ 、 300 、 700 、 1500 、 4500 の5段階の段階で行い写真撮影をした。

45～300倍は胎土の組織、700～4500倍は粘土鉱物およびガラスの生成状態を観察した。

2 実験結果の取り扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示すとおりである。

第1表右側には、X線回折試験に基づく粘土鉱物および造岩鉱物の組成が示してあり、左側は各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物および造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの高さ（強度）をmm単位で測定したものである。

ガラス量は大略 $2^{\circ}=10^{\circ}\sim20^{\circ}$ の範囲にあって、チャートが全体に腫れあがるブロードな現象を示す部分に対する面積で表示し、ガラス量の比較の材料とした。

電子顕微鏡観察によって得られたガラス量と、X線回折試験におけるガラス量とを比較対比し、さらにムライト(Mu)、クリスピーライト(Cr)などの組成上の組み合わせによって焼成ランクを決定した。

2—1 組成分類

I) Mo—Mi—Hb三角ダイヤグラム

第1図に示す様に三角ダイヤグラムを①～⑯に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mo、Mi、Hbの3成分の含まれない胎土は記載不能として⑰含め、別に検討した。

三角ダイヤグラムはモンモリロナイト(Mo)、雲母類(Mi)、角閃石(Hb)のX線回折試験におけるチャートのピーク高を、百分率(%)で表示する。

モンモリロナイトは $Mo/Mo+Mi+Hb \times 100$ で百分率として求め、同様にMi、Hbも計算し、三角ダイヤグラムに記載する。

三角ダイヤグラム内の①～④は、Mo、Mi、Hbの3成分を含み、各頂点は、1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は、第1図に示すとおりである。

II) Mo—Ch、Mi—Hb菱形ダイヤグラム

第2図に示す様に、菱形ダイヤグラムを、①～⑯に分割し、位置分類を数字で表した。

記載不能は⑰として別に検討した。

記載不能はモンモリロナイト(Mo)、雲母類(Mi)、緑泥石(Ch)、角閃石(Hb)のうち、⑰3成分以上含まれない。⑯Mo、Ch 2成分が含まれない、⑰Mi、Hbの2成分が含まれない。の3例がある。

菱形ダイヤグラムはMo—Ch、Mi—Hbの組み合わせを表示するものである。Mo—Ch、Mi—Hbの各々のX線回折試験のチャートの高さを各々組み合わせ毎に百分率で表すもので、例えば、 $Mo/Mo+Ch \times 100$ と計算し、組み合わせ百分率を記載したものである。

菱形ダイヤグラム内にある①～⑦はMo、Mi、Ch、Hbの4成分を含み、各辺はMo、Mi、Ch、Hbのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。①—1と①—2は現在のところ大きな意味はないが、胎土分析の量が増えてくると位置分類上の区分が必要なものとなるかもしれない。しかし現在は①として一括して取り扱った。

位置分類についての基本原則は第2図に示すとおりである。

2—2 焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。

ムライト(Mu)は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリスピーライト(Cr)はムライトより低い温度、ガラスはクリスピーライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI～Vの5段階に区分した。

- ①焼成ランク I …高温を示すムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広い。
- ②焼成ランク II …ムライトとクリストパライトが共存し、単位ガラスの面積が狭くなる。
- ③焼成ランク III …ガラスの中にクリストパライトが生成し、ガラスの単位面積が小さく、葉状断面を成し、ガラスのつながりに欠ける。
- ④焼成ランク IV …ガラスのみが生成し、原土の組織をかなり明瞭に残す。ガラスは微小な葉状を呈する。
- ⑤焼成ランク V …原土に近い組織を有し、ガラスはほとんどできていない。

以上のI～Vの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストパライトなどの組み合わせといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第1表の右端の備考に理由を記した。

2-3 タイプ分類

タイプ分類は各々の土器胎土の組成分類に基づくもので、三角ダイヤグラム、菱形ダイヤグラムの位置分類による組み合わせによって行った。同じ組成をもった土器胎土は、位置分類の数字組み合わせも同じはずである。

タイプ分類は、三角ダイヤグラムの位置分類における数字の小さいものの組み合わせから作られるもので、便宜上、アルファベットの大文字を使用し、同じ組み合わせのものは同じ文字を使用し表現した。

例えば三角ダイヤグラムの①と菱形ダイヤグラムの⑪～⑯の組み合わせはA、三角ダイヤグラムの②と菱形ダイヤグラムの⑮はB、という具合である。

各文字の後の()内の数字は、三角、菱形ダイヤグラムの位置分類の数字を合計したものである。近い組織を示しながら、位置分類上隣接するタイプ分類に入る場合には、試料数の多いものの類似としてA'などとダッシュをつけて分類した。

なお、タイプ分類のA、B、C等は便宜上であり、今後試料数の増加に伴って統一した分類名称を与える考えである。

3 実験結果

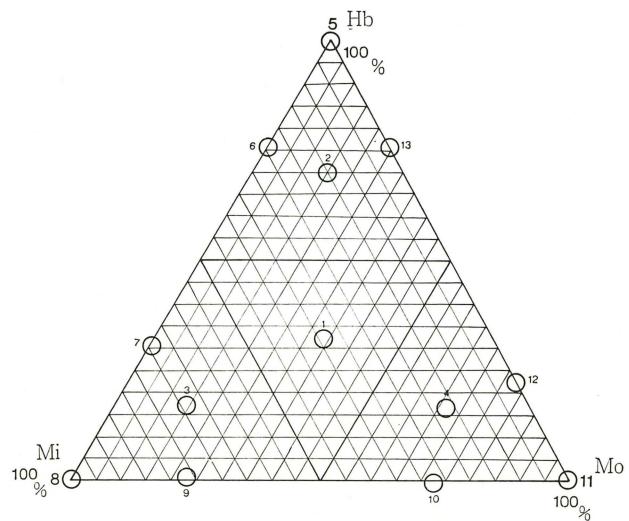
3-1 タイプ分類

土器胎土は第1表胎土性状表に示すように、第3図三角ダイヤグラム、第4図菱形ダイヤグラムの位置分類、焼成ランクに基づいて、A～Fの6タイプに分類される。

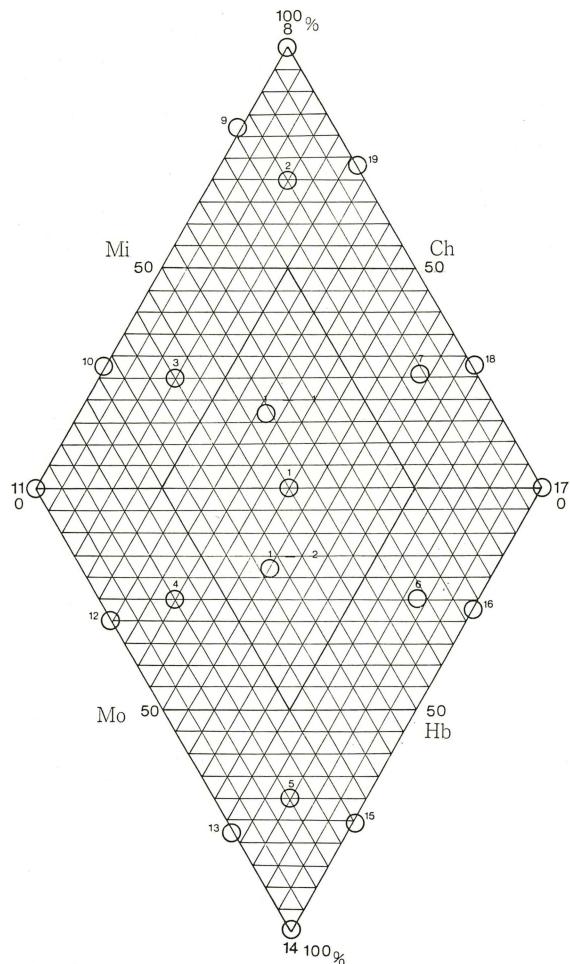
村後遺跡より発掘された土器の胎土はAタイプが最も多く、26試料中、19個に達し、Aタイプが在地性としての可能性は最も高い。

焼成ランクは全体にガラスが微小で、原土の組織を残す点から推察して、IVタイプのものが多い。
Aタイプ…Mur—2、3、4、5、6、7、8、9、10、13、14、16、17、19、21、23、24、25
モンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)、緑泥石(ch)、の4成分を含む

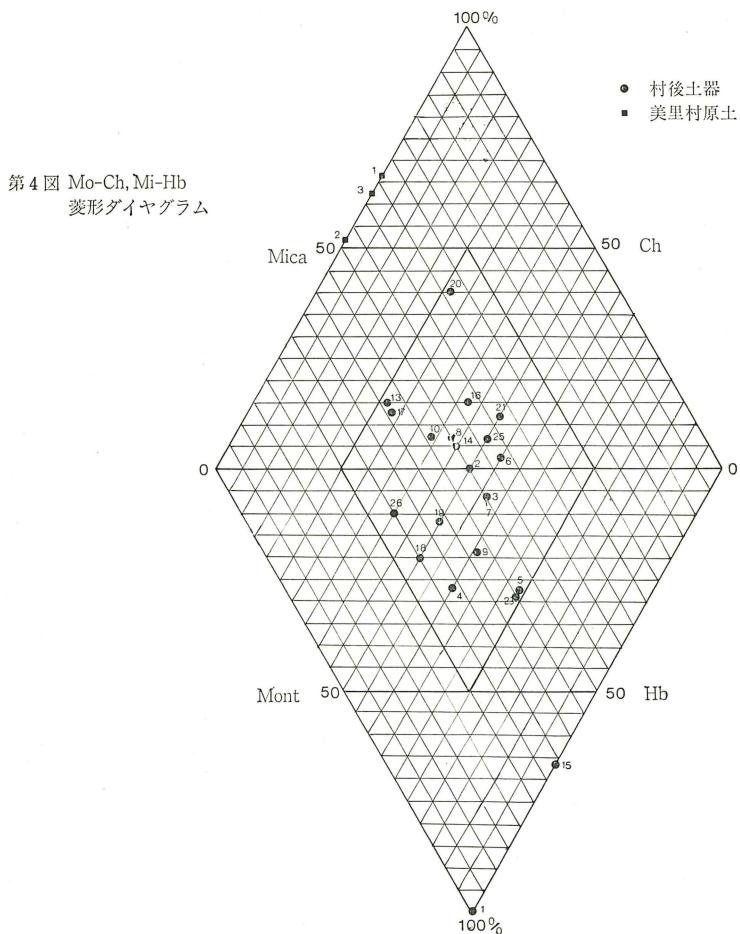
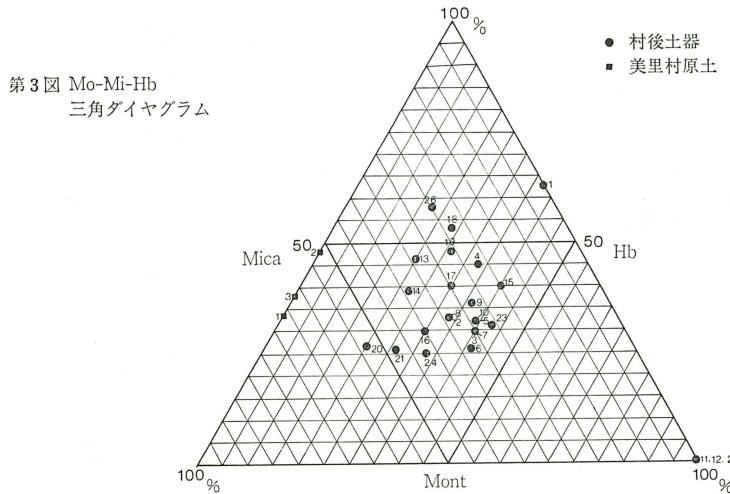
第1図
三角ダイアグラム
位置分類図



第2図
菱形ダイヤグラム
位置分類図



第1・2図



第3・4図

主に粗粒の石英、斜長石を混入する胎土と、細粒の石英、斜長石を混入する胎土の 2 種類存在するが、粘土は同じものが使用されている。粘土は碎屑性粘土で、全体に粒径の比較的そろった良質の粘土であることが特徴である。組成および個体数の多さから判断して、在地性であろう。

B タイプ…Mur—15

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Ch) の 3 成分よりなり、緑泥石 (Ch) に欠ける。細粒の石英斜長石を混入する粒径のそろったローム質粘土。

C タイプ…Mur—18, 26

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) の 4 成分を含む A タイプとの相違は三角ダイヤグラムにおける位置のちがいであり、角内閃 (Hb) の占める比率が A タイプと比較していくぶん大きいためである。全体の組成は A タイプに非常に近く、粘土採取上の問題で生じた相違である可能性が推察される。

D タイプ…Mur—20

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) の 4 成分を含む。

雲母類 (Mica) と緑泥石 (Ch) の占める比率が高く、三角ダイヤグラムの位置が A、B タイプと異っているが組成は類似している。

B タイプと同様に粘土の採取上の問題で生じた可能性が推察される。

E タイプ…Mur—11, 12, 22

モンモリロナイト (Mont)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) の 3 成分に欠ける。

粒径のそろった淘汰のよい碎屑性の粘土であり、 nAl_2O_3 、 $mSiO_2$ 、 lH_2O を多く含む胎土であろう。

F タイプ…Mur—1

モンモリロナイト (Mont)、角閃石 (Hb) の 2 成分を含み、雲母類 (Mica)、緑泥石 (Ch) の 2 成分に欠ける。

粒径のそろった碎屑性の粘土で胎土は構成される。

3—2 石英 (Qt) —斜長石 (pl) の相関について

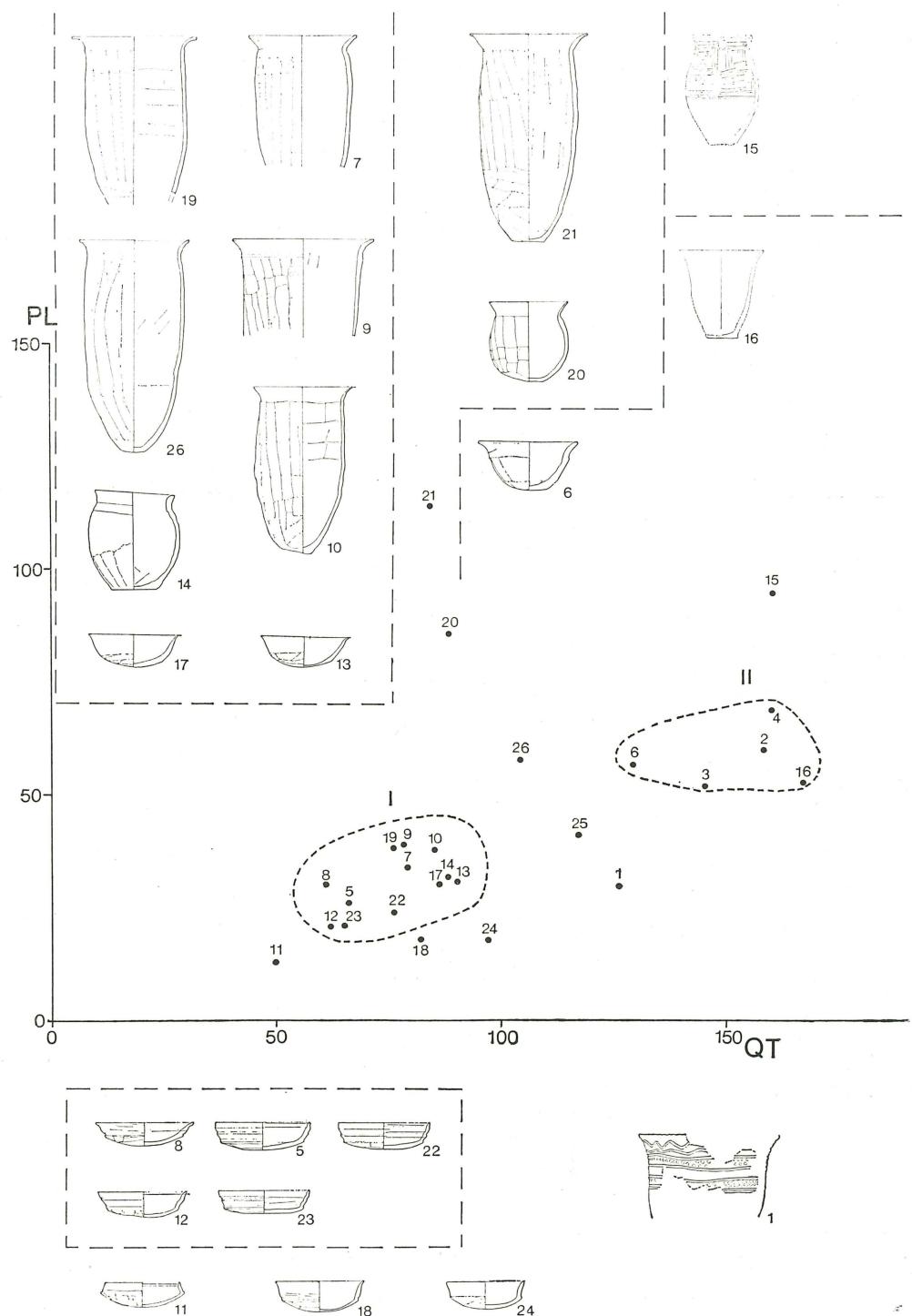
第 5 図 Qt—pl 相関図は X 線回折試験によって得られた石英 (Qt) と斜長石 (pl) の強度高を単純にグラフ化したものである。

実験は Fullscall 800 count に条件設定したものであり、この条件におけるチャートとの強度高をミリメーター単位であらわしてある。

石英、斜長石は砂の主成分であり、土器製作過程で粘土中に混入される。

砂における石英、斜長石の量比は後背地の地質および運搬過程における流速などの条件によってある地域において大まかにある一定の比率を有するものと推察される。

ある地域における比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは各集団における技術上の問題である。例えば同一集団において使用する粘土は若干異っても砂の粘土に対する混合比はある一定



第5図 QT—PL相關図

の量比にあると考えられる。すなわち、各集団における土器焼成温度は燃料の相違、燃焼のさせ方など異っていたであろうし、燃料の原材料となる木材の相違、いいかえれば、植生によっても異ったであろう。

粘土に対する砂の混合比は各集団が維持した土器焼成温度と密接な相関をもつたであろうと推察される。すなわち維持した土器焼成温度において良質の土器を焼きあげるために、粘土の材質と砂の混合比を経験的に決定したものであり、砂の混合比は純然たる土器焼成上の問題であると推察される。

村後遺跡における土器胎土中のQt—Pl（石英—斜長石）の相関は第5図に示すとおりである。

土器は大きく、Ⅰ、Ⅱの2つのグループとその他に分類される。

Ⅰ グループ…Mur—5、7、8、9、10、12、13、14、17、19、22、23

石英（Qt）は60～90、斜長石（Pl）は20～40の範囲にある。

個体数は12ヶと集中度が高いのが特徴である。

Ⅰ グループの中でも石英（Qt）が60～70、75～90の2ヶ所に集中する傾向があり、更に2つのグループに区分することが可能であろう。

Ⅱ グループ…Mur—2、3、4、6、16

石英（Qt）は125～170、斜長石（Pl）は50～70の範囲にある。

個体数は5個と少なく、集中度もあまり高くない。

その他……Mur—1、11、15、18、20、21、24、25、26

Ⅰ および Ⅱ グループに入らないもの全体をその他として取扱った。

Mur—15、20、21は通常に認められる斜長石（Pl）の強度と比較して2～3倍高く、特徴的な砂を混入している。

Mur—11、18、24はⅠ グループの混合比にかなり近い関係にあることを示している。

Mur—1、25、26はⅠ グループとⅡ グループの中間の混合比にあるが、両者とのへだたりは充分にある。

砂の混合比より土器胎土はⅠ、Ⅱの2つのグループとその他に区分できた。

前記の前提条件に基づいて考察するならばⅠ、Ⅱの各グループの土器は各々別集団によって製作されたものである。Ⅰ グループは同一集団において製作された土器であり、Ⅱ グループも同様である。しかしその他は各々、1個、1個が1つの集団を意味していると解釈されるものである。各グループおよびその他の土器が同時代の別集団によって製作された土器であるか、同一集団の時間の相違を意味するかは別に土器の形態出土層準による時代の決定などの諸要素との対比によらなければならない。

3—3 まとめ

村後遺跡で採取した原土と同一の組成を有する土器胎土は認められなかった。しかし、分析した土が胎土26試料のうち、Aタイプは18個にも達し、類似する組成を有するC、Dタイプを入れると21個の多きに達する。組成と個体数の多さから判断して、A、C、Dの3タイプは在地性の可能性が高い。

A、C、Dの3タイプはモンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) の4成分よりなる点では非常に類似した組成を有している。これら3タイプの粘土は環境の若干異なる堆積の場に堆積した粘土の組成の類似性から推察して非常に近い距離にあったものと推察され A、C、Dの3タイプを在地性と判断した。

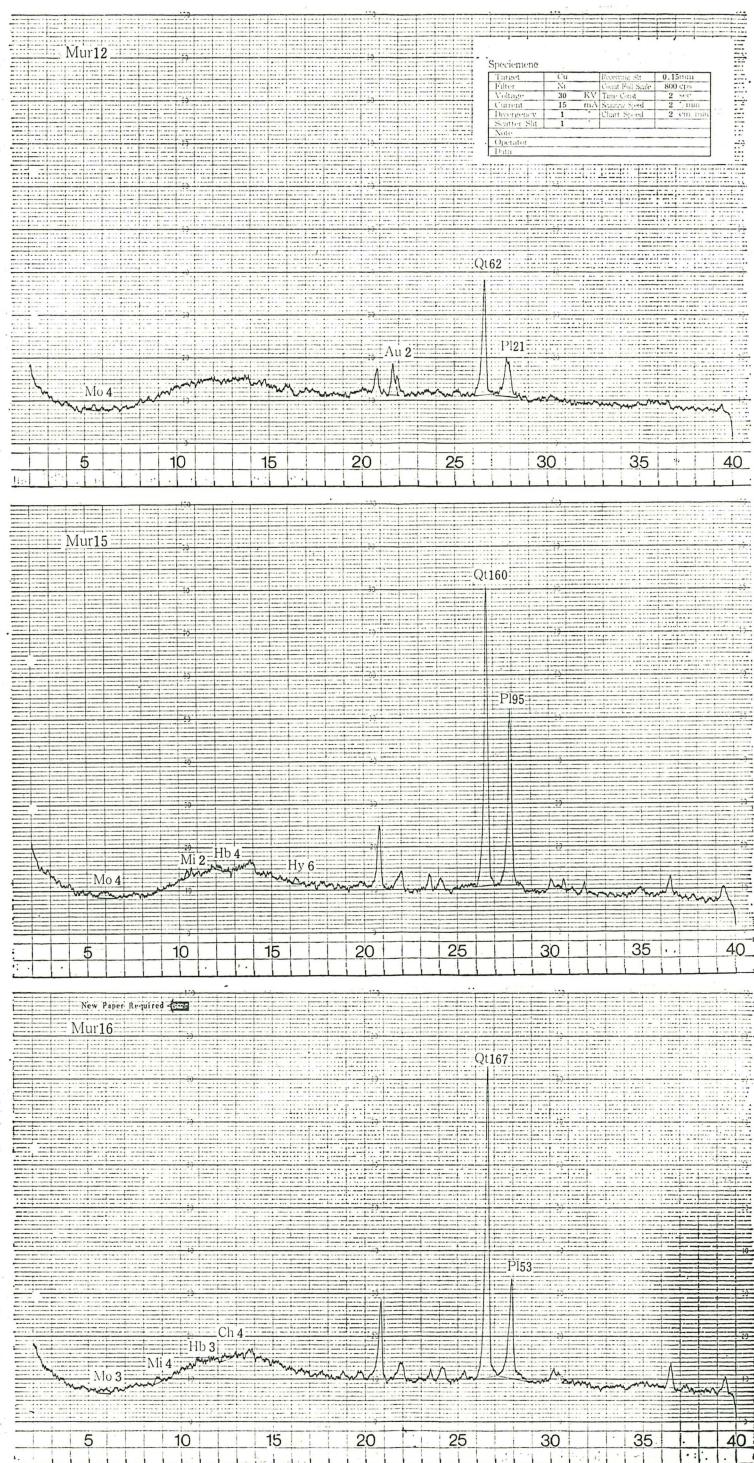
A、C、Dタイプの土器胎土と原土の組成が一致しなかったのは採取した原土の層準が異っていたかあるいは遺跡周辺（近い距離にある別の集団）からもたらされたため、原土と一致しなかったのかは明らかでない。

土器胎土中に混入された砂の混合比による分類では26試料のうち、17個がⅠ又はⅡグループのいずれかに属し、その他は9個と少ない。

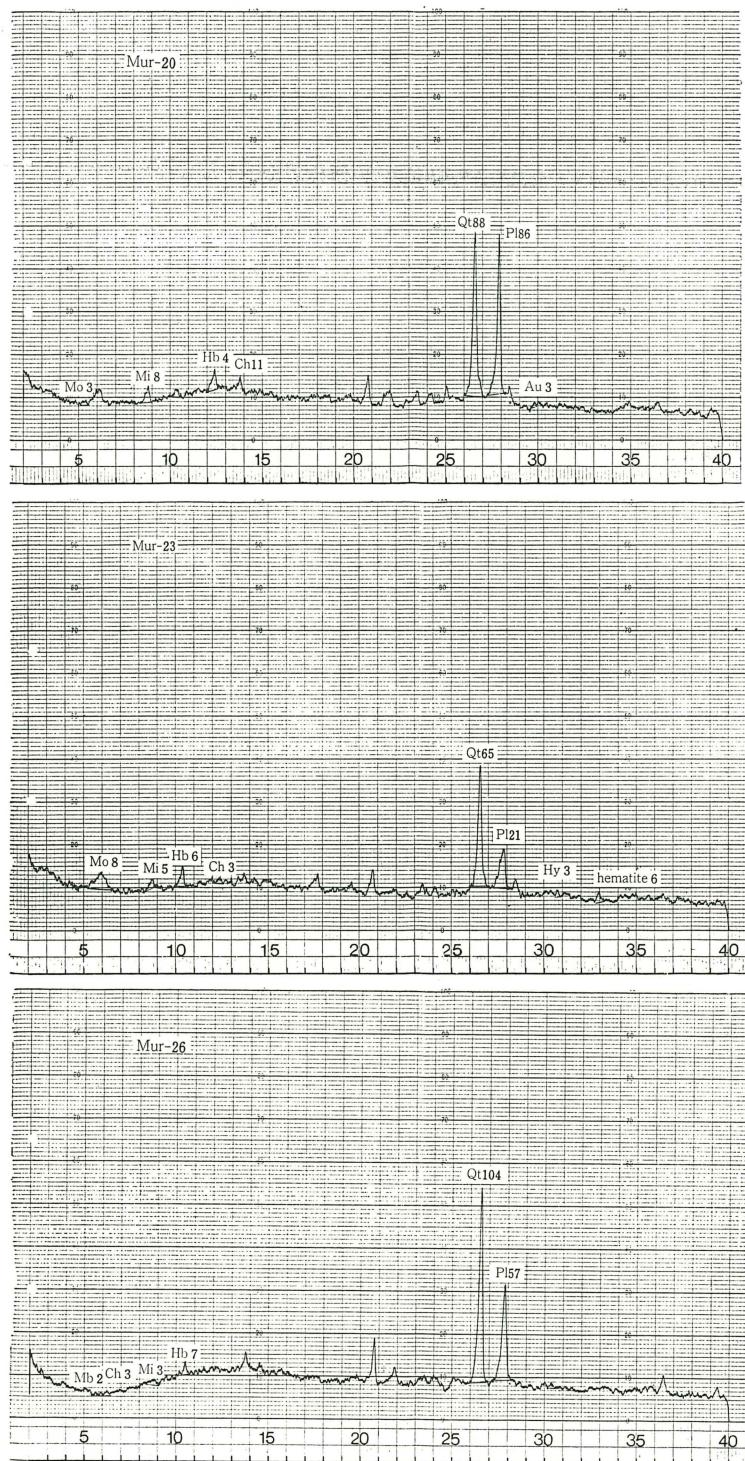
胎土中の砂の混合比はあくまでも良質の土器を焼成するための技術上の問題であるとすれば、若干、胎土の組成が異っても混合比が一致した場合には同一集団によって製作された土器とみなしてもよいのではなかろうか。この場合、村後遺跡では大きく、Ⅰ、Ⅱの2つのグループが存在し、2つの集団が存在していたものと考えられる。また、その他は各々、1個1個が集団を代表しており個々が別々の集団で製作されたとも考えられる。

表—1

試料 No.	タイプ 分 類	組成 ランク	粘土鉱物および造岩鉱物(mm)										ガラス量 Fe ₂ O ₃	備 考	
			Mo-Ch Mo-Mi-Hb Mo-Hb	Mo	Mo-Ch Mo-Mi-Hb Mo-Hb	Mo	Hb	Ch	[Ka(Ha)]	Au	Hy	Qt	P1	Cr(Mn)	
Mun-1	F	IV	⑬	⑭	3	4	4	4	5	2	3	126	30		
2	A	IV	①	①-2	4	3	3	3	5	2	3	158	60	u	u
3	A	III	①	①-2	4	3	2	4	3	2	2	145	52	5	細粒ガラス
4	A	IV	①	①-2	3	2	11	8	9	4	3	66	26		微小ガラス
5	A	IV	①	①-2	5	4	3	4	3	4	2	160	69		
6	A	IV	①	①-1	4	3	3	3	2	2	3	129	57		
7	A	III	①	①-2	4	3	3	3	2	2	3	79	34	7	細粒ガラス
8	A	IV	①	①-1	3	3	3	4	3	4	2	61	30		
9	A	IV	①	①-2	11	8	11	7	3	3	2	78	39		
10	A	IV	①	①-1	9	7	8	14	3	3	3	85	38		
11	E	IV	⑪	⑩	2	11	8	11	7	3	3	50	13		
12	E	IV	⑪	⑩	4	2	11	8	7	3	2	62	21	17	
13	A	IV	⑩	⑪-1	3	5	7	8	6	2	2	90	31		
14	A	IV	⑩	⑪-1	5	8	8	6	6	2	2	88	32	6	細粒ガラス
15	B	III	①	⑯	4	2	4	3	4	3	2	160	95		
16	A	III	①	⑯-1	3	4	3	4	8	6	2	167	53	(4)	
17	A	IV	①	⑯-1	3	3	4	3	7	3	3	86	30		
18	C	IV	②	⑯-2	3	3	5	3	7	3	3	82	18		
19	A	IV	①	⑯-2	3	3	5	3	5	3	3	76	38		
20	D	IV	③	⑯-1	3	8	4	11	11	3	3	88	86		
21	A	IV	①	⑯-1	3	5	3	3	4	8	4	84	114		
22	E	IV	⑪	⑯-2	3	8	5	6	3	3	3	76	24		
23	A	IV	①	⑯-2	8	5	6	3	3	4	3	65	21		
24	A	IV	①	⑯-1	4	5	3	3	3	3	3	97	18	5(")	
25	A	IV	①	⑯-1	3	4	3	3	3	3	3	117	41	5(mag)	
26	C	IV	②	⑯-2	2	3	7	3	7	3	3	104	57	3(")	
美型粘原土															
No.1			⑦	⑨	32	16	51	4	7	177	100				
2			⑦	⑨	29	27	51	4	115	50					
3			⑦	⑨	35	21	43	5	4	99	71				



第6図 Mur—12. 15. 16



第7図 Mur-20, 23, 26

2 花粉 珪藻分析 樹種鑑定 鉱物 プラントオパール

分析 C₁₄年代報告

埼玉県埋蔵文化財調査事業団殿より村後遺跡試料の花粉、珪藻分析、樹種鑑定、鉱物、プラントオパール分析、C₁₄年代測定の御依頼を受けました。このほど分析が終了しましたのでその結果を御報告致します。

I) 花粉分析

1 試料

分析資料は砂質粘土～粘土で合計12点である。表一2はこれらの試料表である。

2 分析方法

試料の秤量(20～30g) → HCl処理 ← Hf処理 → 重液分離 → アセトリンス処理 → HOH処理 → 封入(ゲリセリンゼリー使用) → 検鏡

3 分析結果

分析結果は、検出された樹木花粉の合計を基数として、各資料に於ける花粉、胞子化石の割合を算出し、表一2として後掲した

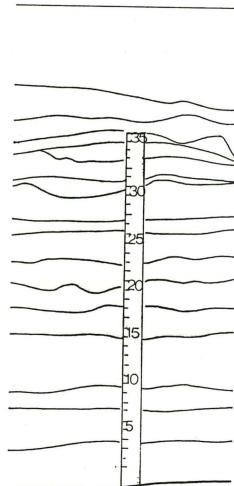
なお、表中最後のTOTALの欄は、花粉、胞子化石の総個体数を基数として表わした比率であり、AP-1(針葉樹花粉)、AP-2(広葉樹花粉)、NAP(草本花粉)、FP(形態分類花粉)、FS(シダ類胞子)各々の小計ではない。

また今回検出された主要な花粉、胞子化石についてはダイアグラムで表わし、第9図Aとして同様に後掲した。

今回の分析で検出された花粉、胞子化石は下記の如くである。

«AP-1(針葉樹花粉)»

Abies(モミ属)、Tsuga(シカ属)、Picea(トウヒ属)、Pinus(マツ属)、Cryptomeria(スギ属)



第8図 試料採取層序
(第2図参照)

表— 2

試 料 表

試 料 番 号	土 質	花粉・胞子化石産出 傾向※
A地点No.35	暗褐色シルト質細砂	R R
" 32	" 粘土	R R
" 29	黒褐色 "	R R
" 27	"	R R
" 24	暗褐色 "	R R
" 21	黒褐色 "	R R
" 19	黒褐色砂質粘土	R R
" 16	シルト質粘土	R R
" 12	暗褐色粘土	R R
" 8	黒褐色 "	R
" 5	褐灰色粘土	R
" 1	"	R R

※ R : 少ない R R : 少ない R R : 極くまれ

<<AP—2 (広葉樹花粉)>>

Myrica (ヤマモモ属)、Taglans (クルミ属)、Pterocarya (サクグルミ属)、Alnus (ハンノキ属)、Betula (カバノキ属)、Carpinus (クマシデ属)、Corylus (ハシバミ属)、Fagus (ブナ属)、Lepidofalanus (コナラ属)、Cyclobalanopsis (アカガシ属)、Celtis (エノキ属)、Aphananthe (ムクノキ属)、Telkova (ケヤキ属)、Moraceae (クワ科)、Acer (カエデ属)、Aesculus (トチノキ属)、Aralcaceae (ウコギ科)、Fraxinus (トネリコ属)、Ucbvrnum (ガマズミ属)

<<NAP (草本花粉)>>

Persicaria (サナエタデ節)、Caryopyllaceae (ナデシコ科)、Chenopodiaceae (アカザ科) Thalectrun (カラマツソウ属)、Cruciferae (アブラナ科)、Rcesaceae (バラ科)、Umbelliferae (セリ科)、Artemisia (ヨモギ属)、Carduoideae (キク亜属)、Cichorioideae (タンポポ亜科)、Sagittaria (オモダカ属)、Grawineae (イネ科)、Typha (ガマ属)、Cyperaceae (カヤツリグサ科)、Cascuta (ネナシカズラ属)、Macleya (タケニグラ属)

<<FP (形態分類花粉)>>

Tricgorporate Pollen (三孔型花粉)

Tricgonocolpate Pollen (三溝型花粉)

Trigonocolporate Pollen (三溝孔型花粉)

<<FS (羊歯類胞子)>>

Lycopodium (ヒカゲノカズラ属)、Pieris (イノモトソウ属)、Polypodiaceae (ウラボシ科) Salvinia Natans (サンショウモ)、Monolete spore (单条溝型胞子)、Thilet spore (三条溝型胞子)

<<その他微化石>>

Pseudoschigaea (淡水生藻類)

次に、分析結果について述べる。

表一の花粉、胞子化石の産出傾向から明らかなるとおり、今回の試料は花粉、胞子化石が全般的に少なかった。とくにNo.12、No.16は非常に少なかった。花粉、胞子構成の特徴は、No.1～No.21までの羊歯類胞子を優占とする部分とNo.24～No.35までの草本及び広葉樹花粉を優勢とする部分に大きく2分される。今仮りに、No.1～No.21までをMu—1帯、No.24～No.35までをMu—2帯とすると次のようないい特徴がある。

Mu—1帯は、単条溝型胞子が圧倒的に多く、引き続いてウラボシ科、イノモトソウ属等が検出された。

花粉化石は草本のヨモギ属が多産したほかは非常に少なく、イネ科、コナラ亜属が低率ながら検出された。

従ってMu—1帯は羊歯類が繁茂するような特殊な環境が推定される。特にNo.19は、サンショウモが検出されたことから池沼又は沼沢地的環境も推定される。

後半のMu—2帯になると、羊歯類胞子の割合は減少した反面、イネ科、[■]ヨモギ属等の草本の割合が高いことが特徴である。とくに、オモダカ属、ガマ属等の水生植物の花粉が比較的高率で検出されたことも当帯の特徴である。

樹木花粉は、コナラ亜属、アカガシ亜属が比較的高率で検出されたほかは、ケヤキ属、クマシデ属、ブナ属等の広葉樹花粉が検出された。また、針葉樹花粉はスギ属が低率ながら検出されたほかは少なかった。

従って、Mu—2帯は、イネ科、ヨモギ属、オモダカ属、ガマ属等が生育する池沼的環境が推定される。また、近くには、コナラ亜属、アカガシ亜属、ケヤキ属等の広葉樹が生育していたであろう。

古気候的には、アカガシ亜属等の生育からみて比較的温暖であったと考えられる。

2) 硅藻分析

1 試料

分析試料は、粘土～砂質粘土に及び合計15点である。表一3はこれらの試料表である。

2 分析方法

試料の秤量(10g) → H₂O₂処理 → 沈降法により粗粒除去 → 分散剤を加え粘土粒子除去 → L字形管法により細砂除去 → 希釀 → 敷布 → 乾燥 → 封入(プリュウラックス使用) → 検鏡

なお、検鏡に際しては1000倍で250又は200個体になるように鑑定した。

3 分析結果

分析結果は、検出された硅藻化石総数を基数とする百分率で各試料における硅藻化石の割合を算出した。主要な化石種についてはダイアグラムで表わし、第9図Bとして同様に後掲した。

今回の分析で検出された硅藻化石は下記のものである。

表—3

試 料 番 号		土	質	珪藻化石產出※ 傾向
A 地点	No.34	褐灰色 砂質粘土		C
	32	" "		R R
	29	" 粘土		R
	26	" "		C
	24	" "		C
	22	" "		C
	19	黑褐色 砂質粘土		C
	16	" "		R
	14	" "		
	12	" "		A
	10	褐灰色 粘土		A
	8	" "		A
	6	" "		A
	4	" "		A
	2	黑色 "		A

※ A : 多い

C : 普通

R : 少ない

R R : 非常に少ない

<<Marine and Brachish water species (海水～汽水生種)>>

Coccconeis scutellum, Diploneis smithii

<<Brackish water species (汽水生種)>>

Achnathes brevipes var intermedia, Coloneis formosa, Nauicula cf crucicula.

<<Brackish and Fresh water species (汽水～淡水生種淡)>>

Anomoeoneis sphaerophora, Amphorea ovalis, A. o. var. pediculus, A. coffeaeformis, Caloneis silicula, ovalis, D. o. var oblongella, Epithemia turgida, E. cf. turgida, Hantzschia amphioxys, H. a. fo. capitala, H. a. var. maior, Nitzschia amphiqia N. obtusa, N. hungarica, Rhoicosphenia curvata, Rhopalodia gibberuea, R. musculus,

<<Fresh water species (水生種)>>

Achnanthes lanceolata, A. l. var. rostraAa, A. e. var. elliptica, A. peragllii, A. inflata, A. exigua, A. crenulata, A. Oestruppii, Caloneis bacillum, C. Schroederi, Coccconeis placentula, C. p. var. eugeypta, C. p. var. lineata, C. disculus, C. diminuta, Cydotella sp, C. Meneghiniana, C. comta var. C. ocellata, C. operculata, C. spp., Cymbella lanceolata, C. Ehrenbergii, C. cuspidata, C. naviculiformis, C. affinis, C. tuncida, C. ventricosa, C. turgidula, C. cymbifermis, C. gracilis, C. sinuata, C. cistula, Diploneis elliptica, Epithemia sorex, E. zebra 'E. z. var. saxonica, E. z. var. var. porcellrs, Eunotia praerupta, bidens, E. p. var. inflata, E. pectin-

alis, E. p. var. minor, E. p. var. undulata, E. monodon, E. m. var. maior, E. arcus, E. avarbidens, E. Sndetica, E. braciensis, E. tenella, E. lunaris, E. kocheilensis, E. valida, *Fragilaria brrvistriata*, F. constriata, F. c. var. vcnter, F. c. var. binodis, F. virescens, F. pinnata, F. harrissonii var. dubia, F. intermedia, *Frustulavulgaris*, *Gomphonema acuminatum* var. Bfebissonii, G. a. var. trigonocephala G. a. var. coronata, G. a. var. turris, G. constrictum var. capitata, G. longiceps var. subclavata fo. gracili, e. G. e. var. subclavata, G. olivaceum, G. o. var. calcarea, G. auger vor. G. gracile, G. subtile, G. parvulum, G. angustaum, G. a. var. producta, G. abbreviatum, G. lingulatum, G. tergestinum, G. bohemicum, *Gyrosigma kiitzingii*, *melosira* sp., M. italica, M. distans var. decipiens, Meridion circulae, M. c. var. constricta, Navicnla sp., N. dicephala, N. anglica, N. exigua, N. exigua, N. pupula, var. rectang ularis, N. p. var. capitata, N. americana, N. radios, N. placenta, N. contenta fo. parallela, N. mutica, N. cuspidata, N. cuspidata, N. c. var. ambigua, N. contempta, N. cf. contempta, N. placentula, N. cf. placentula, Neidiumirids, N. i. fo. vernalis, N. affine, N. a. var amphirhynehus, N. dubium fo. constricta, N. produotum, N. bisulcatum, Nitzschiasp., N. romama N. fonticola. *Opephora martyi*, *Pinnularia* sp., P. maior, P. hemiptera, P. brevicostata, P. acrosphaeria, P. nodosa, P. viridis, P. v. var., P. v. var. sudetica, P. gibba, P. g. var. line, aris, P. fo. subun dulata, P. stomatopaora, P. borealis, P. divergens var. undulata, P. microstauron, P. m. vor. brecissonii, P. interrupta, P. mesolepta, P. subcapitata, P. leptosoma, Rhopalodia gibba, Stauroneis sp., S. phoeiclonteron, S. aneeps, S. a. fo. gracilis, S. acuta, S. smithii, Synedra ulna, S. u. var. biceps, S. rumpens, S. vaucheria, Tabellaria fenestrata, T. flocculosa,

《その他》

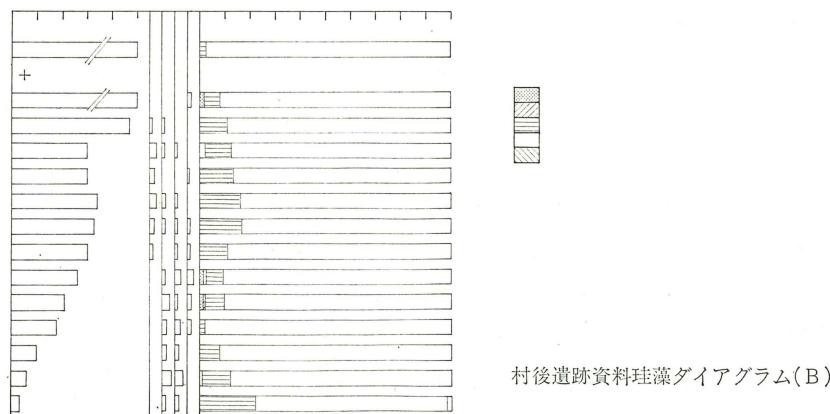
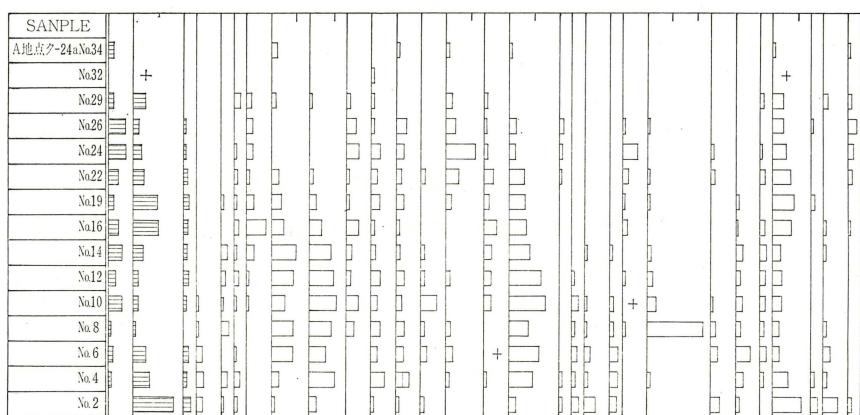
unidentified diatoms,

次に、今回の試料は珪藻群集の特徴から下位よりMu—B, Mu—Cの3群集帯に分帶することができる。以下各帯ごとにその特徴及び堆積環境について述べる。

○Mu—A帯 (No. 2, 4, 6)

Coccconeis placentula, C. placentula var. euglypta, *Hantzschia amphioxys*, *Nauicula mutica*, *Synedraulna* 等の好正水生種が高率で検出されたことが特徴である。また、これに付随して、*Eunotia pectinalis* var. minor, E. evnaris, E. tenella, *Pinnulariaborrealis* 等の好酸性、好湿地生種及び、*Achnanthes anceolata*, A. e. var. elliptica, *Caloneis bacillum*, *Pinnularia subcapitata* 等の好流水生種、さらに、浮遊生の *Melosira distans* が比較的高率に検出された。

従って、Mu—A帯は地沼等の止水域での堆積物と考えられる。また、好酸性、好湿地生種も比較的多く検出されたことから湿地的環境も存在していたことが考えられる。



第9図 村後遺跡試料花粉(A) 硅藻(B) ダイヤグラム

○Mu—B帶 (No. 8、10、14、16、19、22、24、26)

Mu—A帶に引き続いて好アルカリ性・着生の *Synedra ulna* が急増し安定化することが特徴である。また、*Coccconeis placertula*, *C. placentula* var. *euglypta*, *Amphara ovalis*, *Hantgschia amphioxys*, *Cymbella turgidula* 等の好アルカリ性、好止水生種及び *Eunotia pectinalis* var. *minor*, *E. pectinalis* 等の好酸性) 好湿地生の種も高率で検出された。さらに *Caloneis schroederi*, *C. bacillum*, *Cymbella ventricosa*, *Meridion circulae* var. *constricta* 等の好流水生の種も比較的高率で検出された。

従って、Mu—B帶は止水生種が優占することから、水域の安定した池沼域における堆積物と考えられる。また、浮遊性の *Melosira distans* var. *decipiens* が連続検出されたこともこのことを示していよう。

○Mu—C帶 (No. 29、34)

これまで種褐・量ともに多かったが、この帶になると共に減少の傾向がみられる。特徴は、Mu—B帶で安定した *Synedra ulna* がさらに増加すること及び、*Coccconeis placentula*, *C. p. var. eujhypta*, *Cymbella turgidula*, *Melosira distans* var. *decipiens* 等の止水生種や浮遊生種が減少または検出されないことである。このほか、*Caloneis bacillum*, *C. schroederi*, *Cymbella ventricosa*, *Meridion circulae* var. *constricta* 等の好流水生種は前帶に引き続き検出される。

以上のことからMu—C帶は池沼の縮小または、堆積盆の移動等により水深のごく浅い不安定な水域に変化したことがうかがわれる。このことは、多産する *Synedre ulna* は大部分が破損を受けた破片であったこと、No.32からはほとんど珪藻化石が検出できなかったこと、岩質的に砂勝ちになること等から珪藻の生息にとっては不都合な環境であったと推定されるからである。

参考文献

- F. Hustadt (1930) (Reprint '76) Bacillcar iophyto (Piatomeae) Heft 10 in paseher, A. Dil Siisswasser — Flora Mitteleuropas, Tena, 466 p
D. Werner (1977) The Biology of Diatoms Botanical monographs vol. 13 498 p
N. Foged (1980) Diatoms in Dland, Sweden Band 49, Bibliotheca phycologica p. 193
R. Ross (1981) Proceedings of the Sintn Symposium on Recent and Fossil Diatoms P. 487
胡 鴻鈞他 5 (1979) 中国淡水藻類 中国科学院水生生物研究所 P. 525

総合考察

花粉・珪藻分析の結果を総合的に考えてみると、池沼等の水域の存在が考えられるMu—A帶、及びそれが安定した池沼域となったと考えられるMu—B帶は、花粉分析では羊歯類優占の古環境が示された。これはおそらく池沼沿岸の湿潤な場所に生育する羊歯類胞子が池沼に流れ込み、これが反映されたとも解釈されよう。また、サンショウモがNo.19から検出されたは、当時の水面に或る程度生育していたものと考えられる。

Mu—C帶になって、水深が浅くなり珪藻の生息に不適な不安定な水域になると、オモダカ属、ガマ属等が生育しさらに、ヨモギ属、イネ科が近くに繁茂する或る程度乾燥した環境へと変化したものと考えられる。そして、後背地にはコナラ亜属、アカガシ亜属、クマシデ属、ケヤキ属、等の

広葉樹褐も生育していたものと推定される。

3) 樹種鑑定

1 鑑定方法

鑑定は、肉眼、双眼実体鏡による断面観察と、合成樹脂を用いて作成した木口、征目、板目の三面の徒手切片の生物顕微鏡での観察とを併せて行なった。

2 鑑定結果

鑑定結果を一覧表に示す。

次に各試料の解剖学的特徴を記載する。

表—4 鑑定結果

試料番号	種	名
20号住②	Juojlaxs cf ailantifolia	(クルミ屋、おそらくオングルミ)
20号住④	Quehcus cf acutissima	(コナラ属、おそらくクヌギ)
21号住①	Cf Hovenia dulcis	(おそらくケンボナシ)

○20号住 ② *Tuglans cf ailantifolia*

散孔材で、管孔壁はやや薄く、楕円形～長楕円形、時に2～4ヶ複合する。单せん孔を有し壁孔はやや大型、やや密に交互状に配列、孔口は楕円形～横長、柔細胞との間では、大型で網状となる。柔組織は短接線状および周囲状放、射組織はほぼ同性であるが、上下端が方形となり、異性的となることもある。1～5細胞中で単列のものは10細胞高以下、複数列のものは30細胞高を越える。単列のものの頻度は小さい。また、放射柔細胞壁は单壁孔対が目立ち粗い印象を与える。年輪界はやや不明瞭である。

○20号住 ④ *Quercus cf. acutissima*

環孔材で孔圈部は1～2列、孔圈外では大きさを急激に減じ放射状に配列。管壁はやや厚く、楕円形、共に単独、单せん孔を有し、壁孔は密で交互状に配列、孔は小型。柔組織は短接線状および周囲状。放射組織は同性、まれに部分的(1～2細胞高)複列となる単列、10細胞高前後のものと複合放射組織よりなる。本試料は保存状態が特に悪く、管孔の配列等から上記クヌギにほぼ間違いないと思われる。細部の確認ができないため確定はできない。

○21号住 ① cf *Hovenia dulcis*

環孔材で孔圈外部は3～5では次第に大きさを減じ散在する。このため孔圈部はあまり明瞭ではない管壁は厚く、楕円形～円形または長楕円形、ややまれに2～3ヶが放射～斜方向に複合、複合部壁は更に厚くなる。单せん孔を有し、壁孔は小型、交互状に配列、孔口は小型、やや円形。柔組織は周囲状でやや翼状を帯びる。放射組織は異性Ⅲ型で1～6細胞中、単列のものは直立細胞のみからなり、2～10細胞高、複数列のものは20～40細胞高で、密度が高く、時に集合放射組織への移行段階にあるかのような印象を与える。年輪界はやや明瞭である。

4) 鉱物分析

1 試料

試料は、埼玉県児玉郡美里村小茂田に位置する本遺跡A地点（タ—24—a・第8図）から採取した1点である。黒褐色（10YP3/2）有機質砂質シルトで、雲母片や軽石が散在する。

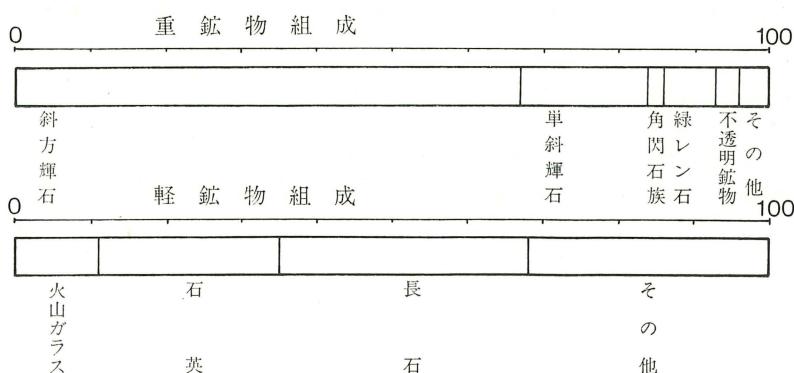
2 分析方法

試料約60g（湿重）秤量→超音波装置を用いて泥化→泥分除去→分析篩（60メッシュ、120メッシュ）を用い1/4—1/8mm粒径砂分を乾式篩別→秤量→テトラブロモエタン（比重2.96）を用い重鉱物と軽鉱物とを分離→秤量→プレパラート作成→偏光顕微鏡下で重、軽鉱物各300個体以上同定。別に乾燥重量を求め、乾燥試料中の1/4—1/8mm粒径砂分量（重量）1/4—1/8mm粒径砂分中の重鉱物量を算出。

表—5

試 料 番 号	(注1) S	(注2) H I T	重 鉱 物 組 成								固定 重 鉱 物 個 数	
			斜 方 輝 石	單 斜 輝 石	角 閃 石 族	雲 母 族	綠 レ ン 石	ザ ク ロ 石	不 透 明 鉱 物	そ の 他	合 計	
	4.3	9.4	66.8	16.9	1.8	+	6.8	0.6	3.1	4.0	100.0	325

軽 鉱 物 組 成										固定 軽 鉱 物 個 数	
火 山 ガ ラ ス					F'	石 英	長 石	雲 母 族	そ の 他	合 計	
A'	B	C	D	E							
1.3	4.4	0.9	0.6	1.3	0.9	1.2	13.1	44.2	0.9	31.2	100.0
											321



第10図 村後遺跡A地黒（タ—24—a）試料鉱物分析結果

2 分析方法

試料の秤量（10g）→H₂O₂処理→傾斜法により粗粒砂を除去→分散剤（ピロリン酸ナトリウム）

3 分析結果

分析結果は、表—5、第10図に示す。火山ガラスの形態分類は遠藤、鈴木（1980）に従い、細粒結晶片を含むF型火山ガラスはF'型として区別した。試料中に含まれる砂分は、極細粒砂が最も多く、細粒砂・中粒砂がこれに続く。乾燥試料中に占める1/4—1/8mm粒径砂分（細粒砂）は4.3である。砂分全体に雲母片が多い。1/4mm以上の粒径砂分中には褐鉄鉱が含まれ、片岩などの岩石片も存在する。軽石は最大粒径1mm程度で、白色、発泡は中程度～良、斜方輝石、斜長石、不透明鉱物等の斑晶を伴う。

1/4～1/8mm粒径砂分中の重鉱物量は9.4%と少量である。

重鉱物組成は、斜方輝石が66.8%と優占し、単斜輝石（16.9%）がこれに続く。斜方輝石・単斜輝石・不透明鉱物の一部には、無色のC・F・F'型等の火山ガラスの付着が認められ、テフラ起源の斑晶鉱物と考えられる。斜方輝石は中角柱状の新鮮な自然結晶が比較的多い。緑レン石・淡緑色角閃石・サクロ石（無色・淡黄色）・雲母等が少量含まれるが、全てこわれた形態を示す。これらは变成岩褐その他の後背地に露出する岩体に由来する鉱物粒子と考えられる。

軽鉱物では、長石が44.2%と多産し、石英が13.1%とこれに続く。「その他」は31.2%あり、岩石片などが多い。火山ガラスは軽鉱物全体の10.6%で、そのうちB型がやや多い。石英・長石の大部分はこわれた形態を示すが、長石の一部には無色のC・F・F'型火山ガラスが付着する自形～半自形の斜長石が含まれている。この斜長石はテフラ起源の斑晶鉱物と考えられる。淡緑色の雲母が0.9%産出する。

以上の結果から本試料には斜方輝石・単斜輝石・不透明鉱物・斜長石を一次鉱物とする軽石質火山灰と後背地から運搬された砂分との混合からなるものと考えられる。前者のテフラは鉱物組成からみて浅間火山起源である可能性が考えられる。斜方輝石の最大屈折率（8）を新井（1972）の方法に従って測定したところ、 $\delta=1.708\sim1.713$ （主要レンジ1.708～1.711、モード1.709）の値が得られた。これは浅間A降下軽石層、浅間B降下スコリア・軽石層、及び浅間C降下軽石層の屈折率の値（新井、1979）と一致する。軽石の発泡が比較的良好であること、考古学的資料から4世紀前後の堆積物と推定されることなどから本試料は浅間C降下軽石層に対比される可能性が考えられる

参考文献

- 新井房夫（1972） 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究。
第四紀研究、vol. 11、P. 254～269
- 新井房夫（1979） 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル、No.157、P.41～52
- 遠藤邦彦・鈴木正章（1980） 立川、武藏野ローム層の層序と火山ガラス濃集層。考古学と自然科学、No.13、R. 19～30

5) プラントオパール分析

1 試料

分析試料はA地点（タ—24—a）から得られた6点である。表—6はこれら試料の土質、微化石産出傾向をまとめた試料表である。

表一6

試料番号	土質	プラントオパール 産出傾向
No. 9	黄灰色シルト質粘土	A
6	褐灰色	A
4	褐灰色粘土	A
3	黒色粘土	A
2	黒色シルト質粘土	A
1	"	A

註1 試料の色調は小山・竹原(1967)の標準土色帖による 註2 A多い

2 分析方法

試料の秤量(10g) $\rightarrow \text{H}_2\text{O}_2$ 処理 \rightarrow 傾斜法により粗粒砂を除去 \rightarrow 分散済(ピロリン酸ナトリウム)を加え粘土粒子を除去 \rightarrow 遠沈管に移し重液分離 \rightarrow 水洗 \rightarrow カバーガラス上に散布 \rightarrow 乾燥 \rightarrow 封入(キシロールバルザム) \rightarrow 検鏡(400倍)

3 分析結果及び考察

各試料から検出されたプラントオパールは、佐藤・近藤(1974)の分類基準に従い、大型(ファン型、棒状型、ポイント型)小型(ササ型、ヒゲンバ型、キビ型、ウシノケグサ型)樹木等に分類してその検出個体数を表2-2にまとめた。

この中で産出頻度の高い種については合計を基数とする比率のダイアグラムを作成し第10図として後掲した。さらに、主なプラントオパールについては表4に表わした。

次に分析結果を述べる。

(大型植物珪酸体)

○ファン型

図版のFig18、19、20、21に示されるとうり扇状、食パン形状態を呈する。

イネ科植物葉部表皮細胞の機動細胞に由来するもので、ヨシに含まれるものは形が大型である。また、ウシノケグサ亜科に形成されたものは葉身の長軸方向に長い等の特徴があるが量的に極めて少ないとされる(近藤1981。)

当遺跡ではNo.3を最小(約13%)とする凹形の消長がみられ、上部のNo.9(約33%)で最大となる。

○棒状型

図版のFig14、15、16、17に示されるような棒状を呈する。

イネ科の部表皮細胞に由来されるものであるが特定の植物分類グループとの関係はない。またカヤツリグサ科や他の単子葉類にも認められるとされる(近藤1981)。

当遺跡では下部(No.1)と上部(No.9)で少なかったほかは20%前後検出された。

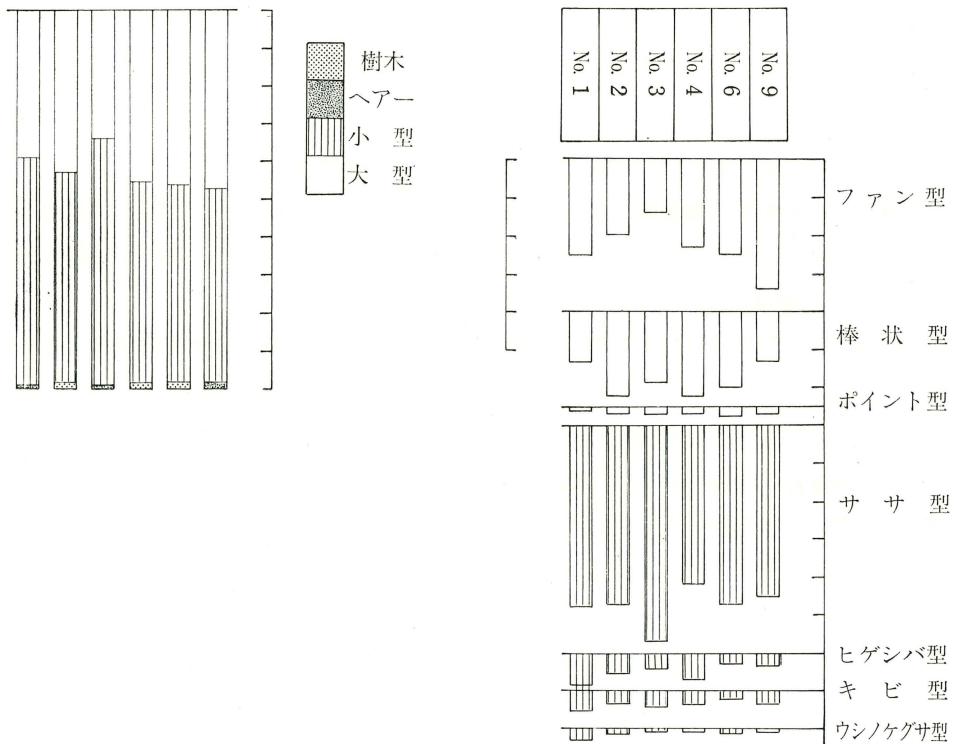
○ポイント型

図版のFig22、23に示されるように矢尻に似た形態を有する。

イネ科葉部の表皮毛(prickle hair)に由来する珪酸体で植物分類グループ別と一致した形態は示さないが、ウシノケグサ型亜科及び、タケ亜科の一部の属に多量に含まれるとされる(近藤1981)。

表—7 プラントオパール分析結果

試料番号 \ タイプ	ファン型	棒状型	ポイント型	大型	ササ型	ヒゲシバ型	キビ型	ウシノケグサ型	小型	ミクロヘアーライド	ヘアーライド	はめ絵パズル状	平板状	ブレイド状	樹木合計	全合計	珪藻	大型	小型	ヘアーライド	樹木
	型	型	型	合計	型	型	型	型	合計	ヘアーライド	ヘアーライド	状	状	状	合計	計	(%)	(%)	(%)	(%)	
1	90	51	4	145	177	32	19	6	234		0	1			1	360	極めて多い	38.2	61.5	0.0	0.0
2	94	104	7	205	216	26	16	3	261		0	1	2		3	469	〃	43.7	55.7	0.0	0.0
3	54	77	6	137	223	17	17	2	259		0	1			1	397	〃	34.5	65.2	0.0	0.0
4	109	106	7	222	204	39	17	2	258		0	1	1	2	4	484	〃	45.9	53.3	0.0	0.8
6	103	89	9	206	207	14	11	2	231		0	1	1	2	5	442	〃	46.6	52.3	0.0	1.1
9	154	57	6	217	203	16	16	1	236	3	3	2		1	1	457	〃	47.5	51.6	0.7	0.2



第11図 村後遺跡試料主要プラントオパールダイヤグラム

当遺跡ではいずれの試料も 1 % 前後と少なかった。

(小型植物珪酸体)

○ササ型

イネ科の短細胞起源に由来し、タケ亜科に特有なものでササ類にとくに多い。また、ササ属に含まれるものはメダケ属に含まれるものに比べて大型である等の特徴を有する。さらに、北海道、東北で得られたものはミヤコザサやチシマザサに起源し、関東以南で得られたものはネササに由来する可能性が高い。

○ヒゲシバ型

鞍型あるいは両刃の戦闘斧の形態を呈する。

ヒゲシバ属、シバ属などのスズメガヤ亜科、ヨシの葉部表皮細胞に普遍的に含まれるものである
当遺跡では多くはなかったが上部から下部へ増加する傾向が認められる。

○キビ型

ススキ、チガヤ、トウモロコシなどのキビ亜科の葉部表皮細胞に特徴的に含まれる。

当遺跡では、下部から上部にかけて 4 % 前後検出された。

○ウシノケグサ型

図版のFig12、13に示される形態のほか橢円形、ポート状、コンペイ糖状形態を有する。

ヌカボ、ウシノケグサ、コムギ類などウシノケグサ亜科の葉部表皮細胞に特徴的に含まれるもの
であるが、当遺跡では非常に少なかった。

(樹木起源のプラントオパール)

葉部の表皮細胞、表皮毛、表皮基部及び維管束細胞に由来するもので形態も様々であり、はめ絵
パズル状、平板状、ブレイド状等がある。当遺跡では、それぞれの形態が散見される程度であった。

以上各形態ごとに産出の特徴を述べたが、これらのうち植物分類グループと関係の深い小型珪酸
体のうちササ型が優占して検出されたことからネザサを主とする草地植生が付近に存在したことが
考えられる。

プラントオパールの他に珪藻化石が極めて多く含まれることから水中堆積した堆積物と考えられ
る。このことは、前回の結果から明らかである。

引用文献

八王子弁天橋遺跡調査会 1981 弁天橋遺跡

佐瀬隆、近藤鍊三 1974 北海道の埋没火山灰土腐植層中の植物珪酸体について、帯広畜産大学学術報告
(第1回) 8号、465→483

6) C₁₄年代測報告

貴、埼玉県埋蔵文化財調査事業団より御依頼のありまし、児玉群美里村村後遺跡のC₁₄年代測定結果を御報告致します。

1 試料

試料は2軒の住居跡より採取された炭化材2点である。それぞれの試料については表一4を参照されたい。

2 測定

測定は日本アイソトープ協会が行なった。

3 結果

測定結果は、表一8参照

年代はC₁₄の半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数（YearsB.P）として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統許誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読み取りの誤差から計算されたもので、C₁₄年代がこの範囲に含まれる確立は約70%です。この範囲を2倍に拡げますと確立は95%となります。なおC₁₄年代は必ずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。（御希望の方にはこれに関する参考文献を差し上げます。）

この測定結果についてコメントがございましたならば、是非お聞かせ下さいますようお願い申し上げます。

社団法人 日本アイソトープ協会

表一8 試料表

採取地点	試料番号	試料の質	時代	C ₁₄ 年代測定結果
20号住	②	炭化材	弥生時代中期	2900±80 B P (2820±75 B P)
21号住	①	"	"	2220±65 B P (2160±60 B P)